

CENTER FOR
SOUTHEAST ASIAN
STUDIES
KYOTO UNIVERSITY



京都大学 東南アジア研究所要覧

平成16年度



2004年4月1日、東南アジア研究センターは東南アジア研究所に改編され、京都大学の附置研究所として再出発しました。4月2日、関係教職員が多数見守る中、尾池和夫京都大学総長、本間政雄京都大学理事、田中耕司東南アジア研究所所長、白石隆副所長の立ち会いのもと、東南アジア研究所看板除幕式が執り行われました。

フィールドから見た東南アジア（1）

東南アジア研究所では科学研究費補助金による調査研究を多数実施してきた。その概要をグラビアシリーズで紹介していきたい。まず今回は、平成15年度をもって終了した以下の二つのプロジェクトを取り上げる。

「ウォーラセア海域における生活世界と境界管理の動態的研究」

自然地理学上の分類線であるウォーレス線は、ロンボク海峡からマカッサル海峡を北上し、ミンダナオ島の東北に抜ける。ウォーレス線の東に広がるのがウォーラセア海域である。ウォーラセア海域は、多様な森林産物と海産物を有する多島海で、古くから海を媒介とする人とモノのネットワークが発展してきた。ブギス人が誇るビンシ船は、ウォーラセア海域におけるネットワークをつくってきた海運の主役である（写真1）。フローレス島ではキリスト教が多数派であるが、港や商業の場においてはブギス人などのムスリムが目立っている（写真2）。カツオを一本釣りするブトン人もブギス人同様に、ウォーラセア海域の各地に移住村を形成してきた（写真3）。バジャウ人は海に生活の多くを依存する海洋民で、ウォーラセア海域の広い範囲に分散居住している。古くから彼らは、ナマコやフカヒレなどの華人向け海産物の採取を生業としてきた（写真4）。

「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」

バングラデシュのチャッタゴン地区のチャッタゴン丘陵からコックスバザールとミャンマーのラカイン州にかけての地域では、多数の少数民族が暮らしている。その多くは、女性は布を腰に巻き、ブラウスという服装である。チャッタゴン丘陵では女性の機織が盛んで、各民族によって腰布に独特のデザインを施す（写真6）。焼畑、水田、漁業を生業とする暮らしぶりにおいても共通する点が多く、この地域は歴史的にも相互交流が深い。バンコクからダッカへの空路、アラカン（ラカイン）山脈、チャッタゴン丘陵を横断することになるが、3月には上空からでもパッチ状に広がった山の斜面での焼畑を肉眼でも判断できる（写真7）。現在、この地域の水田耕作ではベンガル湄からビルマ湄への変化が国境を越えて進行しつつある。この地域が国境を跨いでいるが一つの地域であることを主張するかのような現象である（写真8）。丘陵がベンガル湾に接近している立地条件から、沿岸漁業が盛んであり丘陵地帯の村の定期市にも海の幸が並ぶ。この地域の少数民族は一部キリスト教徒であるが、大多数は上座仏教を信仰している。チャッタゴン丘陵からシットウエーに修行にきている若い少数民族の修行僧も珍しくない。

ウォーラセア海域における 生活世界と境界管理の動態的研究



写真1 スンバワ島、ビマ港に停泊するピンシ船（2002年1月）



写真2 市場で金を売るブギス人（フローレス島、エンデ港，2002年1月）



写真3 ブトン人のカツオ一本釣り漁師（フローレス島、マウメレ，2002年1月）。水揚げされたカツオは鰹節に加工され、日本に出荷される



写真4 船上生活のバジャウ人（スラウェシ島、ゴロンタロ，2002年2月）。古くからバジャウ人は、ナマコやフカヒレなどの華人向け海産物の採取を生業としてきた（写真もナマコ漁師）



写真5 路傍で売られるハタ科の干魚（南スラウェシ，マカッサル近郊，2002年2月）。干魚は地域社会における主要な商品である

バングラデシュとミャンマーの 少数民族における持続的農業と農村開発



写真6 チッタゴン丘陵のチャクマ族の機織
(ランガマティ県デワン村にて、
2003年11月)



写真7 チッタゴン丘陵の焼畑 (バンドール
ボン県, 2001年3月)



写真8 チッタゴン地区で使われている3
タイプの犁 上(ビルマ型:シアミ)
中(中間型:テリー) 下(ベンガル
型:ナンゴール) (ランガマティ県
デワン村, 2002年12月)



写真9 ラカイン族の上座仏教の僧
(シットウー県カラダン川沿
いの寺にて, 2003年12月)



写真10 食事を運ぶラカイン族の
女性 (シットウー県ミャ
ウー近郊, 2003年12月)



写真11 漁から帰る (ラカイン州グアにて,
2001年11月)

ま え が き

国立大学が法人化された年として、2004年は、私たち大学人だけでなく他の多くの人たちにとっても記憶に残る年となるに違いありません。その2004年の4月、平成16年度から、東南アジア研究センターは「東南アジア研究所」として新たな歴史を刻んでいくこととなります。

1965年の官制化以来、幾度かの改組を経て、東南アジア研究センターは東南アジアの総合的・地域研究を推進する研究機関として成長してきました。その間、東南アジアに関わる膨大な文献資料・画像資料を収集するとともに、内外の地域研究機関との提携のもと多数の共同研究を実施して、わが国における地域研究の中核的研究拠点としての役割を果たしてきました。設立後のこのような活動が、科学技術・学術審議会の学術分科会に設置された国立大学附置研究所等特別委員会で評価され、研究センターから附置研究所への改組が認められることとなりました。国立大学法人というこれまでとはまったく異なった制度のもとで、大学が、そして大学を構成する各部署が今まで以上に研究教育の効率を高め、社会に開かれた組織となることが要請されるようになってきました。東南アジア研究所への再編を機に、地域研究の中核的研究拠点としての機能を一層高め、このような要請に応えていかなければならないと、所員一同、決意を新たにしているところです。

国際化の進展の一方で、世界を構成する各地域がその独自の個性を主張する事件が頻発しています。そのようななか、地域研究はある特定地域の研究に基礎をおきつつも、地域間比較を視野にいれたより総合的な研究へと展開しつつあります。現に、特定の地域を対象としたさまざまな研究・教育機関が連携して、地域研究の一層の推進を図ろうとする「地域研究コンソーシアム」の計画も始まろうとしています。東南アジア研究所は、1998年に京都大学に設置された大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と協力しつつ、こうしたさまざまなかたちの地域研究における共同・協力を推進する機関として、その責任をこれからも果たしていく所存です。

本要覧は、東南アジア研究所の設立以来の経過と現在の研究活動を紹介するために編まれたものです。あわせて、研究スタッフの紹介と出版物の目録も収めています。和文と英文の要覧を毎年交互に発行しており、本要覧は東南アジア研究センターの平成14年度版に続く発行となります。

なお、附置研究所への改組にともなって、東南アジア研究所へと名称を変更しましたが、その英訳名は、従来のCenter for Southeast Asian Studiesを用いることにしました。これまで、CSEASとして国際的に認知され、親しまれてきた名称を変更する必要はないとの判断からです。これまで同様、「東南ア研(CSEAS)」への一層のご支援と所員一同へのご鞭撻・ご教導をたまわりますようお願い申し上げます。

平成16年4月1日

京都大学東南アジア研究所
所 長 田 中 耕 司

目 次

第1章 性格と沿革	1
第2章 機構と組織	5
1. 機 構	
2. 協議員	
3. 職 員	
4. 学内研究担当教官	
5. 学外研究協力者	
第3章 研 究 活 動	10
1. 調査・研究	
2. 国際交流	
3. シンポジウム・セミナーなど	
4. コロキアム	
5. その他の研究会	
6. 東南アジアセミナー	
第4章 資料収集および情報処理	47
1. 現地語資料	
2. マイクロフォーム	
3. 雑 誌	
4. 統 計	
5. 地 図	
6. 人工衛星画像データ	
7. 情報処理	
第5章 研究支援活動	51
1. 海外連絡事務所	
2. 自己点検・評価	
3. 広 報	
4. 日本財団アジア・フェロシップ	
第6章 大学院教育	54
第7章 研究スタッフ	56
第8章 出 版 活 動	93
1. 研究叢書等	
2. 『東南アジア研究』(40巻1号～41巻4号)	
3. <i>Kyoto Review of Southeast Asia</i> (Issue 2～Issue 5)	
4. 研究報告書シリーズ	

第1章 性格と沿革

京都大学東南アジア研究所は、東南アジアおよびその周辺諸国を総合的に研究することを目的として設立された特色ある研究機関である。東南アジアとは、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマ（ミャンマー）、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ブルネイの10カ国をさすが、研究の対象としては、厳密にこの範囲に限定しているわけではない。仏教の研究のためスリランカを含め、熱帯稲作の研究のためバングラデシュ、インド、中国にまで視野をひろげ、対外経済活動の研究のためには香港、台湾、韓国をも対象としたこともある。周辺諸国というのは、この意味である。

研究所の研究活動は、自然科学をも含む点において、人文科学とくに人類学と政治学を中心とする欧米の地域研究とは異なる特色をもっている。自然環境の現状と変遷の過程を視野にいれて変動する地域を総合的に捉えるということが第一義的な目標であるが、それと同時に、関連学問分野を包括的な視野の下に収め、新しい問題群に取り組み、既成の学問分野を越えた新しい知の枠組みを作り上げることも重要な課題である。しかしながら、総合的といっても、基本的には地域の内在的理解が先行すべきで、そのためには微視的な分析・解析的な研究の積み重ねが必要であることは当然である。一方、グローバリゼーションの渦中に東南アジアが巻き込まれたことから、地域間比較と俯瞰的・総合的研究を通じた東南アジアの全体像解明の必要性が高まっているのも事実である。

現在、一般的に広く地域研究と称されるもののみが、本研究所の追究する総合的・包括的地域研究ではない。本研究所の中でも、総合的地域研究の手法が確立しているわけではなく、いろいろなアプローチを比較・検討しながら、世界に類を見ない地域研究の確立に鋭意努力している。当面の目標は、今や日本で緊急に必要とされている地域研究のあるべき姿を、将来への展望を含みつつ早急に確定し、範型として世に示すことである。そのためにも、他の地域研究に関わる機関（国立民族学博物館地域研究企画交流センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京大学東洋文化研究所、北海道大学スラブ研究センター、東北大学東北アジア研究センターなど）との間で緩やかな連合体「地域研究コンソーシアム」を組織し、東南アジア研究所がその運営の拠点機関のひとつとして、地域間比較研究あるいは通地域的課題に関する共同研究を推進することが求められている。

近隣のアジア諸国とわが国との学術文化の交流が深まるにつれて、研究所が地域研究の中心として果たすべき役割への期待はいよいよ高まりつつある。その要請にこたえるため、研究所は東南アジア諸国の学者・文化人はもちろん、東南アジア研究に関心をもつ世界の学者との不断の交流につとめている。そして同時に東南アジアに関する文献資料・学問的情報を収集し、それらをひろく内外の学者に利用してもらえよう態勢を整備しつつある。学問研究の国際交流は、これからの日本にとって大きな課題であるが、とくに近隣の東南アジア諸国の基礎的研究を実施し

ている研究所は、こうした面でもつねにその先達としての努力を傾ける必要がある。

東南アジア研究所の前身である東南アジア研究センターが、京都大学に正式に設置されたのは、1965年のことである。それより以前、1963年1月には、本学に学内措置として「東南アジア研究センター」が設けられた。学内措置として創設された当時は、もっぱら民間からの寄付金とフォード財団からの研究奨励金を委任経理金として受け入れ、それによって多数の本学教官を東南アジア各地の現地調査に派遣した。その研究活動の中心は、タイ計画とマレーシア計画という2つの総合調査であった。それは人類学者による村落定着調査から、農学者による熱帯稲作の諸条件の研究に至るまで、極めて多岐にわたったが、常に現地に密着し、現地の研究者と共同して研究を進めるという態度を失わないように留意してきた。このため当初よりバンコクに連絡事務所を置き、政府機関・大学・研究者との交渉、連絡に当たらせてきた。これらの研究の成果は、1963年に創刊された『東南アジア研究』に次々と発表され、内外の学者の注目を浴びるに至った。

この成果に対する評価は、センターが1965年4月に国立学校設置法施行規則の改正による全国で初めての「研究センター」として、京都大学の正式の研究機関と認められたことによって確定したと言えよう。それより逐年研究部門の増加を認められ、1988年度までに9研究部門、3客員部門からなる研究機関に成長した。とくにこの客員部門のうち、地域研究第一（外国人客員）研究部門は、東南アジアからの研究者をセンターの客員研究員として迎えるもので、この種の国際交流のための部門の設置は全国で最初の試みであった。1989年度には研究部門の大幅な編成替えが実施され、9研究部門は生態環境、社会生態、統合環境、地域発展、人間環境の5つの大部門14分野に統合された。

2001年4月より上記の5部門14分野を「人間生態関連」「社会文化関連」「政治経済関連」の3研究部門に統合すると同時に、東南アジアの全体像の把握をめざす研究分野（「地域関連システム」）を含む新たな研究部門「地域関連動態」を設けた。これは、専門細分化しすぎたこれまでの研究組織の統合を推進するとともに、従来の総合的地域研究を超えた、地域間比較と俯瞰的・総合的研究を通じて東南アジアの全体像の把握を目指す新たな分野の設置を図ったものであった。また、インターネットの普及を中心として最近急速に進行している情報化・国際化の波は、東南アジアや欧米における東南アジア地域研究の興隆と相まって、それに対する研究支援組織を含めた迅速で積極的な対応を要請している。これに応えるため、センターは、上記の「地域関連動態」研究部門にもう一つの研究分野「地域情報システム」を設けた。

そして、東南アジア研究センターは、この2004年4月、その研究活動内容が附置研究所と比べて遜色のないことが認められ、京都大学附置研究所として再出発した。附置研究所への再編により、東南アジア研究のみならず地域研究分野全体においても、地域研究に関連する共通課題に対して研究推進・調整の役割を担う中核的な研究機関となることが期待されている。また、ますます多様化・多量化してきた地域研究に関わる情報資源の全国的なネットワーク構築の一翼を担うことを目指すことになる。

このため、東南アジア研究所は「地域関連動態研究部門」を「統合地域研究研究部門」に再編

して、国内・外国人客員を含めた研究体制を強化するとともに、「資料部」を「地域研究情報ネットワーク部」に再編して地域研究に関わる情報科学分野を開発することになった。また、全国的な地域研究の交流・連携を推進するために「地域研究企画推進室」を新たに設置し、統合地域研究研究部門ならびに地域研究情報ネットワーク部と共同して地域研究コンソーシアムの運営に当たる体制を整えることとした。

東南アジアの地域研究を任務とする性格上、長期、短期の臨地研究が必須とされる。臨地研究を核に、各種の学際的な共同研究が組織されているのが特徴である。研究活動の活性化を図るために、5年ごとに機関としての研究テーマの見直しを行い、それに基づいて研究班を組織してきた。1980年度には、「東南アジア世界の形成過程に関する総合的研究」が組織され、熱帯モンスーン・エコシステム班と小型家産制国家班とが編成された。1985年度の「東南アジア世界の成立と展開に関する文明論的総合研究」では、外文明と内世界、文明と国家形成、文明と生態環境、文明と経済環境の4班が組織された。1990年度には、「東南アジア世界の固有論理と発展構造に関する総合的研究」が発足し、歴史構造、自然生態、社会組織、地域統合にかかわる4班が研究を進めた。

これらの5カ年計画の蓄積をうけて、1993年度～96年度に、文部省重点領域研究「総合的地域研究の手法確立——世界と地域の共存のパラダイムを求めて」の共同研究、さらに、1998年度～2002年度にかけて京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)とともに、文部科学省特別推進研究(COE)「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」の共同研究が実施された。2002年10月からは、やはりASAFASと共同で文部科学省21世紀COEプログラム「世界を先導する統合的地域研究拠点の形成」を実施しており、研究所ひいては日本の東南アジア研究、地域研究のさらに新たな展望を開くべく努力を重ねている。

従来から実施されてきた個々の研究者による共同研究はいままも継続的に組織されているが、一方で、この3つのプロジェクトが示すように、地域研究の中核組織としての役割をはたすべく、研究所はこれまでにない大規模な共同研究を推進するようになってきている。これに対応する臨地研究は科学研究費補助金「基盤研究」によって、毎年2ないし3班の研究班を海外に出している。

また日本学術振興会の拠点大学方式による日本・タイ学術交流事業が、日本側はセンター、タイ側はタマサート大学を拠点校として1986年に発足した。日本とタイの研究者の研究交流推進を目的として始まったこの事業は、タイのみならず東南アジア各国の研究者による東南アジア研究へと軌道修正しつつ展開されてきたが、1998年に13年間の交流に一応の区切りをつけた。1999年度からは、タイ側の拠点校にチュラロンコン大学を加え、プロジェクト中心の交流として新規にスタートした。

東南アジア研究所におけるさまざまな研究活動の成果は、研究所が刊行する出版物を通じて発表されている。1963年創刊の季刊学術誌『東南アジア研究』は、レフェリー制度のもとに学内外の東南アジア地域に関する重要な研究成果を掲載しており、研究所ホームページでも公開している。現在41巻4号(通算167号)に及び、所収論稿は膨大な数にのぼる。なお、『東南アジア研

究』は、内外の大学その他の研究機関と交換しているばかりでなく、財団法人アジア研究協会に委託して、一般購読の道をひらいている。

また研究所は、東南アジア地域研究の発展に寄与するオリジナルな学術研究の発表の場として、東南アジア研究叢書（和文，英文），地域研究叢書（和文，英文）を刊行している。これまで、東南アジア研究叢書（和文，創文社刊）は24冊，同叢書（英文，University of Hawai'i Press 刊）は20冊，地域研究叢書（和文，京都大学学術出版会刊）は14冊，同叢書（英文，Kyoto University Press; Trans Pacific Press 刊）は8冊を刊行してきた。さらに，2002年には，和英他東南アジア諸言語による，東南アジア地域に関する最新情報をレビューするオンライン・ジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* を立ち上げ，既に5号を刊行している。

1969年に「バンコク連絡事務所」の運営経費が，次いで1973年に「ジャカルタ連絡事務所」の運営経費も国の予算として認められるとともに，現地調査費も国の予算で認められ，ようやく現地調査を計画的に推進する最小限の基礎が与えられるようになった。それ以来この予算を活用して，大学内の「研究担当教官」による東南アジア研究をわずかながらも支援できるようになった。また1978年度から「非常勤講師経費」が認められ，さらに1980年度には地域研究第二（国内客員）研究部門が設けられたことにより，「学外研究協力者」が積極的に研究参加できる機会を提供できるようになった。また，1986年度には新たな客員部門として，東南アジア諸語文献研究部門が新設された。近年，東南アジア各国の図書資料が精力的に収集されているが，この部門新設によってそれらの整理方法の確立，資料情報の一層の収集のために，東南アジア各国から書誌学者，カタログガーを招くことが可能となった。2004年4月の研究所への改組により，既存の資料部を再編して生まれた地域研究情報ネットワーク部は，先端的な情報技術を取り入れながら，地域情報資源の全国的・国際的・高度利用体系の開発・構築を目指している。特に新たに設けられたネットワーク開発研究室は，現地語史資料を対象とした多言語情報システムの体系的な研究，地理情報システムや画像処理技術を活用した空間動態の俯瞰的研究，情報媒体と研究情報機関を統合する情報ネットワークの形成に関する実践的研究を実施する。

大学院教育への関りは，1981年に農学研究科熱帯農学専攻が設置され，農学系の教官が協力講座を担当したのが最初である。その後1993年度に人間・環境学研究科の第二専攻（文化・地域環境学専攻）が発足するとともに，センターの教授・助教授ほぼ全員が東南アジア地域研究講座（協力講座）担当として参画してきた。1998年4月，アジア・アフリカ地域研究研究科が発足した。この研究科は，東南アジア地域研究専攻とアフリカ地域研究専攻の2専攻から構成されるが，前者の中に連環地域論講座を置き，東南アジアとアフリカの両地域に接続するヒンドゥー・イスラーム両世界をも含めて，地域間比較を視野に入れた地域研究教育に主眼を置いている。この設立にともなって，センターは大学院教育の場をこの研究科に移すこととなった。現在，研究所のほぼ全教官が東南アジア地域研究専攻の東南アジア地域論講座（協力講座）担当，あるいは2専攻の共通課目担当として大学院教育に参画している。

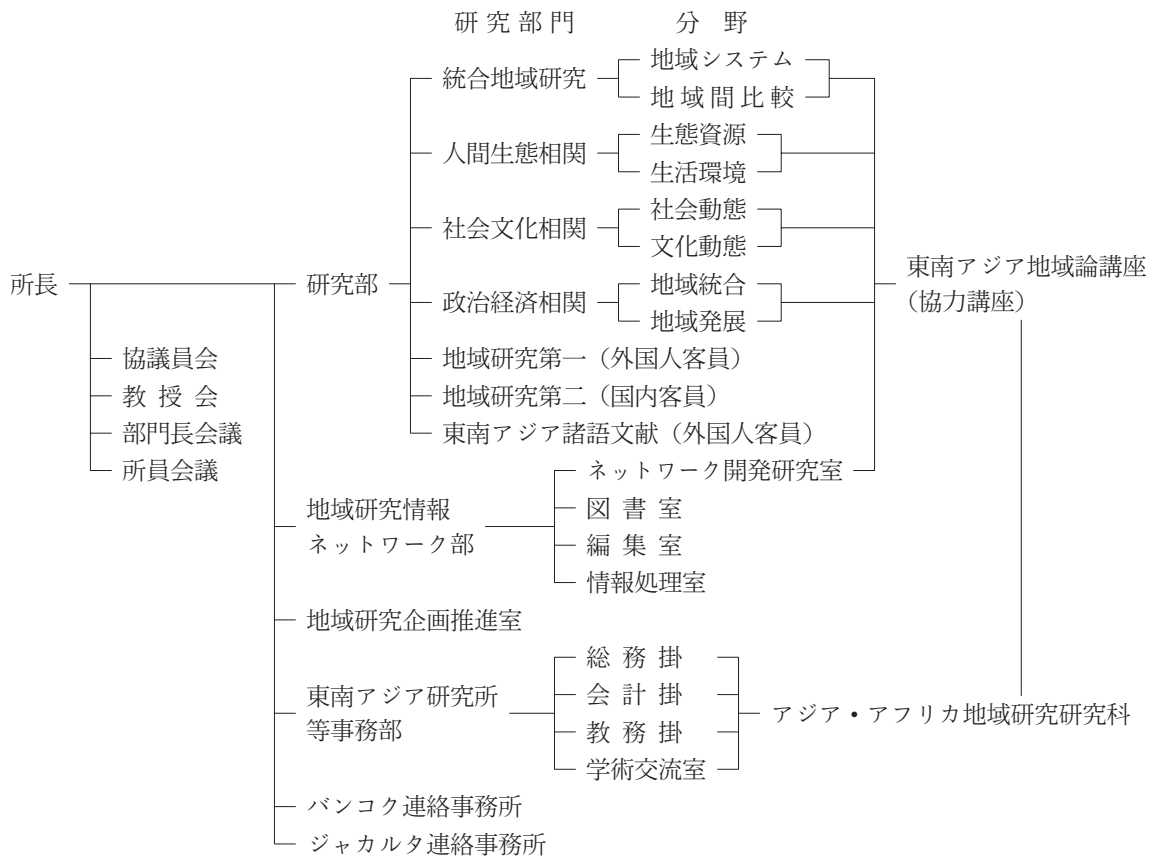
第2章 機構と組織

1. 機構

2004年度現在、東南アジア研究所は、4部門、3客員部門からなる研究部、地域研究情報ネットワーク部、地域研究企画推進室および事務部で構成され、東南アジア地域の現地調査を円滑に行うための海外連絡事務所として、タイにバンコク連絡事務所を、インドネシアにジャカルタ連絡事務所を設置している。また、本研究所の議決機関・協議機関として、協議委員会、教授会、部門長会議、所員会議が設けられている。

1998年4月の大学院アジア・アフリカ地域研究研究科設置に伴い、研究所教官のほぼ全員が東南アジア地域論講座（協力講座）あるいは研究科共通課目を担当している。

事務部は東南アジア研究所等事務部として、東南アジア研究所とアジア・アフリカ地域研究研究科の事務を併せて受けもっている。事務部は総務・会計・教務の3掛に分かれ、さらに内部組織として学術交流室を設置し、それぞれ業務を担当している。



2. 協 議 員

協議員会は、研究所の運営に関する最高議決機関であり、研究所の所長、全教授および助教授1名、ならびに所長が委嘱した関係部局の教授7名によって構成されている。

3. 職 員

研究所の職員は、(1) 研究部、(2) 地域研究情報ネットワーク部、(3) 事務部に所属する職員からなる。2004年5月1日現在の職員は次のとおりである。

所 長 教 授 田 中 耕 司
副所長 教 授 白 石 隆
教 授 松 林 公 蔵

(1) 研 究 部

統合地域研究研究部門

地域研究の原論的研究を基準に、変貌する地域像を地域間比較ならびに全地球的視野を含む横断的・俯瞰的方法論でとらえ、地域の問題群をうきほりにし、問題解決のための設計科学的実践研究を行う。

教 授	田 中 耕 司	熱帯農学, 熱帯環境利用論
教 授	白 石 隆	歴史学, 比較政治学
教 授	林 行 夫	文化人類学, 宗教社会学
外国人研究員	<small>ピパット バ タ ナ ボ ン バ イ ブ ン</small> Pipat PATANAPONPAIBOON	植物生態学
外国人研究員	<small>ポ ー バ ン ウ ー ヤ ノ ン</small> Porphant OUYANONT	経済史
外国人研究員	<small>ウ ク リ ッ ト バ ッ ト マ ナ ン</small> Ukrist PATHMANAND	国際関係学
外国人研究員	<small>ニ コ ラ タ ネ ン バ ウ ム</small> Nicola B. TANNENBAUM	人類学, 東南アジア地域研究
外国人研究員	<small>キ ン レ イ シ ュ ウ エ</small> KHIN LAY SWE	作物学
助教授(客員)	阿 部 健 一	東南アジア生態史
助教授(客員)	村 上 勇 介	ラテンアメリカ地域研究
非常勤研究員	濱 元 聡 子	東南アジア地域研究, 文化人類学
非常勤研究員	富 田 晋 介	熱帯農業生態学
非常勤研究員	中 口 義 次	病原細菌学, 分子遺伝学, 分子疫学
学振特別研究員	見 市 建	政治学

人間生態関連研究部門

地域の生産・生活・健康の基盤をなす生態・風土を自然環境と人間活動の関連の中で総合的に研究する。

教	授	山	田	勇	熱帯生態学
教	授	西	淵	光昭	病原細菌学
教	授	松	林	公蔵	フィールド医学, 老年医学, 神経内科学
助	教	授	安	藤和雄	熱帯農学, 農村生態
助	教	授	河	野泰之	自然資源管理
助	手	柳	澤	雅之	熱帯農業生態学
外国人研究員			アウンタン Aung Than		森林学

社会文化関連研究部門

地域の社会システムと文化の固有性を動態的かつ相関的に研究する。

教	授	濱	下	武志	アジア地域研究
助	教	授	石	川登	社会人類学
助	教	授	Caroline Sy	HAU	カルチュラル・スタディーズ
助	教	授	速	水洋子	文化人類学, 東南アジア地域研究
助	教	授	小	泉順子	歴史学, タイ史

政治経済関連研究部門

地域の政治・経済を俯瞰的に研究し、地域固有の発展の方向を構想する。

教	授	水	野	広祐	経済発展論, 農業経済学, 労働経済学
助	教	授	藤	田幸一	農業経済学
助	教	授	Patricio Nunez	ABINALES	歴史学, 比較政治学
助	教	授	岡	本正明	比較政治学
教	授(客員)	阿	部	茂行	経済学
助	教授(客員)	浦	野	真理子	インドネシア政治, 比較政治学
学振特別研究員		岡		通太郎	農業経済学, インド地域研究
学振特別研究員		遠	藤	環	地域経済学

(研究部連絡室)

事務補佐員	河	合	友	子
事務補佐員	首	藤	晶	子

(Foreign Scholar's Lounge)

事務補佐員	前	野	尚	子
-------	---	---	---	---

(研究室)

教務補佐員 ダオ ミン チュオン
DAO Minh Truong

事務補佐員 片岡 稔子

事務補佐員 西尾 雅美

(2) 地域研究情報ネットワーク部

先端的な情報技術を取り入れながら、地域情報資源の全国的・国際的
高度利用体系の開発・構築を図る。

ネットワーク開発研究室

教授 柴山 守

地域情報学, 人文情報学

助教授 五十嵐 忠孝

人類生態学

助手 ソン シャン フェン
宋 現 鋒

リモートセンシング, 地理情報システム

(図書室)

助手 北村 由美

図書館情報学

外国人研究員 ポラニー シリチョート
Porane SIRICHOTE

図書館情報学

事務補佐員 小室 静子

事務補佐員 古田 保子

事務補佐員 山田 尚代

事務補佐員 塩津 哲子

事務補佐員 林 暁子

(情報処理室)

助手 木谷 公哉

形状処理工学

教務補佐員 奥西 久美

(編集室)

助手 米沢 真理子

Editorial Fellow ドンナ アモロソ
Donna J. AMOROSO

歴史学

事務補佐員 小林 純子

事務補佐員 漆畑 仁美

(3) 事務部

事務長	事務官	福本 穂
専門員	事務官	山本 正躬
総務掛 掛長	事務官	大西 俊隆
主任	事務官	南雲 円
	事務官	神徳 智恵 (育休)
	事務官	松井 華代
	事務補佐員	藤井 舞 (学术交流室勤務)
	事務補佐員	津田 喜美代 (学术交流室勤務)
	事務補佐員	中西 亜衣子
	事務補佐員	日高 未来
	事務補佐員	安原 聡子
	臨時用務員	岩本 照子
	臨時用務員	寺町 淳
会計掛 掛長	事務官	竹内 照夫
主任	事務官	岡崎 道子
主任	事務官	高田 早津紀 (育休)
	事務官	小西 華
	事務官	小柳 吉邦
	事務補佐員	石田 祥子
	事務補佐員	中川 賢子
	事務補佐員	森田 悦子
教務掛 掛長	事務官	松下 裕之
	事務官	今井 知子

4. 学内研究担当教官

当研究所は、東南アジア研究に関心をもつ学内各部署の教官に、研究担当教官として参加を委嘱している。2004年度において、これらの研究担当教官は184名を数える。

5. 学外研究協力者

当研究所は、総合的に地域研究を実施するため、東南アジア地域の研究に関心をもつ全国各地の大学・研究機関等の研究者に、研究協力を仰いでいる。2004年度において、これらの研究協力者は287名を数える。

第3章 研究活動

1. 調査・研究

(1) 共同研究

研究所の調査・研究活動は個別研究と共同研究に大別されるが、共同研究のうち、研究所の大部分のスタッフの関与するものは、前身の東南アジア研究センターにおいてはセンター研究計画（プロジェクト）として推進されてきた。センタープロジェクトは、5カ年を単位として設けられる共通のテーマのもとに、所員が任意の研究グループをつくり、科学研究費補助金「国際学術研究」などを通じて臨地研究を共同で行うものである。

1980年度から1984年度までの5カ年計画として、「東南アジア世界の形成過程に関する総合的研究」というテーマのもとに、このセンタープロジェクトが遂行され、「熱帯モンスーン・エコシステムにおける農業の発展と地域間交渉の展開」と「小型家産制国家の社会基盤と経済発展」の2つの研究班が編成された。1985年度から、第2次5カ年計画として「東南アジア世界の成立と展開に関する文明論的総合研究」が進められ、「外文明と内世界」「文明と国家形成」「文明と生態環境」「文明と経済環境」の4つの研究班が組織された。1990年度からは、第3次5カ年計画として「東南アジア世界の固有論理と発展構造に関する研究」が進められ、「東南アジア世界の成立と歴史構造」「東南アジアの自然生態と発展形態」「東南アジアの人間環境と社会組織」「東南アジアの文化環境と地域統合」の4つのクラスターが研究班の役割を担って組織された。以上の5カ年計画のテーマに沿っていくつもの個別的な共同研究が文部省科学研究費補助金（海外学術調査／国際学術研究）あるいはその他の機関の援助を得て実施された。

5カ年計画を背景に、1993年度から4カ年のプロジェクトとして、文部省重点領域研究「総合的地域研究の手法確立——世界と地域の共存のパラダイムを求めて」が発足した。全国の地域研究者の参加を得て先端的な地域研究をめざす「地域と生態環境」「地域性の形成論理」「地域発展の固有論理」の3計画研究班、および地域研究の手法確立を探る「外文明と内世界」「地域連関の論理」「総合的地域研究の概念」の3つの計画研究班が組織され、多数の公募研究班とともに、総合的地域研究の手法確立のための共同研究が進められた。同研究は、社会科学としては極めて大型の共同研究で、東南アジア地域研究の専門家約150名が、地域と生態環境、地域性の形成論理、地域発展の固有論理、外文明と内世界、地域連関の論理、総合的地域研究の概念の6クラスターにわたって計画研究班および公募研究班を構成し、それらを総括班が結び合わせる、という構造のもとに進められた。

本共同研究の成果は、以下のように結実している。参加者の情報交換メディアとしてのニューズレター49号、季刊誌『総合的地域研究』が創刊準備号を入れて第16号までの計17冊、成果報告書シリーズが36冊、総括班主催の研究集会やシンポジウムが合計10回、内1回は“Intern-

tional Symposium Southeast Asia: Global Area Studies for the 21st Century”と題する国際シンポジウムであった。さらに、各研究班が開催した研究会やワークショップは合計約100回に及び、各班から事務局に報告された関連ペーパーは約1,000編にも及んだ。総括班と各研究班による最終報告書としては、『〈地域間研究〉の試み——世界の中で地域をとらえる（上・下）』『〈総合的地域研究〉を求めて——東南アジア像を手がかりに』『地域形成の論理』『地域発展の固有論理』が京都大学学術出版会から刊行されている。

この重点領域研究で得られた成果を引き継いで、1998年度から新たな5カ年計画が実施された。文部科学省特別推進研究（COE）「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」がそれで、新たに設置された大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とともに、地域研究の中核的拠点の形成を目指すものであった。この計画では、東南アジア、南・西アジア、アフリカをそれぞれ対象とする3つの研究クラスターが編成され、これらのクラスターと地域間比較により、地域を物質生活、地域社会・交換経済、地域システムのレベルでトータルかつダイナミックにとらえる総合的地域研究が試みられた。

また、研究分担者に加えて、両機関のすべての研究スタッフが一丸となって、地域研究の中核拠点をめざした基礎的資料（図書・文書資料、地図・衛星画像資料）の網羅的な収集や国内外の地域研究者・研究機関とのネットワークの形成に向けたさまざまな研究活動が実施された。このプロジェクトで収集された図書資料は東南アジア研究所図書室、アフリカ地域研究資料センターおよび、京都大学附属図書館に配架され、公開されている。また収集されたアジア・アフリカの衛星画像や地図を既存の資料も含めて検索できるシステムを構築し公開している。

このCOE「アジア・アフリカにおける地域編成」の成果をさらに発展させるために、2002年度から新たな5カ年計画21世紀COE「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」を大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とともに推進中である。また日本学術振興会の拠点大学方式による日本・タイ学術交流事業を、日本側は東南アジア研究所、タイ側はタマサート大学とチュラロンコン大学を拠点校として実施している。現在進行中の21世紀COEプロジェクトならびに拠点大学方式による共同研究の詳細は、別項目を立てているので参照されたい。

これらの大型プロジェクト以外に、科学研究費補助金による調査研究は2004年現在で11件が進行中である。その内訳は基盤研究（A）（1）では「東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容——制度・境域・実践」（研究代表者：林行夫）、（A）（2）では「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『古い』の問題を中心として」（同：河野泰之）、「環ヒマラヤ広域圏における社会と生産資源変容の地域間比較研究」（同：山田勇）、「アジア地域の新興腸管感染症の分子疫学的研究」（同：西淵光昭）、「インドネシア地方分権下の自然資源管理と社会経済変容——スラウェシ地域研究に向けて」（同：田中耕司）がある。さらに、基盤研究（B）（1）では、「インドネシアの民主化における地方政治の変容」（同：水野広祐）、「古文書文字認識システムの高精度化に関する研究」（同：柴山守）、「ミャンマー少数民族地域における生態利用と世帯戦略——広域比較に向けて」（同：速水洋子）、（B）（2）では、「東南アジア大陸部の統合型生業・環境デー

タベース構築による生態資源管理の地域間比較」(同：河野泰之),「東アジアの地域化と中産階級——アメリカ化・中国化・日本化」(同：白石隆),「アジアにおける地域在住要介護高齢者の実態に関する研究——本邦高齢者との比較検討」(同：松林公蔵)がある。

上記の共同研究は、現地調査を中心として行われること、学際的なチームメンバーを組んで行われること、東南アジア地域およびその他の外国人研究者の参加を得て行われることを特色としている。本年度までに出版された研究成果の一部は、第8章「出版活動」の研究報告書シリーズの項に掲載されている。なお、大型プロジェクト以外の個別の共同研究のもとで1990年度以降に実施された科学研究費補助金による調査研究は以下のとおりである。()内は研究代表者。

- 1990年度：「東南アジア型都市文明の形成——外文明からの変容と内発的展開」(坪内良博)
「中国における農業生態空間の展開と人の移動に関する歴史的研究」(古川久雄)
「東南アジア海域世界の動態に関する総合的研究」(土屋健治)
- 1991年度：「中国における農業生態空間の展開と人の移動に関する歴史的研究」(古川久雄)
「東南アジア海域世界の動態に関する総合的研究」(土屋健治)
- 1992年度：「海域世界の地域間比較」(矢野 暢)
「島嶼部東南アジアのフロンティア世界に関する動態的研究」(加藤 剛)
- 1993年度：「海域世界の地域間比較」(矢野 暢)
「島嶼部東南アジアのフロンティア世界に関する動態的研究」(加藤 剛)
「コラート高原における人間・環境・作物複合の総観的研究」(福井捷朗)
- 1994年度：「熱帯海域世界の比較研究」(高谷好一)
「島嶼部東南アジアのフロンティア世界の動態に関する総合的研究」(加藤 剛)
「コラート高原における人間・環境・作物複合の総観的研究」(福井捷朗)
- 1995年度：「熱帯海域世界の比較研究」(古川久雄)
「サヘルと南インドにおける在来農法の再評価と両地域間技術移転の可能性に関する研究」(応地利明)
「人と森世界に関する大陸間比較研究」(山田 勇)
「ウォーラセア海域世界におけるネットワーク型社会の文化生態的動態」(田中耕司)
- 1996年度：「サヘルと南インドにおける在来農法の再評価と両地域間技術移転の可能性に関する研究」(応地利明)
「人と森世界に関する大陸間比較研究」(山田 勇)
「ウォーラセア海域世界におけるネットワーク型社会の文化生態的動態」(田中耕司)
- 1997年度：「人と森世界に関する大陸間比較研究」(山田 勇)
「ウォーラセア海域世界におけるネットワーク型社会の文化生態的動態」(田中耕司)
「熱帯半乾燥地帯でのミレット農耕と他の農耕との接触複合状況および農業再生に関する調査研究」(応地利明)
「東南アジアにおける半乾燥地帯の発展と停滞に関する比較研究」(福井捷朗)
「デルタの21世紀像——熱帯アジア6大デルタの発展に関する総合的比較研究」(海田能宏)
- 1998年度：「東南アジアにおける半乾燥地帯の発展と停滞に関する比較研究」(福井捷朗)
「デルタの21世紀像——熱帯アジア6大デルタの発展に関する総合的比較研究」(海田能宏)
- 1999年度：「東南アジアにおける半乾燥地帯の発展と停滞に関する比較研究」(福井捷朗)
「アジア地域の環境中における腸管感染症原因菌の動態に関する調査」(西淵光昭)
「東南アジア大陸部の環境ストレスと農村社会経済変容を考慮した土地生産力評価」(河野泰之)

- 「フロンティア社会の地域間比較研究」(田中耕司)
- 2000年度:「アジア地域の環境中における腸管感染症原因菌の動態に関する調査」(西淵光昭)
「東南アジア大陸部の環境ストレスと農村社会経済変容を考慮した土地生産力評価」
(河野泰之)
「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」(阿部茂行)
「フロンティア社会の地域間比較研究」(田中耕司)
「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」(安藤和雄)
- 2001年度:「東南アジア大陸部の環境ストレスと農村社会経済変容を考慮した土地生産力評価」
(河野泰之)
「アジア地域の環境中における腸管感染症原因菌の動態に関する調査」(西淵光昭)
「ウォーラセア海域における生活世界と境界管理の動態的研究」(パトリシオ・アビナーレス)
「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」(阿部茂行)
「フロンティア社会の地域間比較研究」(田中耕司)
「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」(安藤和雄)
- 2002年度:「ウォーラセア地域における生活世界と境界管理の動態的研究」(パトリシオ・アビナーレス)
「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『古い』の問題を中心に——」
(A. テリー・ランボー)
「環ヒマラヤ広域圏における社会と生産資源変容の地域間比較研究」(山田 勇)
「アジア地域の新興腸管感染症の分子疫学的研究」(西淵光昭)
「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」(阿部茂行)
「インドネシアの民主化における地方政治の変容」(水野広祐)
「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」(安藤和雄)
- 2003年度:「ウォーラセア地域における生活世界と境界管理の動態的研究」(パトリシオ・アビナーレス)
「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『古い』の問題を中心に——」
(A. テリー・ランボー)
「環ヒマラヤ広域圏における社会と生産資源変容の地域間比較研究」(山田 勇)
「アジア地域の新興腸管感染症の分子疫学的研究」(西淵光昭)
「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」(阿部茂行)
「インドネシアの民主化における地方政治の変容」(水野広祐)
「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」(安藤和雄)
- 2004年度:「東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容——制度・境域・実践」(林 行夫)
「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『古い』の問題を中心に——」
(河野泰之)
「環ヒマラヤ広域圏における社会と生産資源変容の地域間比較研究」(山田 勇)
「アジア地域の新興腸管感染症の分子疫学的研究」(西淵光昭)
「インドネシア地方分権下の自然資源管理と社会経済変容——スラウェシ地域研究に向けて」
(田中耕司)
「インドネシアの民主化における地方政治の変容」(水野広祐)
「古文書文字認識システムの高精度化に関する研究」(柴山 守)
「ミャンマー少数民族地域における生態利用と世帯戦略——広域比較に向けて」(速水洋子)
「東南アジア大陸部の統合型生業・環境データベース構築による生態資源管理の地域間比較」
(河野泰之)
「東アジアの地域化と中産階級——アメリカ化・中国化・日本化」(白石 隆)
「アジアにおける地域在住要介護高齢者の実態に関する研究——本邦高齢者との比較検討」
(松林公蔵)

他にさまざまな共同研究が東南アジア内外の研究者を組織して実施されてきた。国際協力事業団の研究協力事業として実施されているバングラデシュとの共同研究「バングラデシュ農村開発研究」、あるいは日本学術振興会と日立国際奨学財団の助成による「マレーシア農村部における社会経済変動と文化変容」（マレーシア国民大学との共同研究）などである。

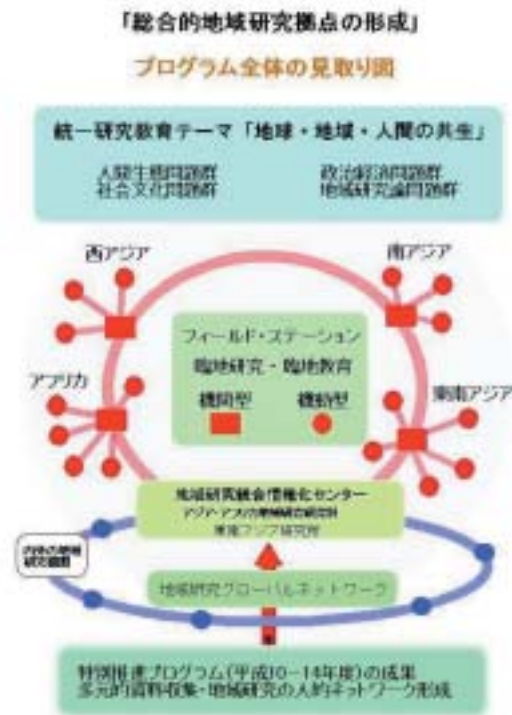
（2）21世紀 COE プログラム

2002年度に東南アジア研究センター（東南アジア研究所の前身）は、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とともに、文部科学省21世紀 COE プログラムによる研究教育拠点に選出され、5カ年計画（2002～06年度）で新たな大型プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」を開始した。初年度は（1）統一テーマ「地球・地域・人間の共生」にそった問題群に関する研究と教育、（2）フィールド・ステーション（FS）を利用した臨地教育・研究体制の推進、（3）臨地教育・研究支援のための、多元的情報の整備と発信を担う「地域研究統合情報化センター」の設置準備を行った。

このうち FS に関しては、フィリピン、マレーシア、ラオス、ミャンマー、インドネシア、ベトナム、インド、エジプト、タンザニア、エチオピア、カメルーン、ザンビア、ケニアにおいて、FS の設置、あるいはその準備を行うと共に、教官 12 名、大学院生 14 名、若手研究者 2 名を派遣し、文理融合型の研究テーマにそって、各 FS における教育と研究を開始した。カウンターパートの相手国研究機関との関連も順調に進んでいる。

これらの臨地調査、研究と連携させながら、国内における教育研究活動を推進するために、統一テーマにそった 4 つの問題群（人間生態、社会文化、政治経済、地域研究論）に関わる研究会が発足し、教官、大学院生、若手研究者による、教育と研究の場として、今後活用されることになる。

「地域研究統合情報化センター」関係では、将来的に地域研究の核となる一大センターとするため、各種のコミュニケーション・モジュールの核となるサーバーの導入や、FS 及び、学内外の研究者と学生との円滑なコミュニケーションと情報交換をはかる機器などの整備が行われた。また、これらの機器を用いた新しいオンライン・データベース・システムの開発に関する準備を行った。さらに、研究資料関連では、図書 6,242 冊、マイクロフィッシュ 1,471 枚、マイクロフィ



ルム 511 リールを購入するとともに、地域研究資料のデータベース化、電子化を推し進めた。

ホームページの立ち上げも本格化し、現地調査を行った大学院生の報告や FS の活動内容、教官の研究業績など、多くの現地の写真を入れた盛り沢山の内容となっている (<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp>)。これらのデータは常にリアルタイムで更新されることになっており、この 21 世紀 COE の研究、教育の推移と成果が一目でわかるようになっている。

2 年度目には初年度の準備期間をふまえて、本格的な活動が始まり、ホームページも充実してきた。とりわけ、エチオピアで行われたエチオピア大学との共催の地域間比較をめざしたワークショップ「環境と生業をめぐる地域住民のとりくみ」は、アフリカとアジアからの若手の研究者、院生を中心に活発な討議がおこなわれた。

さらにカメルーンにおける熱帯雨林保持に関する現地セミナーの開催、インドネシアにおける現地ワークショップ「インドネシアの地方社会のミクロロジー」など、活発な活動が始まっている。

統合情報化センターに関しては、設立準備委員会のワーキンググループにより、「地域研究統合情報化センター」の基本的な設計を完了し、2004 年度内の設置を目指して学内での検討が始まっている。

以上のようにフィールドステーションと統合情報化センターの組み合わせを軸に、21 世紀 COE プログラムは地域研究の新たな方向を目指している。

(3) 拠点大学方式による共同研究

日本学術振興会の拠点大学方式による日本・タイ学術交流事業は、京都大学とタイのタマサート大学を交流の拠点として 1986 年に発足した。日本とタイの研究者の研究交流推進を目的として始まったこの事業は、タイのみならずマレーシア、インドネシア、フィリピンなども含めた東南アジアの研究者による東南アジア研究へと軌道修正しつつ展開されてきたが、1998 年に第 1 フェーズ 13 年間の交流に一応の区切りをつけた。1999 年度からは、タイ側の拠点校にチュラロンコン大学を加え、プロジェクト中心の交流として第 2 フェーズがスタートした。社会科学での拠点大学交流は、アジア世界で現在解明を必要とする問題群を先見的に見出し、それらにインターディシプリナリーなアプローチで、かつ広範にアジアの研究者の参加を得て、解明していくことが目的である。こうした視点から、これまでヘゲモニー、テクノクラシー、国家・市場、中産階級、フロー、といったキーワードを軸にプロジェクトを組んで、研究ネットワークを内外に広げ緊密にしてきた。問題発見とそれに対する科学的解明、そしてそこから新たに生じる問題群にさらにメスをいれ問題を掘り下げること、インターディシプリナリーな国際的共同研究の新しい地平を開くこと、これが全期間にわたる目的である。

1999 年度は、濱下武志をリーダーとする「ヘゲモニーの構造変化(ネットワークの比較史)」と白石隆をリーダーとする「知的ヘゲモニーの構造(仕掛け)——テクノクラシー」を、東南アジア経済構造の基本的特徴を理解する目的で開始した。2000 年度には、「国家・市場・社会・地域

統合のロジックとアジア経済」(リーダー：阿部茂行)を先行した2つの研究プロジェクトを補完する形で開始した。2001年度に先行2プロジェクトは終了し、2002年度からはそれらを発展させる形の「東アジアにおける中産階級」(リーダー：白石隆)、「東南アジアにおける社会的流動(フロー)」(リーダー：石川登)プロジェクトを開始した。第3プロジェクトは2003年度に最終年度を迎え、2004年度からは「市場と経済連携」(リーダー：阿部茂行)として新たな共同研究を開始する。

日本側協力大学は、神田外語大学、東京大学東洋文化研究所、同社会科学研究所、名古屋大学大学院国際開発研究科、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、同志社大学政策学部等であり、相手国側拠点大学は Thammasat University, Chulalongkorn University,そして協力大学は Mahidol University, Silapakorn University, Chiang Mai University, National Institute of Development Administration (NIDA) 等である。

(4) その他の個人研究

現在の研究所スタッフによる個別研究については第7章「研究スタッフ」の紹介の項をご参照願いたい。

2. 国際交流

東南アジア地域研究には、人との交流は最大かつ重要な基軸である。研究所で共同研究を進める外国人研究者は、教官、客員研究員、図書館司書を含め、どの時点においても10人を超えるようになった。そのため外国人研究者も所員会議に正式に参加し、円滑な意思疎通と相互交流を深めるべく英語で会議を行っている。所員会議の後のコロキウムを筆頭に、英語による研究セミナーは増加の一途にある。さらに、外国人研究員を含めた各部門での会議やミーティングも定期的に実施されている。

外国人研究員の選考は、文書による通知やホームページ等を通じて公募制をとっている。春と秋の2期に分けて公募通知を行い、国際交流委員会での厳正なる選考を経て部門長会議で審議され、教授会で最終決定する。東南アジア10カ国のみならず、世界中からの応募数は募集定員の7～8倍を超え、東南アジア諸国に加えて中国、韓国、欧米からの外国人研究員が、半年から1年にかけて研究所に滞在し共同研究を実施している。さらに、客員研究員枠以外にも、日本学術振興会や国内外の財団により招聘された外国人研究者が、一定期間滞在している。

研究所との大学・研究所間交流協定は、インドネシアのハサヌディン大学、ボゴール農業大学、大韓民国のソウル大学のほかフィリピン大学、シンガポール国立大学、ハノイ農業大学などと締結され、共同プロジェクトを通じて活発な研究交流が行われている。インドネシア科学院(LIPI)、タイのプリンス・オブ・ソンクラ大学理学部との間では、共同研究および研究者交流に関する覚書が交わされている。また、ミャンマーとはイェジン農科大学、教育省東南アジア歴

史地域センターと新たに協定を締結し、従来困難であったミャンマーにおける総合地域研究が開始された。他方で、最終段階に入った日本学術振興会の拠点大学方式による交流プロジェクトは、従来のタイ一国との交流からインドネシア、フィリピン、マレーシアを含むマルチな研究交流へと展開されている。

また、ジャカルタとバンコクにある海外連絡事務所は、現地の研究者との共同企画による国際シンポジウムや定期的な研究集会を開催し、密接な研究交流を進めている。

(1) 外国人研究者の招聘

1975年度より外国人研究員の制度を設け、これまでは主として東南アジア諸国の研究者を招聘してきた。1999年度にこれを東南アジア研究者に切り替え、優秀で成果のあがる研究者を広く募り、東南ア研で研究に従事してもらうことになった。その他にも日本学術振興会特別研究員(COE)や、拠点大学交流による短期派遣研究員等々を随時受け入れ、研究室・図書室・インターネットの利用等最大限の便宜を図っている。以下は2002年以降(平成14年度版和文要覧に掲載の者は除く)の外国人研究者のリストである。()内は国籍を表わしている。

A. 外国人研究員

Kumar Sumit Mandal	2002-03	アラブ人の歴史からマレー世界の多様性を考える	National University of Malaysia (マレーシア)
Chantanee Panishpon	2002-03	レファレンスサービス及び情報検索(インターネット・サーチ)	Thammasat University (タイ)
Yasmin Sungkar	2002-03	インドネシアにおける産業政策: 国家主導から国際的合意のもとへ	LIPI (インドネシア)
Lee Hua Seng	2003	マレーシアサラワクにおける野生果樹と薬用植物の栽培化のための保全と指針戦略	Government Service of Sarawak Malaysia (マレーシア)



所員と外国人研究者の交流のため、月に一度昼休みにGet-togetherが開催されている

Chalong Soontravanich	2003	第二次大戦後タイにおける犯罪と暴力	Chulalongkorn University (タイ)
Dao Trong Hung	2003	ベトナムにおける少数民族の農業生態システムに関する研究	Vietnam National Center for Natural Science and Technology (ベトナム)
Lamberto Raymundo Ocampo	2003	リザルとフィリピン「国家」の出現	National Historical Institute (フィリピン)
Rosnah Binti Suliman	2003	東南アジア研究に関するインターネット情報目録	National University of Malaysia (マレーシア)
Srawooth Paitoonpong	2003	タイの人的資源と労働市場: 日本から何を学べるか	Thailand Development Research Institute (タイ)
Pipat Patanaponpaiboon	2003-04	環境倫理促進のためのマングローブ生態系修復の役割	Chulalongkorn University (タイ)
Cho Cho San	2003-04	灌漑地域の農民の農業生産・所得・消費に及ぼすマクロ政策のインパクト	Yezin Agricultural University (ミャンマー)
Maria Antonia Yunita Triwardani Winarto	2003-04	東南アジアにおける農法展開: インドネシア・ベトナム・カンボジアの比較の視点から	University of Indonesia (インドネシア)
Salvacion Manuel Arlante	2003-04	東南アジア研究センター所蔵フィリピン研究関係特別コレクションとフィリピン語コレクションの国際基準に準拠した整備	University of the Philippines (フィリピン)
Aung Than	2003-04	ミャンマーにおける熱帯林業の持続的開発	Institute of Forestry, Myanmar (ミャンマー)
Porphant Ouyyanont	2003-04	1920年以前におけるバンコクの社会経済発展: 首都の誕生	Sukhothai Thammathirat Open University (タイ)
Nicola Beth Tannenbaum	2004	東南アジア大陸部の宗教複合の研究	Lehigh University (アメリカ合衆国)
Ukrist Pathmanand	2004	危機後のタイにおけるテレコム資本の政治経済学	Chulalongkorn University (タイ)
Poranee Sirichote	2004	東南アジア研究センターにおけるタイ語文献オンライン目録データベースに対する利用者満足度調査	Khon Kaen University (タイ)
Khin Lay Swe	2004	中部ミャンマー乾燥地域における畑作農業発展のための作付体系からのアプローチ	Yezin Agricultural University (ミャンマー)

B. その他の外国人学者

U Boon Thein	2002	JICA カウンターパート研修 の補完研修	Ministry of Forestry, Myanmar (ミャンマー)
Shandre Mugan Thangavelu	2002	日本の高齢化と生産性について	National University of Singapore (シンガポール)
Mohammad Haji Salleh	2002	過去と新世紀のための文学の 役割と機能: マレーシア・イ ンドネシア及び日本の比較研 究	National University of Malaysia (マレーシア)
Kong Jianxun	2002-03	日本とアメリカの東南アジア 政策に関する研究	Yunnan Institute of Southeast Asian Studies (中華人民共和国)
Hasballah Muhammad Saad	2002	中産階級の研究	Jakarta State University (インドネシア)
Ukrist Pathmanand	2002	同	Chulalongkorn University (タイ)
I Ketut Ardhana	2002	日本における観光産業の発展	LIPI (インドネシア)
Sugiah M. Mugnieszah	2002	環境調和型農村開発に関する 社会経済的研究	Bogor Agricultural University (インドネシア)
Dwi Rachmina	2002	同	Bogor Agricultural University (インドネシア)
Sri Hartoyo	2002	同	Bogor Agricultural University (インドネシア)
Ikrar Nusa Bhakti	2002	民主的統治に関する日本・イ ンドネシア比較研究	LIPI (インドネシア)
Deanna Gail Donovan	2002	東南アジア大陸部山地におけ る非木材林産物の交易	East-West Center (アメリカ合衆国)
Bhanupong Nidhiprabha	2002	国家・市場・社会・地域社会 統合のロジックとアジア経済	Thammasat University (タイ)
Pinit Lapthananon	2003	東北タイにおけるジェンダー と人口移動	Chulalongkorn University (タイ)
Narumon Arunotai	2003	南タイ海漂民モーケンの社 会・文化変容	Chulalongkorn University (タイ)
Endang Turmudi	2003	インドネシアにおけるイス ラームと政治	LIPI (インドネシア)
Son Radu	2002	アジアにおける腸管感染症の 疫学研究	University of Putra Malaysia (マレーシア)
Shamsul Amri Baharuddin	2003	マレー世界における知識の環 流について	National University of Malaysia (マレーシア)
Dhiravat Na Pombejra	2003	中産階級に関する共同研究	Chulalongkorn University (タイ)
Kasian Tejapira	2003	東南アジアにおける社会的流 動(フロー)に関する動態的 研究	Thammasat University (タイ)

Suthachai Yimprasert	2003	同	Chulalongkorn University (タイ)
Khoo Boo Teik	2003	同	University of Science, Malaysia (マレーシア)
Riwanto Tirtosudarmo	2003	同	LIPI (インドネシア)
Supang Chantavanich	2003	中産階級に関する共同研究	Chulalongkorn University (タイ)
Pasuk Phongpaichit	2003	同	Chulalongkorn University (タイ)
Edel E. Garcellano	2003	東南アジアにおける社会的流動(フロー)に関する動態的研究	University of the Philippines (フィリピン)
Viengrat Nethipo	2003	同	Chulalongkorn University (タイ)
Naris Chaiyasoot	2003	拠点大学交流に関する意見交換	Thammasat University (タイ)
Chirapan Boonyakiat	2003	同	Thammasat University (タイ)
Olarn Chaipravat	2003	国家・市場・社会・地域社会統合のロジックとアジア経済	Shinawatra University (タイ)
Suthiphand Chirathivat	2003	同	Chulalongkorn University (タイ)
Philippe Cadene	2003	インド北部におけるグローバル化と地域開発	Universite Paris 7-Denis Diderot (フランス)
Lye Tuck-Po	2003	マレーシアにおける自然保護地区管理とオラン・アスリの社会変容	CETDEM (マレーシア)
Wimonrart Issarathumnoon	2003-04	町づくりの研究: 歴史的コミュニティ保存に関する日本における下からのアプローチをどうタイに应用するか	Chulalongkorn University (タイ)
Wu Xiao An	2003	東南アジアにおける社会的流動(フロー)に関する動態的研究	Peking University (中華人民共和国)
Romdiati Haning	2003	日本におけるインドネシア人労働者	LIPI (インドネシア)
Suleeman Naruemon Wongsuphap	2003	中産階級に関する共同研究	Prince of Songkla University (タイ)
Riza Sihbudi	2003	イスラームと民主主義: 1990年代およびそれ以降のムスリムにおける民主化に関する諸問題	LIPI (インドネシア)
Augustina Situmorang	2003	日本とインドネシアの高等教育女性の婚姻への対応変化	LIPI (インドネシア)

Sugiah M. Mugniesyah	2003	ジェンダー：貧困と持続的農業発展—インドネシア西ジャワの経験	Bogor Agricultural University (インドネシア)
近藤まり	2004	フィリピンにおけるイスラム金融	Asian Institute of Managment (日本)
Addinul Yakin	2004	持続的開発推進のための環境行政の実行と施行：日本とマレーシアの例から学ぶ	Mataram University (インドネシア)
Zamroni Salim	2004	日本とインドネシアの産業間貿易	LIPI (インドネシア)

(2) 留学生の派遣と受け入れ

東南ア研は東南アジア研究を志す研究者の養成と国際交流の目的で、東南ア研の若手研究者、京都大学の大学院生、およびその他の学生、若手研究者を欧米と東南アジアに留学生として派遣し、あるいは留学の便宜を図ってきた。

また、東南アジア諸国の学生を東南ア研の研修員として受け入れ、その指導に当たった。2002～2004年に受け入れた外国人研究生は次のとおりである。

Nghiem Tuyen Phuong	2000-02	山岳地域小都市間の連携と地域開発 (ベトナム)
Otmazgin Nissim	2001-02	日本と東南アジアの国際関係 (イスラエル)
Chakma Shishir Swapan	2001-02	バングラデシュ、カグラチヨリ丘陵県におけるジュム栽培 (焼畑) の生産性に関する研究 (バングラデシュ)
Hoang Nguyet Thi Minh	2002-03	日本における中小企業政策およびベトナムへの教訓 (ベトナム)
Chamchan Chalermphol	2003-04	途上国における医療・保健システムの研究 (タイ)

3. シンポジウム・セミナーなど

東南アジア研究に関して内外の研究者とより広く意見を交換するため、これまでに数多くのシンポジウム、セミナー、ワークショップなどが、東南ア研の主催または他機関との共催で開かれた。最近2年間に開催された主なものについて簡単な趣旨とプログラムを掲げておく。

研究会

(1) 日タイ拠点大学交流プログラム特別研究会

「中産階級の研究」セミナー

日タイ拠点大学交流プログラムは「東アジア地域形成の社会科学的研究」をテーマに、同時並行的にいくつかの共同研究を実施している。そのうちの一つ、「中産階級の研究」は、東南アジアにおける中産階級の擡頭とともに、社会、文化、政治、経済、その他、さまざまな領域において大きな変化がocこりつつある、これを多面的に分析しようとするものである。2001年度と2003

年度に行われたワークショップは下記のとおりである。

2002年3月19日	Populism and Corruption in Thailand
The Complexity of Human Trafficking: Reviews of Evidences from Southeast Asia Contributing to Reconceptualization	(チュラロンコン大) Pasuk Phongpaichit 2004年2月6日 Multiculturalism in Singapore
(チュラロンコン大) Supang Chantavanich	(シンガポール国立大) Chua Beng Huat

「国家・市場プロジェクト」セミナー

日タイ拠点大学交流プログラムで招聘中の Suthiphand 教授と Olarn 博士が、これまでの研究成果を発表した。Suthiphand 教授は「グローバル経済下でのガバナンスと経済統合」の問題を、EU の経験に照らして、ASEAN にとってどのような課題があるかを明らかにした。また、Olarn 博士は、「タイの経済政策の平行する2つの目標」について、地域協力におけるパラダイムシフトという観点から議論を展開した。基本的にマクロモデルを使ったシミュレーションであったが、自身タクシン政権のアジア金融協調に関する特別顧問をつとめていることから、内部事情にも詳しく、参加者が興味深く聴き入った。

2002年3月28日	「コメント」	(神戸大) 原 正行
Governance and Economic Integration in a Global Economy: The Experience of the EU and Challenges for ASEAN	Thailand's Dual Track Policy and a Paradigm Shift in Regional Cooperation and Coordination	(チナワット大) Olarn Chairavat
(チュラロンコン大) Suthiphand Chirathivat		

「東南アジア大陸部における移動と文化再編」セミナー

今日のグローバリゼーション下で、移動を常態としてきた人々の社会ではどのような移住パターンの変化と問題が生じているのか。特定の地域で長期のフィールドワークを行ってきたチュラロンコン大学社会科学研究所主任研究員 Pinit 博士と同所の若手人類学者 Narumon 博士が、それぞれ東北タイの人口移動を促すジェンダー・世帯関係の社会文化的影響、南タイ＝ミャンマー国境を跨いで暮らす「漂海民」(モーケン人)の直面する現状について報告し、参加者は消費文化が惹起する多様な移住と経済生活、アイデンティティ形成の問題について活発な議論を行った。また、変貌する地域の現実を捉えるためには、個人を基点とするミクロな調査研究が従来にもまして重要な意義をもつことが再確認された。

2003年1月25日	Towards a Better Understanding of the Moken Sea Nomads
Social Change and Socio-Cultural Influences of Gender and Household Relations on Migration Decision-Making: A Case Study of Isan Migrants	(チュラロンコン大学) Narumon Arunotai
(チュラロンコン大学) Pinit Lapthananon	

(2) 「東南アジアの自然と農業」研究会

「整理されたすきのない発表よりも、荒削りでもよい、むしろ跳躍力のある研究会にしたい」と

いう創設以来の基本的な姿勢のもと、20年以上にわたり継続してきた研究会である。研究会での話題は、東南アジアの自然と農業を中心としつつも、農学・生態学・薬学・地理学・人類学・歴史学・社会学など、分野を横断するだけでなく、地域間比較のため、アジア全域やアフリカをも対象としてきた。多様なメンバーが交錯する場であることが本研究会の第一の特徴である。もう一つの特徴はフィールドワークに基づいた研究発表会であるという点にある。長期間の臨地研究によって得られた着想や感動をアカデミックに意味のあるものとするための格闘の場であり、同一の目的を持った多様なメンバーによる学際研究の実践の場である。研究会の開催は、原則的に8月を除く偶数月の第3金曜日午後4～6時、東南アジア研究所東棟2階セミナー室にて行われている。当研究会の過去の発表内容や今後の案内は下記のホームページから参照可能。

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/seana/>

- | | |
|---|---|
| 第105回研究会（2002年4月26日）
「空白地帯からの開発援助レポート——イリアン・ジャヤ州先住民の視点を探る」
（秋田県立大）川合 信司 | ロムサマキ解散後の水稻耕作」（京大）小林 知
第111回研究会（2003年6月27日）
「国立森林保護地域における土地利用の変化と土地所有制度に関する考察」
（総合地球環境学研究所）藤田 弥生 |
| 第106回研究会（2002年6月28日）
「フィリピン・ビコール地方における総合農協の存立条件と役割」
（北大）山田みちる | 第112回研究会（2003年10月17日）「パプアニューギニア高地におけるサツマイモ耕作の変容」
（東京医科歯科大）梅崎 昌裕 |
| 第107回研究会（2002年10月11日）
「ラオス北部山岳地域の存立基盤」
（筑波大）横山 智 | 第113回研究会（2003年12月12日）
「ミャンマー農業の多様と現在」（京大）松田 正彦 |
| 第108回研究会（2002年12月20日）
「インドネシア・スマトラ東岸部における湿地林利用の展開」
（京大）増田 和也 | 第114回研究会（2004年2月20日）
「タイ東北部におけるミアン（噛み茶）林管理とその変容——チェンマイ県パンマオー村の事例」
（京大）佐々木綾子 |
| 第109回研究会（2003年2月21日）
「エチオピアのテフ栽培——西南部マロ社会における事例から」
（人間環境大）藤本 武 | 第115回研究会（2004年4月16日）
「共生の戦略——フィリピン・パラワン島南部における先住少数民族モルボグ族の沿岸域での自然利用とその意義」
（神戸学院大）辻 貴志 |
| 第110回研究会（2003年4月18日）
「カンボジア・トンレサップ湖東岸地域におけるク | |

（3）「南アジア経済」研究会

1999年頃から、東南アジア研究センターのほか、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪市立大学経済学部、大阪府立大学農学部の教官・大学院生が中心になって、南アジア経済（特に農村経済）に関連した研究会を継続的に行っているものであり、1年間に4～5回、センターと大阪市立大学を交互に会場にして実施してきた。2003年10月に京都大学で開催された南アジア学会の第16回全国大会においては、この研究会が母体になって、「南アジアの農村経済とその

変容」と題する分科会を組織し（座長：藤田幸一）、好評を得たところである。

- | | |
|--|---|
| 2002年4月6日
「飢饉・疫病・植民地統治——開発の中の英領インド」
（大阪市大）脇村 孝平 | 賃労働世帯の経済実態——小作・賃労働・金融関係を中心に」
（京大）岡 通太郎 |
| 「インド・西ベンガル州の農業発展と管井戸灌漑——Nadia 県一農村調査より」
藤田 幸一 | 2003年8月1日
「グローバル市場経済下のデカン高原半乾燥地域農村」
（大阪府大）宇佐美好文 |
| 2003年3月29日
「インドにおける人口決定要因分析——全国標本調査（1999年度）の個票データを利用して」
（大阪府大）三村 聡,（大阪市大）佐藤 隆広 | The Role of Farmers' Collective Action for Mitigating Water Scarcity: The Case of Tank Irrigation in Tamil Nadu, India
（総合地球環境学研究所）梅津千恵子 |
| 「インド・グジャラート州の一酪農村における農業 | |

（4）「東南アジアの社会と文化」研究会

フィールドワーク（臨地調査）に基づく東南アジアの地域研究、とりわけ広い意味での社会誌・文化誌にかかわる研究発表および意見交換のためのフォーラムを目指して発足した定期的研究会である。「東南アジア」「フィールドワーク」「社会誌・文化誌」をキーワードにしつつも、地域的・方法論的志向の如何を問わず、異種・多様な研究を包摂する知的土俵を実現することを目標にかかげ、2001年1月以来、原則として奇数月の第3金曜日に京都大学東南アジア研究所東棟2階セミナー室にて開催している。本研究会のHPも公開されている。

(<http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/asia/chiiki-shinka/syakai-bunka/>)

- | | |
|--|--|
| 第8回研究会（2002年5月17日）
「『開発』と『労働』——カレン州の僧侶の活動から」
（神戸大）土佐 桂子 | 「系譜を記すということ——黒タイの家譜を考える」
（民博）檜永真佐夫 |
| 第9回研究会（2002年9月20日）
「道教からみた宗教の再編——シンガポールにおける文化の客体化について」
（滋賀大）福浦 厚子 | 第14回研究会（2003年9月19日）
「華商のネットワークとアイデンティティ」
（民博）陳 天璽 |
| 第10回研究会（2002年11月15日）
「タイ産高級米ジャスミン・ライスとガーデン・ライスの輸出と品質問題」
（天理大）宮田 敏之 | 第15回研究会（2003年11月21日）
「現代インドネシアにおける〈歴史の創造〉をめぐって——ブトンの過去の語り方」
（一橋大）山口 裕子 |
| 第11回研究会（2003年1月17日）
「移動性と秘密の言語——セブ興旺寺の事例をめぐって」
（大阪外大）宮原 暁 | 第16回研究会（2004年1月16日）
「タイ現代文学にみる〈女性の解放〉及び〈業からの解放〉——セーニー・サオワポンの作品から」
（大阪大）平松 秀樹 |
| 第12回研究会（2003年3月28日）
「『文化のインヴェンション』再考——バリ文化の表象と消費を中心に」
（一橋大）中野麻衣子 | 第17回研究会（2004年3月18日）
「シャン仏教チャーティ派の歴史と現状——シャン州における仏教実践についての事例研究」
（宮崎公立大）村上 忠良 |
| 第13回研究会（2003年5月16日） | |

(5) 研究会「国家・市場・共同体」

「国家・市場・共同体」研究会は、東南アジアの経済発展に関し、国家や市場および共同体の役割を検討することにより、東南アジア地域の特質を特に政治経済の面から明らかにしようとするグループである。アジア通貨危機があり、グローバリゼーションの影響を一層強く受けるなか、その影響とこの地域の再編成の方向を村落、地域社会、国家、東南アジア地域の諸レベルで研究している。また、地域社会の特質を各レベルにおいて、どのような主体がどのような方策でこれを保持しているのか、さらにこれがこの地域の経済発展の方向をどう規定しているのかに関する研究も進めている。最近の研究会では、ミクロレベルの農村信用組織や住民組織に関する研究報告が行われた。また、スハルト政権崩壊後のインドネシア経済社会の制度に関する研究報告や、さらに今日のグローバリゼーションの特質に関する報告が行われた。また、他の学会との共同セミナーも好評であった。今後、地域間比較の視点をより重視して研究を進めてゆく方針である。

第11回研究会(2002年5月31日)

Leading Bias, Financial Reform and Some Policy Devise: Using Micro Data for Wuxi City from 1993-1996 (徳島大) 矢野 剛

第12回研究会(2002年6月28日)

Transnationalism, Enterprise Development and Identity Formation: Malaysian Chinese Business in Local and Global Contexts (マラヤ大) Edomund Terence Gomez

第13回研究会(2002年7月5日)

「東アジア・東南アジアにおける借用技術と技術進歩」(大阪学院大) 安場 保吉

第14回研究会(2002年7月9日)

Is There a Future for Japanese Investment in Indonesia? (ライデン大) Thomas Lindbla

第15回研究会(2002年10月18日)

Structural Adjustment and Rice Policy Change in Indonesia: Its Implication for Food Security and Rural Development (インドネシア食糧調達庁, Bulog) M. Husein Sawit

第16回研究会(2002年12月13日)

「20世紀前半における東南アジアのアラブ・ネットワークの盛衰」(ミシガン大) 新井 和広
「サウディアラビア民主化の可能性」(神戸大) 中村 寛

第17回研究会(2003年3月1日)

〈フィリピン社会の変貌をどうみるか——経済学からの接近〉

「経済発展における慣習の変容——マニラの貧困地区の事例」(東大) 中西 徹

「農村金融にみるフィリピン農村社会

——ボホール州調査より」藤田 幸一

「稲収穫労働制度の変化——ラグナ州とケソン州の事例を中心として」(千葉大) 菊池 眞夫

「コメント」(拓殖大) 藤家 雅子

第18回研究会(2003年10月14日)

Impediments to Internal Military Reform in Indonesia (LIPI 政治研究センター) Ikrar Nusa Bhakti

第19回研究会(2003年10月31日)

Indonesian Migrant Workers in Japan (LIPI 人口研究センター) Haning Romdiati

第20回研究会(2004年1月13日)

“Living apart together”: Changing Attitude toward Marriage among Women in Japan (LIPI 人口研究センター) Augustina Situmorang

第21回研究会(2004年2月16日)

Appropriation of Cultural Symbols and Peasant Resistance: A Case Study from East Kalimantan, Indonesia (北星学園大) 浦野真理子

第22回研究会（2004年2月20日）
Alternative Theories of Southeast Asian Development
（大阪学院大）安場 保吉

第23回研究会（2004年3月26日）
The Analysis of Intra-Industry Trade between Indonesia and Japan: A Case Study in Manufactured and Agricultural Products
（LIPI 経済研究センター）Zamroni Salim

（6）共同研究「東南アジア大陸山地部研究会」

本研究会が対象とするのは、ベトナム・タイ・ラオス・ミャンマー・中国南部の山地部である。この地域はほんの10数年前まで、少数民族がさまざまな文化ルールにしたがって棲み分け、「外文明」との関係が極端に乏しく、「手をつけられていない、損なわれていない」地域であると考えられていた。しかし、1990年代以降、内外の研究者によるベトナムやラオス、中国西南部での長期のフィールドワークが可能になり、多くの分野で研究が蓄積されつつある。また、この地域は急激な経済発展や人口の移動、開発政策などさまざまな理由によって、自然環境の破壊や民族問題など緊急の解決を要する多くの問題が発生している地域でもある。そこで本研究会は、地域を限定し分野横断的な研究会とすることにより、この地域の基層を理解するだけでなく、多数の要因が複雑に絡み合った現代の課題群へのアプローチをも視野に入れた総合的研究を行うことを目的として組織された。

これまでに実施した研究会は以下のとおりである。

第8回研究会（2002年6月6日）
「ミャンマー農村調査報告（1）——金融を軸に」
藤田 幸一

tain Region （ハノイ農業大）Tran Duc Vien
The Human Dimension: Toward a More Integrated Analysis
（イースト・ウェストセンター）Neil Jamieson
ディスカッサント： 速水 洋子

第9回研究会（2002年9月18日）
「ゴムが変えた盆地世界——雲南・シーサンパンナの漢族移民とその周辺」 （大阪外大）深尾 葉子

第11回研究会（2003年6月27日）
（東南アジアの自然と農業研究会と合同開催）
「ラオス国立森林保護地域における土地利用の変化と土地所有制度に関する考察」
（総合地球環境学研究所）藤田 弥生

第10回研究会（2002年11月1日）
“Contemporary Changes in Northern Mountain Region of Vietnam”
Five Decades of Human Impact on Vegetation Cover in Vietnam’s Northern Mountain Region
（ベトナム国立大）Dao Minh Truong
Nutrient Balance of a Composite Swiddening Agroecosystem in Vietnam’s Northern Moun-

第12回研究会（2003年12月19日）
「ラオス・ルアンプラバン県の焼畑農業を中心とした土地利用変化モデルに関する研究」
（東大）和田由美子

（7）研究会「環ヒマラヤ広域圏における生態資源利用の比較地域間研究」

略称「環ヒマラヤ研究会」は、ヒマラヤを中央におき、その周辺を広域的にとらえ、東南アジア、南アジア、西アジア、チベット、モンゴルの計5大生態圏における生態資源と社会の変容過程を把握しようとするものである。これまで数年間、このテーマにそって研究会を行ってき

るが、最近の研究会は以下のとおりである。

- 2002年7月24日 「チベットにおけるヤクの飼育」 (帯広畜産大) 本郷 昭夫
「乳加工体系から見た環ヒマラヤ広域圏における地域間比較——チベット牧畜民の位置づけ」 2004年3月30日
平田 昌弘 「ゾロアスター教の歴史と環境認識」
2003年3月12日 (東京外大) 青木 健

(8) 共同研究「民族間関係・移動・文化再編」

過去およそ30年間に東南アジアが経験した「開発の時代」は、一方で国民国家を枠組とするナショナリズム、近代化、経済発展、都市化としての変化、他方で資本、労働力、文化などのグローバル化の一環としての変化をもたらした。1998年度に発足した本研究会は、最近実施された調査研究に基づいて、その社会変容の諸相を、民族間関係、移動、文化再編をキーワードにして考察を深めることを狙いとする。2003年度まで通算18回を実施、対象地域は東南アジアはもとより、東アジア、アフリカにおよび、多岐にわたる主題についての地域間比較をも試みている。2002年度から2003年度にかけては、2回の特別研究会を含む計4回の研究会を開催し、13名による発表報告を実施した。

- 第15回研究会「特別研究会——カンボジア研究特集」(2002年12月6～7日)
「カンボジアの紛争」 (アジア経済研究所) 天川 直子
「理事官府定期報告書から見た仏領期コムボン・チャム地方史」 (民博地域研) 北川 香子
「アンコールをめぐるクメール語による語り——1920～30年代の雑誌記事の分析から」 (学振特別研究員) 笹川 秀夫
「民主カンブチアにおける理想的女性の表象」 (東京外大) 岡田 知子
「カンボジア・トンレサップ湖東岸地域における村落社会の編成について——コンポントム州コンボンスヴァーイ郡サンコー区V村を中心とした事例報告」 (京大) 小林 知
「現代カンボジア出産事情——産婆をめぐる近代化」 (愛国学園大) 高橋 美和
- 第16回研究会「東南アジア大陸部におけるキリスト教」(2003年2月18日)
「東南アジア大陸部の山地民キリスト教徒にみる救済モチーフと民族主義——タイ国のラフの事例から」 (九州大) 片岡 樹
「民族間関係におけるキリスト教と少数者集団——ビルマ・タイ国境地帯のバプティスト派ラフ族の事例」 (金沢大) 西本 陽一
- 第17回研究会(2004年1月26日)
「日系アメリカ人キリスト教女性のアイデンティティ交渉——『主人の道具』を流用していかに自らの家を再建できるか?」 (京都学園大) 黒木 雅子
「コメント」 (広島大) 窪田 幸子
- 第18回研究会「特別研究会——ミャンマーにおける宗教と社会」(2004年2月6～7日)
「ミャンマーの〈国造り〉と仏教——上座仏教『全宗派合同会議』のゆくえ」 (元東京外大) 奥平 龍二
「上ビルマー村落における女性の出家行為の意味とその変化」 (総合研究大学院大) 飯國有佳子
「慈悲の政治——アウンサン・スーチーの思想と行動」 (北九州大) 伊野 憲治
「ミャンマーにおける回族(パンデー)の交易路と移住」 (元大東文化大) 吉松久美子

(9) 連携研究「開発と地域研究——市場経済における『地域』」

2002年度から国立民族学博物館地域研究企画交流センターが東南アジア研究センター、一橋大

学経済研究所、東京大学東洋文化研究所と連携して行っている共同研究。市場経済が、決して世界的規模で画一化される普遍的なものではないとの認識をふまえて、(1) 諸経済主体が保持する社会的交換や社会的ネットワークと市場経済の地域的展開過程の関連を分析し、(2) 地域に即した開発政策の立案と実施に資することを目的に組織された。地域研究と経済学を架橋しようとする試みでもある。東南アジア研究センターからは、藤田幸一が代表者として、田中耕司が班員として参加している。2002年度は東南アジア地域を対象に開発戦略と地域社会に関する検討を行い、7月に東大東洋文化研究所で、そして下記の研究会が12月に東南アジア研究センターで開催された。また、2003年2月に一橋大学で国際ワークショップを開催した。

2002年12月13日		「コメント」	田中 耕司
「ラオス——農業開発」	(神戸大) 福井 清一	2002年12月14日	
「ラオス——工業化」	(青山学院大) 大野 昭彦	「開発論と地域研究」	(東大) 原 洋之介
「ベトナム——農業開発」	(東大) 泉田 洋一	「歴史地域学の実験——バックコック調査の紹介」	
「ベトナム——貧困」	(東大) 池本 幸生		(東大) 桜井由躬雄

(10) 「近畿熱帯医学」研究会

4回行われた研究会のうち、下記3回の研究会を東南アジア研究センターで実施した。2003年度最初の研究会では、東南アジア研究センターの教官2名がそれぞれ現在の自分の研究を中心に話題を提供し、参加者と活発な情報交換が行われた。2003年度2回目の研究会では、タイムリーなSARSの話題提供があり、診断、治療、予防に関する質疑応答があった。また若手の大学院生がバングラデシュ国際下痢症研究センターで経験した医師の研修コースの経験談を紹介し、新鮮な話題提供となった。2004年の第1回目は、3名のスピーカーが、各自のフィールドの経験をもとに話題を提供し、感染症のコントロールに関する質疑が活発に行われた。取り上げられた感染症は、いずれも熱帯では非常に重要なものであり、参加者から多くの質問があった。

2003年2月1日		業団派遣研修報告	(京大) 角 泰人
「東南アジアのコレラと腸炎ビブリオ——魚介類汚染と感染症」	西淵 光昭	2004年1月24日	
「熱帯地域における地域住民の健康状態について——ニューギニア・ミャンマーを中心として」	松林 公蔵	「アフリカでのエボラ出血熱の話——そこから学んだSARS対策」	(仙台検疫所) 岩崎恵美子
		「エイズと結核の同時蔓延に関する研究と対策——タイ北端チェンライ県での10年間のフィールド研究開発の実践より」	(結核研究所) 野内 英樹
2003年5月31日		「マラリアの迅速診断法・迅速治療法を発展途上国のへき地に普及する——インドネシア・ミャンマーでの活動から」	(自治医大) 松岡 裕之
「インフルエンザとSARS——流行の原点としての香港」	(滋賀県立医大) 山田 明		
「バングラデシュ下痢疾患研修日誌——国際厚生事			

(11) 共同研究会「理地的地域研究の必要性と可能性——生態論理・農村開発・環境問題のアプローチ」

地域研究は調査と実践のフィードバックの繰り返しによって、より明確な問題発見もしくは問

題の本質が理解される。実践をきちっと研究に位置づけることが必要とされている。理科は実践（あるいは実験と読み替えてもいい）を経るという手続きが不可欠であり、そこに理科の面白みがある。理系でもなく、生態学的、農学的でもなく理科とした所以である。地域研究における実践的研究の重要性をみずからの研究歴の中で示されてきた、海田能宏、石田紀郎（アジア・アフリカ地域研究研究科）、古川久雄（同）の3氏の研究アプローチこそは、地域を理解する基礎的地域研究から一歩踏み込んだ、地域と実践的にかかわり地域を創造する応用的地域研究と指摘しうる。実践研究支援を志向する組織、個人が近年増えつつあり、実践を取り込んだ息の長い地域研究の展開のための社会環境も整備されつつある。こうした社会的要請に応えるためにも、地域研究が何を社会にアピールし、いかに組織的対応をすべきかを考える時期に来ている。3氏の問題提起を受け、地域研究における長期的な実践研究が継続できる仕組みと組織、ネットワークの構築の必要性と可能性について活発に意見交換がなされた。

2003年2月7日	「現実との対話から掴む——こだわりの農村開発研究」	海田 能宏
「趣旨説明——実践研究を継続する組織の必要性」		
	安藤 和雄	「当事者の迫力に学ぶ——人をかりたてる環境問題研究」
「平和環境もやいネット構想」		(ASAFAS) 石田 紀郎
	(ASAFAS) 古川 久雄	

(12) 共同研究会「農村開発における地域性」

農村開発は、村が置かれている地域性と、村がもっている在地性に強く影響をうけながら、地方行政、NGO、村人の参加によって事業として具体的に計画される。したがって農村開発がかかえる問題群を理解するためには、人を中核においた地域の全体像のうちに問題群を位置づけていく地域研究のアプローチが期待されている。農村開発を応用的地域研究に位置づけ、共同研究会を開催してきている。ここ数年は、地方行政と生活文化の基層に焦点をあててきた。

2002年度は、バングラデシュを中心に置き、日本の生活改善事業の経験との比較、周辺地域との農業の比較、また宗教の視点からバングラデシュの地域性について下記の問題提起発表が行われ、ワークショップ形式で活発に議論がなされた。この研究会で取り上げるべき課題はまだまだ多く、今後も研究会を継続してその研究成果を発表していきたい。

第9回研究会（2003年3月18日）	第10回研究会（2003年3月25日）
〈地方行政と農村開発——村のリーダーたちと改良普及事業〉	〈生活文化・暮らしの基層——農耕様式とチベット仏教におけるベンガル僧にみるバングラデシュと周辺の関わり〉
「生活改善活動で進めたリーダーの確保・育成について」	「19世紀初頭コッチ・ビハールの農業社会構造——畑作と水田稲作」
(日本農業新聞) 西潟 範子	(一橋大) 谷口 晋吉
「亀岡市の農家のリーダーたちと改良普及事業」	「アラカン、マニプール、アッサム、チッタゴンの犁と農業」
(亀岡市農業改良普及センター) 松田 武子	安藤 和雄
「バングラデシュの農村開発と農村リーダーたち」	「チベット文献にみられるベンガル出身の僧侶」
安藤 和雄	(高野山大) 藤田 光寛

(13) バンコク・タイ研究会

東南アジア研究所バンコク連絡事務所は2003年6月より、会場提供などを通じて研究会支援を始めている。本研究会はタイに長期滞在するさまざまな大学の大学院生が主体となり、数年前からバンコクで開催されていたものである。現在は、連絡事務所で月1回程度のペースで開催している。トピックは、主としてタイに関するものであるが、近隣諸国や地域間比較に関する研究発表も行っている。バンコク滞在の機会には、ぜひ、研究会のスケジュールをチェックし、参加していただきたい。

- | | |
|---|---|
| 第1回 (2003年6月14日)
「調査研究経過報告——コラート県の農業機械産業における技術形成と社会的学習」
(東大) 森田 敦郎 | 「セーニー・サオワボンとタイ現代文学」
(大阪大) 平松 秀樹 |
| 「タイ近代法システムに対するモン族の適応戦略」
(慶大) 吉井 千周 | 第5回 (2003年12月20日)
「タイ・ムスリムの移住史」
(Bangkok Spring Industrial Co, Ltd.) 木村正人
フォーラム「タイにおける民主化・人権 NGO の展開」
(アジア経済研究所) 重富真一 |
| 第2回 (2003年7月26日)
「タイ近代警察の蹉跌——立憲革命後の地方統治と『警察』システム」
(ASAFAS) 水谷 康弘
「ヴェトナム戦争とタイの社会変容」
(早大) 高橋 勝幸 | 第6回 (2004年2月1日)
「チャンの世界——タイ産業社会における職業集団と労働市場」
(東大) 森田 敦郎
「タイ大学生のPC購買意思形成過程——構造方程式モデリングによる考察」
(東大) 市野沢潤平 |
| 第3回 (2003年9月14日)
「『迷惑施設』の誕生と住民投票制定指向型住民運動」
(慶大) 吉井 千周 | 第7回 (2004年3月13日)
「フォーマルセクターからインフォーマルセクターへ?——タイにおけるグローバル化と女性労働者のライフコース」
(京大) 遠藤 環 |
| 第4回 (2003年10月26日)
Chaopoo Patronage or State Patronage
(チュラロンコン大) Viengrat Nethipo | |

(14) 「農業経済と地域研究」研究会

2003年度から新しく組織した所内研究会で、農業経済学を切り口にしながら、東南アジア、南アジア、その他周辺地域の地域理解を促進することをねらいとしたものである。第1回研究会は、下記のとおり、アジア経済研究所の海外客員研究員として東京に在籍していた、インド農業経済学の第一人者のひとりである Ramesh Chand 教授（デリー大学経済成長研究所）を招いてインド農業経済に関連する研究会を実施した。

- | | |
|--|--|
| 2003年8月11日
Food Policy and Food Security in India during the Reforms
(デリー大) Ramesh Chand | Trade Liberalization and Agrarian Structure in India
(京都府大) 杉本 大三 |
|--|--|

(15) Asian Public Intellectuals Seminar

API (Asian Public Intellectuals) Fellowship は日本財団の助成で実施しているフェローシップ・プログラムで、日本、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンの「公的領域」において活動する知識人を対象とするものである。2002年度、2003年度には、その活動の一環として、2002年9月4日、2003年10月17日に京都大学にてワークショップを開催した。2002年のワークショップにおいては、Mary John Mananzanan, Pateep Methakunavudhi, Allan Jose Villarante の各氏が、助成のエンパワーメント、日本人とタイ人の民族意識、日本の少年指導制度について報告を行った。また2003年には荒木哲也, Wimonrart Issarathumnoon, Hui Seng Kin, Joyce Lim Suan Li, 永井史男, Rachel Pastores Corro, Nareerat Leelawat, 片岡 樹の8名がそれぞれ、インドネシアのNGOネットワーク作り、京都の町造り、日本のダム建設と市民グループ、フィリピンとインドネシアの現代舞踊、タイの地方分権、日本の外国人労働者、マンガに見るアイデンティティ構築、タイの山地民のアイデンティティについて報告を行った。

2002年9月4日

Commitment to Empowering Women

(API シニア・フェロー) Mary John Mananzanan

The Comparative Study of the Ethical Awareness Related to Information Technology Security Issues between Japanese and Thais

(API シニア・フェロー) Pateep Methakunavudhi

In Defense of the Shonen-Shido-Seido: An Analysis from a Holistic Perspective

(API ジュニア・フェロー) Allan Jose Villarante

2003年10月17日

Putting the First Last: Networking NGOs in Indonesia

(日大) 荒木 哲也

Kyoto with Her Townspeople

(チュラロンコン大) Wimonrart Issarathumnoon

Civil Society in Dam Decision-making in Japan: An Observation

(SUARAM, Malaysia) Hui Seng Kin

On the Development of Contemporary Dance in the Philippines and Indonesia

(舞踏振り付け師) Joyce Lim Suan Li

Transformation of Political Structure in Decentralization in Thailand: The Case of the Hangchat District, Lampang Province, Thailand

(大阪市大) 永井 史男

The Impact of Globalization to Migrant Workers in Japan in the Areas of Employment and Labor Standards: An Analysis of Migration Policies, Strategies and Approaches

(フィリピン統合弁護士会) Rachel Pastores Corro

Negotiating of Identity in "Manga"

(タマサート大) Nareerat Leelawat

Changing Identities of the Hill Tribes in Contemporary Thailand: My Research Activities in Thailand

(九大) 片岡 樹

シンポジウム

(1) **International Workshop on "Cultural Diversity and Conservation in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China: Regional Dynamics in the Past and Present"** (於ルアンパバーン, 2002年2月19～20日)

COE 形成基礎研究プロジェクト「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」による東南アジア・クラスター(社会相関)の研究活動の一環として、2002年2月ラオス人民民主共和国ルアンパバーン市で国際研究集会「東南アジア大陸部と西南中国における文化の多様性

と保存——過去と現在における地域の動態」を開催し、ラオス（4）、中国（3）、タイ（3）、日本（3）、ドイツ（2）、オーストラリア（1）からの参加者計16名が最新の民族誌データに基づく研究発表と討論を行った。また、ホストを務めたラオス情報文化省博物館考古局の協力により、参加者は会議に先立つ3日間にわたってルアンパバーン市近郊の複数の集落を訪れ、地域と民族が直面する諸問題と現状について住民との聞き取り調査、意見交換を実施した。それぞれの発表報告は、こうした経験を共有した後リライトされ、ラオ語要約を付した英文報告書として編集、バンコクのアマリン社より2003年5月に刊行された。

「開会挨拶」 (ラオス・ルアンパバーン市長) Saysamone Khomthavong
林 行夫

History of Population in Laos and Essay on Ethnic Classification (ラオス情報文化省) Humpanh Rattanavong

Languages and Ethnic Classification in Lao PDR (ラオス情報文化省) Thongpheth Kingsada
Historical, Cultural and Ethnical Relationship between Lao-Ta and Kumhmu Ethnic Group (ラオス情報文化省) Souksavang Simana

Commoners and Slaves in Ancient Lan Na Society (チェンマイ・ラーチャパット大学) Aroonrut Wichienkeoo
Cao Fa Dek Noi and the Founding Myth of the Lue Polity of Chiang Khaeng (ミュンスター大学民族研究所) Volker Grabowsky

The Aboriginal Tribes and the Tribal Principalities in Yunnan as Presented in the Ming and Early Qing Historiography: A Preliminary Survey (ミュンスター大学民族研究所) Foon Ming Liew
Black Tai in Lao PDR (マヒドン大) Pattiya Jimreivat

The Family Structure and Everyday Life of Puer Dai People in Jinping County (雲南民族研究所) He Shaoying
Buddhist Revivalism in the Tai World (マックオリー大) Paul Theodore Cohen

Khuba Movements and the Karen in Northern Thailand: Negotiating Sacred Spacand Identity (チェンマイ大) Kwanchewan Buadng
Meat-Consumption, Feasting and Commensality among Karen in the Context of

Socio-Religious Changes in the Upland-Lowland Continuum 速水 洋子
A Study on Culture Contact and Cultural Change: Atsang and De'ang Nationalities as Cases (雲南師範大) Yuan Yan

Probing the Origin of "Offering Sacrifices to God" and "Driving Out Ghosts" by the Dai Nationality (雲南民族研究所) Yang Guang-yuan
Forest Domesticated: Ethnic and Religious Practice among the Lao and Neighbors 林 行夫
Agricultural Intensification and Diversification in the Northern Mountain Region of Vietnam 柳澤 雅之

Preservation of Cultural Heritage in Lao PDR: With Special Reference to Luang Prabang Case (ラオス情報文化省) Thongsay Sayavongkhamdy
Ethnic Cultures and Tourism Development in Xishuangbanna, Yunnan Province (埼玉文教大) 長谷川 清

(2) **International Workshop on “Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China under ‘Globalization’”** (於京都, 2002年10月29～30日)

COE 形成基礎研究プロジェクト「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」による東南アジア・クラスター(社会相関)の研究活動の一環として, 2002年10月京都大学東南アジア研究センターにおいて国際研究集会「〈グローバル化〉下の東南アジア大陸部と西南中国における民族間関係」を開催し, 日本(4), 中国(3), タイ(1), 米国(1)からの参加者計9名が最新の民族誌データに基づく研究発表と討論を行った。それぞれの発表報告は, 討論の成果をふまえてリライトされ, 英文報告書として近く編集刊行される予定である。

2002年10月29日

Land Management in Ancient Lan Na Society: A Case of Paddy Fields

(チェンマイ・ラーチャパット大学) Aroonrut Wichienkeo

A Comparative Study of the Sacrificial Rites Held by the Minority Nationalities in Xinping County:

A Case Study of the Yi, the Hani and the Dai Nationalities (雲南民族研究所) Yang Guang-yuan
Restoration of Rituals and Dai Identity in Sipsong Panna, Yunnan Province

(埼玉文教大) 長谷川 清

National Assemblies: Ethnic Minorities in Thailand’s Museums

(アリゾナ州立大) Hjorleifur Jonsson

Approaching Protection and Utilization of Language and Culture of

Xiandao from Phenomena of Global Dying Languages and Culture (雲南師範大) Yuan Yan

2002年10月30日

Hills and Plains in Mainland Southeast Asia from the Perspective of Religious Dynamics

速水 洋子

Traditional Culture of the Lahu under Globalization

(雲南民族研究所) Liu Jingrong

Tai-Lue Migration and Changing Spirit Cult: In the Context of Nation-State in

Recent Transnational Movement

(三重県立看護大) 馬場 雄司

Theravada Buddhist Practices across Regional Boundaries

林 行夫

(3) **COE 国際セミナー “Regions in Globalization”** (2002年10月25～27日)

国際会議「グローバル化と地域形成」が, 文部科学省科学研究費中核的研究拠点形成(COE)プログラム「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」の助成のもとで, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)との共催によりキャンパスプラザ京都で開催された。全233名の参加者のもと Immanuel Wallerstein 氏による特別講演および以下の三つのセッションを中心に, グローバル化の進行に対する地域研究によるアプローチ, 地域間比較研究による地域横断的な課題が検討された。

セッション1「農業開発再考——地域から見るグローバル化」では, 新しい農業と農村の開発のあり方を考える上で, 地域研究の成果がどのような貢献を果たしうるかが検討された。セッション2「グローバル化状況における日常実践の変容」では, グローバル化のもとでの人々の宗

教・エスニシティー・ジェンダー等に関わる日常実践の変容が検討され、セッション3「地域と国家」においては、グローバル化が国家に与えるストレス要因が議論された。

Special Lecture

Geopolitical Cleavages of the 21st Century: What Future for the World?

(ニューヨーク州立大) Immanuel Wallerstein

セッション1: Rethinking Agricultural Development: Globalization and Site-Oriented Approaches

議長 (ASAFAS) 島田 周平

Which Should Be the Target of International Cooperation, Agricultural
or Rural Development?

(日大) 林 幸博

Globalization and Liberalization: An Opportunity or a Threat
to African Agriculture?

(国際熱帯農業研究所) Victor Manyong

Small Holders and Nontraditional Exports under Economic Liberalization:

The Case of Pineapples in Ghana

(アジア経済研究所) 高根 努

Development and Village Agroecosystems in Vietnam's

Northern Mountain Region

A. Terry Rambo

Chronicle of a Death Foretold: Some Thoughts on Peasants, the Agrarian

Question and Site-Oriented Approaches to Globalization

(カリフォルニア大バークレー校) Michael Watts

セッション2: Transformation of Everyday Practice in the Age of Globalization

議長 (ASAFAS) 田辺 明生

Sports and Culture: Constituting Mien in Contemporary Thailand

(アリゾナ州立大) Hjorleifur Jonsson

Recapturing the City: Everyday Life Practices of Maragoli Migrants in Nairobi

(京大) 松田 素二

Globalization and Religious Conversion in Lamu, Kenya

(東京都立大) 大塚 和夫

Ecologies of Labor and Expertise

(カリフォルニア大学バークレー校) Aihwa Ong

Between Autochthony and Diaspora: Indians in the "New" South Africa

(エジンバラ大) Thomas B. Hansen



セッション3: Regions and States under Stress

議長: Patricio N. Abinales

Globalization and the State in Africa

(海軍大学院大) Letitia Lawson

Sovereignty at Bay? The African State in the Context of Globalization

(東大) 遠藤 貢

Forecasting Failure in Southeast Asia: Burma since the 1990s

(ワシントン大) Mary P. Callahan

In the Wake of Globalization: Political Stresses in South Asia

(ジャミア・ミリア・イスラミア大) Achin Vanaik

Globalization, Hegemony, and the State in Bangladesh

(ダッカ大) Amena Mohsin

「総合討論」

Patricio N. Abinales, 白石 隆, 田中 耕司, (東大) 原 洋之介,
(ASAFAS) 小杉 泰, 島田 周平, 田辺 明生

(4) 拠点大学ワークショップ “Perspectives of Flows, Middle Class, State, and Market for Asia” (2003年1月14～15日)

中産階級とフロー新規プロジェクトに関してはブレインストーミングを目的として、3年目に入った市場・国家プロジェクトについては各参加者に論文発表を求め、タマサート大学において拠点大学ワークショップを開催した。

日本からは末廣(東大)、浦田(早大)、篠原(同大)、鳥居(明大)の各氏、東南アジア研究センターからは白石、濱下、石川、Hau、阿部、藤田が参加した。マレーシアから3名、シンガポール2名、フィリピン1名、インドネシア1名、タイから27名、その他タイ在住の学者の参加もあり、参加者が全体で50名を超える盛況ぶりであった。

中産階級プロジェクトは白石をリーダーに、中産階級擡頭の政治・経済・社会・文化的意義を地域論的、比較論的観点から考察し、明らかにしようとする。一方、フロープロジェクトは石川・Hauをコーディネーターとし、もの・サービスのみならず、国家間を動くものすべてを対象に学際的に考察を加えようというものである。ワークショップにおいて白石は、プロジェクトの方向性を示す基調論文を発表、石川・Hauも同様に趣旨説明を行い、両プロジェクトの意図するところを参加者に徹底した。同時に主要参加者から自らの研究計画の説明を受け、今後の研究の枠組みについて議論、理解を深めた。

阿部が担当する市場・国家プロジェクトに関しては、これまで3年間の研究成果が発表された。タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポール、日本が抱える現在の政治経済問題、ミャンマーの農業、開発金融、地域協力、貿易・投資、政策協力、為替レート政策、生産性、タイのAFTAとWTO政策、マレーシアの経済成長についての報告が各メンバーからあり、参加者からの批判を受けて議論を深め、それぞれ研究の完成へ向けての指針を得た。

第1部: New Projects: Introduction

Introduction to the Middle Class Project and Round Table

白石 隆他

Introduction to the Flow Project and Round Table Discussion

石川 登, Caroline S. Hau 他

第2部: Current Economic Issues of Thailand, Malaysia, Indonesia, Singapore, and Japan

How to Strategically Formulate a Resilient and Robust

Economy for Thailand: A Prologue

(チュラロンコン大) Pongsak Hoontrakul

Malaysia Strategy for Regional Economic Cooperation

(マラヤ大) Mahani Zainal Abidin

Monetary Policy in Indonesia Following the Crisis in 1997-98 (インドネシア大)	Anwar Nasution
Twin Engines of Growth in Singapore: The Recent Trends in Manufacturing and Services Sector	(シンガポール国立大) Shandre Thangavelu
Japan's Dilemma: Can We Get out of This Mess?	(同志社大) 篠原 総一
第3部: State, Market, and Economic Integration in Asia	
The Rice Economy in Myanmar at the Crossroads on Myanmar Agriculture	藤田 幸一
The Role of Policy and Institutions in East Asia's Sustainable Development Finance	(神戸大) 根岸 祥子
A Shift from Market-led to Institution-led Regional Economic Integration in East Asia	(早大) 浦田秀次郎
Changes in Trade and Investment Flows in Asia after the Crisis	阿部 茂行
National Economies under Globalization: A Quest for New Development Strategies	(大阪大) 高阪 章
Roles of MNCs in Regional Development and Their Locational Determinants: The Case of Thailand	(名古屋大) 岡本由美子
Reemergence of Asia as a Core of Economic Growth and Stability, the Power of Regional Policy Coordination and Cooperation	(チナワット大) Olarn Chairpravat
Exports, Domestic Demand, and Economic Growth in Malaysia	(マレーシア科学大) Lai Yew Wah
Structural Changes and Productivity Growth	(シンガポール国立大) Shandre Thangavelu
AFTA and WTO: Thailand's Perspective	(チュラロンコン大) Suthiphand Chirativat
Contractionary Devaluation Revisited	(タマサート大) Bhanupong Nidhiprabha

(5) "The Mekong Spirit: Cliche or New Concept?"

中国も加わり、メコン河流域開発に関係諸国の協力が必要であることが、再び議論されるようになってきた。最近のこの大きな変化は、かつての流域諸国の協力体制の単なる再構築にすぎないのか、あるいは新しいコンセプトのもとでの協力関係なのかを見極めるため、“The Mekong Spirit: Cliche or New Concept?”と題する国際シンポジウムをタイのバンコクにて、地域研究企画交流センターならびに日本学術振興会バンコクオフィスとの共同で開催した。関係諸国出身の若手研究者が中心となった研究発表では、協力体制構築のためのさまざまなアプローチが提案された。また、メコン流域開発に長年、直接に関わってきた政策アドバイザーや技術者からは、利害関係調節の困難さと同時に、新しい関係の大切さが強調された。このようなシンポジウムの継続は、利害を超えた協力関係の構築や、世代を超えた協力のための知恵を継承し発展させることに大きな役割があると考えられる。

2003年3月8日

「挨拶と趣旨説明」 (民博地域研) 阿部 健一
「基調講演」 Some Thoughts on the Mekong Spirit (元 UNDP 本部, 国際水資源学会) 堀 博
セッション1: National versus Regional Concerns in the Development 司会: 柳澤 雅之
Challenges and Opportunities for Enhancing Environmental
Management in Lao PDR (メコン委員会ラオス) Chandavanh Dethrasavong
Poverty Reduction in Thailand and the Cooperation among the GMS
(タイ国家経済社会発展省) Jianggoon Rojananan

- A Study of Economic and Social Impact of Rural Access Roads:
 A Case Study of Savannaket, Lao PDR (早大) 大塚 幸司
- A Research on the Differentiated Development Policies of
 the Lancang River Basin and Some Policy Suggestions (昆明科学技術大) Ling Yang
セッション2: The Contested Development 司会: (京大) 樋口 浩和
- Conflicts and Coordinating the Relationship among the Interest Groups:
 A Case Study of Lancang-Mekong (雲南大) Lihui Chen, (南京大) Zungu Zeng, (雲南大) Daming He
- Natural Resources for Development and the Destiny of Marginal Groups:
 A Case Study of Indigenous People in Rattanakiri Province, Cambodia (ウボンラチャタニ大) Sommai Chinnak
- Opening the Sluice Gates of Pak Mun Dam in Thailand for Four Months:
 Questions for Sustainable Development of People's Livelihood
 and Ecological Restoration (ウボンラチャタニ大) Kanokwan Manorom
- 3月9日
- セッション3: For the Regional Cooperation** 司会: 藤田 渡
- Cooperation in the Mekong Region: Issues and Lessons Learnt (カンボジア水産連携チーム) Mak Sithirith
- Basin Development Plan in the Lower Mekong Basin (メコン委員会) 加本 実
- The Governance of Increasing Mekong Regionalism (チェンマイ大) John Dore
- Proposals on the Economic Cooperation between China
 and GMS Enterprises (雲南省外国貿易経済協力局) Yonglin Yin
- セッション4: Mekong Development in a Global Concern**
- Foreign Investment in Vietnam: The Opportunities
 for Co-operation among GMS (ベトナム保険会社) Pham Van Thanh
- Japanese Participation in Mekong Development:
 Changing Paradigms of the Past 50 Years (京大) 山本麻紀子
- A Study of Yunnan's Strategic Status in China-ASEAN
 Free Trade Area Construction (昆明社会技術大) Mao He
- Concluding Discussion ディスカッション: (昆明社会技術大) Chen Jiangming

(6) 「タイ東北部の社会経済ならびに政治変化」に関するワークショップ

このワークショップは、日本大学(2003年5月21, 22日)と東南アジア研究センター(23日)において3大学共催で開催された。コンケン大学チームが研究成果を発表し、それに日本人研究者が討論をする形で、ワークショップは進んだ。テーマと発表者(討論者)は次のとおり。「貧困」について Buapun (山形辰文), 「開発に関する東北タイ一村の見方」について Ratana (Rambo), 「人口予測」について Somnuek (小川直宏, 斎藤安彦), 「ジェンダーの政治における役割」について Farung (速水洋子), 「都市化」について Apisak (安藤博文), 「村の管理能力」について Peerasit (阿部茂行)。コンケン大学チームの発表は図表を多用したもので、東北タイに馴染みのない研究者にとっても情報が多く、専門領域にとられない議論が展開された。

- Poverty, Inequality and Quality of Life of People in the Northeast of Thailand
 (コンケン大) Buapun Promphakping
 ディスカッション: (アジア経済研究所) 山形 辰文

A Narrative of Contested Views of Development in Thai Society:

Voices of Villagers in Rural Northeastern Thailand (コンケン大) Ratana Tosakul-Boonmathya

ディスカッサント: A. Terry Rambo

Estimation of Population Related with Substance Abuse: Northeastern Region

(コンケン大) Somnuek Panyasing

ディスカッサント: (日大) 小川 直宏, (日大) 斎藤 安彦

Gender Role in Local Politics in the Northeast of Thailand

(コンケン大) Farung Meeudon

ディスカッサント: 速水 洋子

Urbanization of Khon Kaen and Its Impact on Culture

(コンケン大) Apisak Fhaithakam

ディスカッサント: (日大) 安藤 博文

Management Capability of Tambon Administration Organizations

in the Northeast of Thailand

(コンケン大) Peerasit Kamnuansilpa

ディスカッサント: 阿部 茂行

(7) 国際シンポジウム「限界地域における小規模生業・自然資源管理の改善のための新たな手法——アジアモンスーン地域の経験」(2003年10月29～30日)

本シンポジウムは、2003年10月29～30日、東京の国際連合大学において、国際連合大学、国際農林水産業研究センターと共同で開催された。中国、韓国、ベトナム、ラオス、タイ、インドネシア、インド、ネパール、アメリカ、日本などから約80人の研究者や実務家が出席した。世界人口の約3分の2がアジアモンスーン地域に暮らしているが、その多くは自然資源が脆弱で環境の劣化が著しい限界地域に住んでいる。このような限界地域においては、いわゆる近代的な農業・資源管理手法を適用するのは困難である。そこで、小規模生業のための技術改良や経営改善の手法開発における政府と農民の役割、市場経済の拡大と効用、自然資源の多面的な利用と管理、生業の多様性とセーフティネットなどについて、現地での経験を結集して議論した。同時に、このような課題に挑戦していくために、地域横断的で組織横断的な研究ネットワークが有効であり、その確立に向けて今後も共同した活動を続けていくことが確認された。

10月29日

セッション1: Keynote Presentations

司会: (東大) 大塚柳太郎

Roles of Modern Technologies for Marginal Areas

(国連大) A. H. Zakri

Smallholder-developed "Hybrid Systems" as an Underutilized Resource:

The PLEC Experience

(コロンビア大) Miguel Pinedo Vasquez

セッション2: Agro-diversity Management

司会: (京大) 縄田 栄治

コメンテーター: (筑波大) 渡邊 和男

Agrodiversity Lessons: Examples from the Highlands of Northern Thailand

(チェンマイ大) Kanok Rerkasem

Dynamics of Rainfed Lowland Rice Varieties in Northeast Thailand

(岐阜大) 宮川 修一

Changes in Agricultural Biodiversity: Implications for Sustainable Livelihood

in the Himalaya

(ジャワハルラルネルー大学) Krishna Gopal Saxena

セッション3: Farm Management and Livelihoods

司会: (国連大) 小堀 巖

コメンテーター: 河野 泰之

Multiple Cropping of Slope Land Agriculture in the Central Part of Japan (信州大) 星川 和俊
Household Options and Limitations in Marginal Upland Areas in Java

(元国際農林水産業研究センター) 後藤 淳子

Potential and Constraints for Intensive Land Use with Pond Irrigation
in Northeast Thailand

(国際農林水産業研究センター) 安藤 益夫

セッション4 : Forest Resources Management

司会 : (森林総合研究所) 池田 俊彌

コメンテーター : (広島大) Keshav Lall Maharjan

Local Response to a Government Land-allocation Program:

The Role of NTFPs in Marginal Mountainous Areas in Lao PDR (ASAFAS) 竹田 晋也

Historical Change and Significance Regarding the Management and

Utilization of Forest Resources in Korea (慶尚大学校) Eui-Gyeong Kim

Mangrove Forest Rehabilitation in Southeast Asia (森林総合研究所) 田淵 隆一

10月30日

セッション5 : Upscaling Farmers' Technology

司会 : 河野 泰之

コメンテーター : (インドネシア大) Yunita T. Winarto

Experience in Supervising a Farmer Network for Sustainable Agriculture

Development in Central Thailand

(エコ・コミュニティ・ビガー財団) Prateep Verapattananirund

Employment and Income Effects of Orange Incorporation into

Traditional Farming Systems in the Hill Region of Nepal

(農業・生物系特定産業技術研究機構) 横山 繁樹

New Systems and Technologies for High Quality Citrus Production,

Labor Saving and Orchard Management in Mountainous Areas of

Western Japan

(近畿中国四国農業研究センター) 森永 邦久

Development of Indigenous Technologies for Sustainable Agriculture

in Northern Upland Vietnam

(ベトナム農業科学院) Le Quoc Doanh

セッション6 : Institutional Reform and Empowerment

司会 : (UNU/Institute of Advanced Studies) M. Taeb

コメンテーター : 岡本 正明

Agriculture and Forestry Research for Improving Livelihood

in the Upland of Lao PDR

(ラオス国立農林業研究所) Bounthong Bouahom

Community Participation in Resource Management and Well Being

of People in Nepal

(広島大) Keshav Lall Maharjan

Enhancing Off-farm Employment and

Migration Participation: An Alternative

Approach to Enhancing Small-

scale Livelihoods and NRM in Poor

Areas of China

(中国科学院) Linxiu Zhang

セッション7 : Synthesis and Agenda

for Action

司会 : 田中 耕司



(8) 拠点大学ワークショップ“Perspectives of Roles of State, Market, Society, and Economic Cooperation in Asia” (2003年11月6～7日)

拠点大学ワークショップは芝蘭会館において、内外から約50名の研究者を集めて開催された。阿部茂行が担当する第3研究グループを中心に「アジアにおける国家・市場・社会・経済協力の役割の展望」に関して、6部構成、すなわち、グローバル化と地域協力、地域統合の展開、外国直接投資と地域統合、市場の失敗・成功、工業・農業の生産性、経済発展の社会的側面のセッションを設けた。



地域連携に関しては、参加各国で実務についている参加者も多く、学者の空論ではなく、現実世界を動かしている者の議論が熱く語られた。あたかも、このワークショップがアジアの協調政策を決定する影の政府かとの錯覚を覚えさせるほど、議論が盛り上がったことは特筆に値しよう。

他に、外国直接投資に関しては、投資環境がどのように実際の投資決定に影響を与えたのか、投資先の場所の決定要因がなにかをさぐる専門的な実証論文、また金融政策プロパーに関しては、為替切り下げ、クレジットクランチについての実証論文が発表された。工業・農業の生産性に関しては、マレーシア工業の生産性、日本とシンガポールの生産性の比較と高齢化、ミャンマーの農業の現状についての研究報告があった。社会的側面ではセイフティネット、マスメディアにおける広告の役割が熱っぽく語られた。

このようにどのセッションも厭きることなく2日にわたり、合計16時間、白熱の議論が時間を延長してなされ、成功裡にセミナーを終えた。

2003年11月6日

「開会挨拶」

田中 耕司

セッション1：Introduction-Globalization and Economic Cooperation in Asia

and Roles of State, Society and Market Project Introduction

阿部 茂行

The New Development Paradigm in East Asia

(EPU) Mahani Zainal Abidin

ディスカッサント：白石 隆

セッション2：Economic Integration Perspectives

The Emergence of New Regionalism in East Asia: Proliferation
of Bilateral Arrangement

(早大) 浦田秀次郎

ディスカッサント：(タマサート大) Supote Chunanuntathum

Japan-Thailand FTA: A Thai Perspective

Wisarn Pupphavesa

ディスカッサント：(名古屋大) 岡本由美子

An ASEAN Thought on Asian Regionalism

(チュラロンコン大) Suthiphand Chirativat

ディスカッサント：(神戸大) 原 正行

セッション3： Foreign Direct Investment and Economic Integration

Aid and Investment in East Asia: Does Investment Climate Matter? (神戸大) 根岸 祥子

ディスカッサント：(NIDA) Wisarn Pupphavesa

The Role of the MNCs in Regional Development and their Locational Determinants:

The Case of Thailand

(名古屋大) 岡本由美子

ディスカッサント：(TDRI) Chalongphob Sussangkarn

セッション4： Market Failure/Success Perspectives

Contractionary Devaluation and the Role of State (タマサート大) Bhanupong Nidhiprabha

ディスカッサント：(同志社大) 西村 理

2003年11月7日

Credit Crunch in East Asia: A Retrospective (大阪大) 高阪 章

ディスカッサント：(チュラロンコン大) Pongsak Hoontrakul

Thailand's Positioning in a New Global Economy: Diamond Five Paradigm

(シナワトラ大) Olarn Chaipravat

(チュラロンコン大) Pongsak Hoontrakul

ディスカッサント：(EPU) Mahani Zainal Abidin

セッション5： Production in Industry and Agriculture

Aging and Productivity for the Japanese Economy (シンガポール国立大) Shandre Thangavelu

阿部 茂行

ディスカッサント：(タマサート大) Pranee Tinakorn

Productivity, Technological Progress and Factor Substitution

in the Malaysian Manufacturing Sector

(マレーシア工科大) Lai Yew Wah

ディスカッサント：(同志社大) 篠原 総一

Rural Economy in Myanmar at the Crossroads:

With Special Reference to Rice Policies

藤田 幸一

ディスカッサント：(タマサート大) Sukhum Attavavuthichai

セッション6： Social Dimension of Development and the Role of Public and Private Sectors

Advertising Expenditures: Consequences on the Development

of the Media Industry

(USM) Yoke Lim

ディスカッサント：(ウェスト ヴァレイ カレッジ) Janice Kea

Social Safety Net in Southeast Asia

(TDRI) Srawooth U. Paitoonpong

阿部 茂行

ディスカッサント：(タマサート大) Mathana Phananimai

(9) 「地域研究コンソーシアム」設立準備ワークショップ——地域研究を？する



東南アジア研究所は、北海道大学スラブ研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、国立民族学博物館地域研究企画交流センターなどとともに、「地域研究コンソーシアム」の設立準備を進めている。地域研究コンソーシアムは幅広いアカデミック・コミュニティに立脚した地域研究推進のための協議体であり、協議した内容を実施する研究推進

システムでもある。コンソーシアムには、世界各地を対象として研究を進めてきた地域研究組織のみならず、地域に密着した研究や実践的な活動に従事されてきた組織に参加していただこうと考えている。そこで、その設立にあたり、私たちがこれまで行ってきた地域研究を総括し、今後進むべき地域研究の道すじを共有するためのワークショップを開催した。当日は全国から100名以上の参加があり、熱気溢れる討論が繰り広げられた。

2004年1月9日（学士会館）

「本ワークショップの趣旨について」

(民博地域研) 押川 文子
総合司会：(民博地域研) 臼杵 陽

共同座長：(北大) 岩下 明裕

(民博地域研) 帯谷 知可

河野 泰之

(東京外大) 黒木 英充

「地域ユニットをどう捉えるか?—実体、重層、関係性」

話題提供：(北大) 家田 修

(ASAFAS) 市川 光雄

(東大) 木畑 洋一

「地域間比較の潜在力とは?—地域特異性と普遍性」

話題提供：田中 耕司

(一橋大) 加藤 博

(東京外大) 飯塚 正人

「地域研究はディシプリンか?—『地域学』と『場』の間」

話題提供：(ASAFAS) 杉島 敬志

(東京外大) 宮崎 恒二

(北大) 宇山 智彦

「地域とどう関わるか?—実践とポジショニング」

話題提供：(民博地域研) 阿部 健一

(上智大) 村井 吉敬

(アジア経済研究所) 酒井 啓子

「総括討論および地域研究コンソーシアムの構築にむけた提言」

座長：(北大) 家田 修

(民博地域研) 押川 文子

田中 耕司

(東京外大) 宮崎 恒二

(10) 国際シンポジウム「人間の安全保障—地域研究の視座」

本シンポジウムは、地域研究は「人間の安全保障」にいかに取り組むべきか、地域研究を通じて「人間の安全保障」のなかにどのような新しい問題が発見できるのか、それはどのように解決できるのか、などについて共通の認識を探るために、人文・社会科学振興のための研究事業プロジェクト（代表、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 黒木英充助教授）と地域研究コンソーシアム設立準備委員会の共催で、2004年1月10日に東京の霞ヶ関ビル・プラザホールにおいて開催された。当日は、研究者のみならず、実務家やNGO関係者、学生など、150名を超える参加者があり、幅広い議論が展開された。本シンポジウムは、いくつかのアンブレラ・プロジェクトを展開していくことを予定している地域研究コンソーシアムの活動の第一弾であり、今後もこのテーマについて、議論を深めていく予定である。

「挨拶と趣旨説明」

(東京外大) 黒木 英充

第1部：地域研究は「人間の安全保障」をどう
とらえるか

フィールドにおける「人間の安全保障」

速水 洋子

(上智大) 幡谷 則子

マルチ・ディシプリンと「人間の安全保障」

(北大) 松里 公孝

松林 公蔵

地域の多重性と「人間の安全保障」

(民博地域研) 帯谷 知可

(ASAFAS) 島田 周平

地域研究における「介入」と「人間の安全保障」

(民博地域研) 白杵 陽

(北大) 古矢 旬



第2部：イラク戦争後の世界における「人間の安全保障」

講演

(平和学者) ヨハン・ガルトゥング

通訳：西村 文子

講演

(作家) 池澤 夏樹

「総合討論」

4. コロキアム

東南ア研は、研究スタッフの相互理解の促進と問題提起による議論の活性化を目的として、所員会議終了後、所員討論会を実施してきた。一方、1998年度にアジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)が新たに開設され、同研究科との連携が模索されることになり、1999年3月には、東南ア研とASAFASは、合同で地域研究フォーラム「21世紀の地域研究」を開催した。ASAFASとの連携を模索する一環として、従来、所員向けに開催されていた所員討論会を発展的解消、東南ア研の関係者ばかりでなく、ASAFASの学生、スタッフの参加を呼びかけ、月例の所員会議後に、討論会ではなく研究会として東南アジアコロキアムを1999年度から開始した。また、外国人研究者が所員会議に正式に参加し、外国人の研究部スタッフが誕生したこと契機に、1999年度から所員会議の使用言語が主に英語となったことを受け、東南アジアコロキアムも英語を主な使用言語とし、外国人研究者が討論に積極的に参加できる研究会に改めた。2002年5月以降の発表題目と報告者は以下のとおりである。

2002年 5月23日 “Ecotourism and Ecoresources” 山田 勇

6月27日 “The Hidden History of the Philippine Guiqiao (Returned Overseas Chinese)” Caroline Sy Hau

7月12日 “An Empty Institution: National Forest Reserves in Thailand” 藤田 渡

9月26日 “Introduction to My Research Activities in Myanmar, Laos, Yunnan, and Kazakhstan: Objectives, Methodologies, and Integration” 安藤 和雄

10月24日 “Indonesian Politics under Megawati: How She Is Running the Government” 白石 隆

	11月28日	“Rethinking Economics in Area Studies”	藤田 幸一
	12月19日	“In Search of Islamic Networks in Southeast Asia”	見市 建
2003年	1月23日	“Diversity and Development of the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia”	河野 泰之
	2月27日	“Bangladesh Rural Development Studies (2)”	海田 能宏
	3月27日	“Re-Evaluation of Gray Level Co-Occurrence Matrix Method for Land-Cover Classification Using Mono Aerial Photo”	Song Xianfeng
	4月24日	“The Stories Nations Tell: Reflections on Nationalist Historiography and Implications for National and Regional Identities”	Donna J. Amoroso
	5月22日	“Culture, Kinship, and Social Organization in Vietnam”	Neil Jamieson
	6月26日	“Aging and Disease: Universality and Diversity”	松林 公蔵
	7月11日	“Assimilation or Sinicization? Chinese Factors in Southeast Asia from an Inter-Regional Studies Perspective”	濱下 武志
	9月25日	“Emergence of New Types of Regionalization in East Asia”	浦田秀次郎
	10月 1日	「システム運用上の情報セキュリティポリシー」	木谷 公哉
	11月27日	“Cooperative’s Activity and Farmer’s Life in the Development Process of the Red River Delta, Vietnam”	柳澤 雅之
	12月18日	“Reconsidering ‘Family’ in the Southeast Asian Context: A Proposal”	速水 洋子
2004年	2月26日	“Risk Assessment of Vibrio Pathogens in Seafood in Thailand and Malaysia: An Emerging Food Safety Issue in Southeast Asia”	西淵 光昭
	3月25日	“Is ‘China Fear’ Warranted? Perspectives from Japan’s Trade and Investment Relationships with China”	阿部 茂行

5. その他の研究会

上記のシンポジウム、研究会、コロキアムのほかに、東南ア研スタッフを中心としてテーマ別に組織された研究会や、東南ア研の客員部門の外国人研究員や折々に東南ア研を訪問する外国人研究者による特別研究会などがあり、常時、東南ア研内外の人々の出入りがたえない。

6. 東南アジアセミナー

東南ア研では1976年以来毎年、主に東南アジアおよびその周辺地域の学術的研究に関心を持つ学生または大学卒業者を対象として受講者を募り、東南アジアセミナーを実施している。近年は、年ごとに異なるテーマを決め一段とセミナー色を濃くしてきた。

2002年度と2003年度のセミナーのテーマと内容、講義題目、講師の一覧を掲げておく。

2002年度（9月9～13日）

テーマ「東南アジアにおける“生・老・病・死”——フィールドワークの現場から」

第26回東南アジアセミナーは「東南アジアにおける“生・老・病・死”——フィールドワークの現場から」と題して、受講者21名の参加を得て開催された。前半では東南アジアで問題となるマラリアや結核などの感染症の実態について、後半では、東南アジアにおける人間生態学的視点からのさまざまな問題点と人口問題を論じた。また東南アジア地域におけるフィールド医学的知見とともに、農村開発にとまなう諸種の健康問題や民間に継承されている伝承薬、高齢者に対する伝統的ケアシステムについても紹介した。最後は、東南アジア農村部の人々の暮らしを生態系とのかかわりのなかで総括してセミナーを終了した。

先進医療技術の波及と「健康」という人類に普遍的な科学概念で行きわたる globalization の波に洗われながらも、東南アジアの人々はその地で生まれ、既存の医療システムのなかで疾病とむきあい、やがて老い、ある種の死生観をもって死んでゆく。本セミナーでは、東南アジアの疾病と老化の実態を明らかにしながら、一方で、フィールドワークを通じて見えてくる地域固有の人々の健康概念や死生観をもう一度とらえなおすことを試みた。

「人々はどのように死んでいるか——アンチコールの死亡事例から学ぶこと」（東北大）上原 鳴夫	「東南アジアとフィールド医学」	松林 公蔵
「東南アジアにみる感染症の課題」	「高出生力とその変化——ジャワ・バリを中心に」	五十嵐忠孝
（神戸大）川端 真人	「人はどこまで環境を改変できるのか？——健康からみた農村開発・農業発展の光と影：バングラデッシュの事例を中心に」	安藤 和雄
「東南アジアでの感染症調査ぼれ話」西沢 光昭	「インドネシアの伝承薬」（京大）新田 あや	
「マラリア対策のための調査——ソロモン郡島とインドネシアにおける経験談」	「老人の生活と近年の変化——タイの場合」	
（自治医大）石井 明	（三重県立看護大）馬場 雄司	
「東南アジアの結核および小児肺炎」	「東南アジアの自然環境と人々の暮らし」	
（大阪市）下内 昭		
「人間生態学からみた病気」 A. Terry Rambo		田中 耕司

2003年度（9月1～5日）

テーマ「開かれゆく大陸部東南アジア——市場経済化の多面性」

第27回東南アジアセミナーは、「開かれゆく大陸部東南アジア——市場経済化の多面性」と題して、26名の受講生を受け入れて開催された。今回は、大陸部東南アジアの旧社会主義圏に属する地域（特にベトナム、ラオス、ミャンマー）における近年の市場経済移行に伴う諸問題に焦点をあて、ヒト・モノ・カネの移動増大の諸相、開発と環境の相克、民族の動態など、当該地域で生じている大きな変化のうねりを、狭義の経済問題に限定せず、さまざまな視点から総合的にとらえることに主眼をおいた。

東南ア研は、他の研究機関に先駆けるように、最近まで入域することさえ困難であった当該地域においてフィールドワークを重ねてきたわけで、その成果を披露し、議論の材料をいち早く提供するという当初のねらいは成功したといつてよい。

〈総論〉

「ASEAN 10 の現状と課題——大陸部旧社会主義国を中心に」

阿部 茂行

(TDRI) Srawooth Paitoonpong

(TDRI) Yongyuth Chalamwong

「環境利用史からみた市場経済化の下での生業変化」

田中 耕司

〈ミャンマーを中心として〉

「ミャンマーの市場経済化と農村」

藤田 幸一

「大陸山地部からみた社会文化変容——ミャンマーと北タイ」

速水 洋子

「雲南・四川・ミャンマーの生態資源」

山田 勇

〈ラオスを中心として〉

「東南アジア大陸山地部の生態と生業変化」

安藤 和雄

「ラオスの土地政策と森林利用」

(ASAFAS) 竹田 晋也

「ラオス北部山岳地帯における経済活動の空間構造」

(熊本大) 横山 智

〈ベトナム〉

「The Development Situation in Vietnam's Uplands」

A. Terry Rambo

「ベトナム・デルタ地帯の農村変容」

河野 泰之

「ベトナムにおける市場経済化の中の少数民族文化」

(民博) 樫永真佐夫

〈総括〉

「東南アジア大陸部とは何か——ミャンマーとインドネシアの比較医学調査からのひとつの試論」

松林 公蔵



第4章 資料収集および情報処理

東南アジアの研究を深化，発展させるために各種の資料収集がとりわけ重要なことは言うまでもない。1965年に図書室が開設されて以来，東南アジア地域にかかわる専門書を中心に収集を進めてきた。2004年3月31日現在，約135,000冊（洋書約111,900冊，和漢書約23,500冊）を所蔵している。

1. 現地語資料

1983年以来，東南アジア諸地域の言語で出版された文献の組織的収集を目指して，特別予算要求を行ってきた。その結果，1983年から5カ年間の第一次収集計画に始まり，1988年より10カ年間の第二次計画，1998年より5カ年間の第三次計画と合計20年間にわたって特別予算による現地語収集が行われた。1998年からはCOEプロジェクト，2002年からは21世紀COEプロジェクトによっても同様の資料収集が行われている。2004年3月31日現在，特殊コレクション17,000冊を含めた現地語資料は，インドネシア語約20,000冊，タイ語約18,000冊，ベトナム語約4,000冊，ビルマ語約1,600冊，マレー語約600冊にのぼる。特殊コレクションの内容は，タイ関係のチャラット・コレクション約7,000冊，フィリピン関係のフォロンダ・コレクション約9,000冊，オカンボ・コレクション約1,000冊である。

また，1986年に東南アジア諸語文献研究部門が新設され，東南アジアより書誌学者や目録作成の専門家を招聘し，資料整理や目録データベース構築への協力を得ることが可能になった。現在では，現地語資料の書誌の多くがオンライン公開されている。

2. マイクロフォーム

1971年以降，「インドネシア関係文献マイクロフィッシュ」の一部を継続的に購入したのを初め，その後機会のあるごとにその充実を図ってきた。この結果，現在までにマイクロフィルム，マイクロフィッシュをあわせて約15,000件を所蔵している。このうち，フィルムは，東南アジア諸国統計資料，インドシナ三国近・現代史資料，第二次大戦下の東南アジア関係資料などを含み，フィッシュは，コーネル大学およびオランダ王立言語民族文化研究所が所蔵するインドネシア関係資料を主としている。

3. 雑誌

東南アジアを専門に対象とする雑誌は，創刊号から揃っている *BEFEO* を初めとして50タイトル以上に及ぶ。東南アジアを含むアジア一般，熱帯，開発に関するタイトルは43点である。このほかすでに刊行されていない雑誌もかなりあり，東南アジア関係では有名な Logan の *JIAEA* や *Djawa* をも含めて18タイトル，アジア関係では，London から出た *Asiatic Quarterly Jour-*



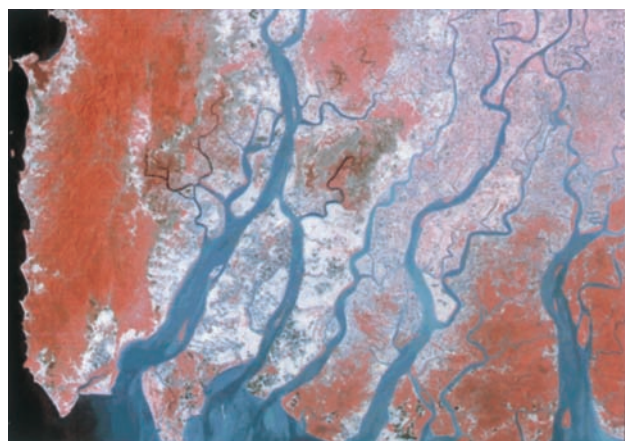
チャラット・コレクション



オカンボ・コレクション



「外邦図」昭和16年（1941年）11月に陸地測量部参謀本部から発行されたアッサム・ビルマ地域の地形図（縮尺25万分の1）



人工衛星画像データ（イラワジデルタ）

nal およびその後誌 (1886-1912) や *Mondes Asiatiques* など 12 タイトルある。これらの地域関係雑誌の多くは欧米発行のものであるが、東南アジアの大学・研究機関の刊行する雑誌も増えてきており、できるだけ収集するように努めている。その他 *Prisma*, *Tenggara* などのような各国語の週刊誌、総合雑誌、文芸批評誌も定期購読している。

4. 統計

東南アジア、東アジア諸国の政府刊行物、および国際機関の刊行物を中心に収集している。このうち継続して購入している刊行物は 26 種である。国民所得、財政、金融、貿易、労働、人口など経済統計が大半で、国別ではインドネシアが多く、地方統計も多く含まれている。その他に東南アジア各国のセンサスを、刊行の都度、可能な限り収集している。

5. 地図

所有する地図は東南アジア地域はもとより、インド、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、パキスタン、中国、朝鮮半島、オーストラリア、太平洋諸島および日本周辺と、ほぼ南アジアから東アジア全域をおおっている。製作年代も、戦前のものから近年の航空測量によるものまで、多岐にわたっており、現在約 30,000 枚におよんでいる。この中には、旧陸地測量部による南アジア、東南アジア、東アジアの 2 万 5 千分の 1、5 万分の 1 地形図 (外邦図を含む) など、歴史的にみても貴重なコレクションもある。また、数は少ないが、東南アジア各国の土地利用図、地質図、植生図などの主題図も含まれている。なお、所蔵する地図はオンラインで検索することが可能である。詳しくは研究所のホームページを参照されたい (<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>)。

6. 人工衛星画像データ

1978 年から人工衛星画像データの収集を始め、現在およそ 3,500 シーンの画像データを所蔵している。対象地域は、東南アジア全域、インド亜大陸東半分からバングラデシュ、南中国の一部および日本の一部である。とくに東南アジア大陸部は隈なくカバーされている。1970、80 年代は Landsat MSS の 100 万分の 1 の白黒ポジフィルム (バンド 4、5 および 7) を中心に集めていたが、1980 年代末から Landsat TM や MOS の 25 万分の 1 フォルスカラプリントに切り換え、近年はデジタルデータを収集している。

研究所での人工衛星画像データ利用は、従前、目視による、広域の地形、土地利用、植生、水文環境などの判読に限定されていたが、近年は、デジタル処理を行うことにより、また他の情報と重ね合わせて地理情報システムを構築することにより、より多様な利用を進めている。なお、所蔵する画像データについては研究所のホームページから検索可能である。

7. 情報処理

情報処理室は、東南ア研が長年蓄積してきた東南アジア地域に関する資料を、諸言語での閲覧・検索が可能な電子出版、データベース、地理情報システム（GIS）などによって広く世界に情報発信するための情報基盤システムを構築してきた。同時に様々な情報資料の共有化手法を模索することで、東南アジア地域への情報還元を含めた、より迅速で安定した情報伝達システムの強化・整備を目指している。

また、情報処理室は外国人スタッフを含む所内スタッフが随時利用できるよう東南アジア諸言語に対応した情報処理環境を提供している。この他に、快適で安定したインターネットサービスを提供するためのネットワーク資源の維持管理、ネットワークサービスの運用を行っており、それらを支える情報基盤を整備・強化しつつ情報処理に関わる様々なトラブル対処を日常の業務としている。さらに、このような情報処理機能の促進・新たな展開のために、最新の情報技術を視野に入れた研究も行っている。

以下に研究所が提供（共同提供を含む）もしくは技術支援している情報発信サイトを掲げるので、利用されたい。

- 東南アジア研究所メインサイト <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/>
下記すべてのサイトは、今後情報基盤統合に際して URI が変化した場合でも、このメインサイトから辿ることが可能。
- 21 世紀 COE プログラム <http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/>
- *Kyoto Review of Southeast Asia* <http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp/>
- 『東南アジア研究』 <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/edit/publications/seas/>
- タイ語図書文献データベース <http://library.cseas.kyoto-u.ac.jp/cseas/>
- フォトギャラリーデータベース
http://photolib.cseas.kyoto-u.ac.jp/servlet/photolib_welcome
- 地図・衛星画像データベース <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/> の地図・画像資料
- 図書 <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/library/>
- 編集 <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/edit/>
- 情報 <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/info/>
- 拠点大学交流事業 <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/core/>
- API Fellowship <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/api/>
- 財団法人アジア研究協会 <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/jsas/>

第5章 研究支援活動

1. 海外連絡事務所

(1) バンコク連絡事務所

バンコク連絡事務所は1963年に開設された。それ以来、東南ア研や関連部局・機関の教官が交代で駐在し、現地の研究機関や研究者との交流の拠点として活発な活動を展開してきた。開設当初はまさに現地調査のベースキャンプとしての役割が重視されたが、交通・通信手段の発達、現地国の受け入れ態勢の変化、日本側研究者の多様化につれて連絡事務所の役割も変化してきた。近年の連絡事務所の役割は、情報収集拠点、情報発信拠点、現地調査のベースキャンプの3つに大きく分けることができる。連絡事務所の最も重要な機能は情報収集である。現地語図書や現地国の統計資料・地図類は主として連絡事務所を経由して購入している。購入する物品を事前に確認することにより、より有用な資料を効率的に収集することができる。また現地研究者との日常的な接触を通じて、National Research Council of Thailand やチュラロンコン大学、タマサート大学、カセサート大学、チェンマイ大学、コンケン大学などの現地研究機関や現地研究者の学術動向を収集している。情報発信拠点としての機能強化は、近年、強く認識されるようになった。そのため、ワークショップやレセプションの開催、バンコク・タイ研究会への会場提供を通じて、幅広い分野の現地研究者との学術交流を深めている。また現地機関や研究者からのさまざまな問い合わせの窓口となっている。このような活動は、タイにおける東南ア研のプレゼンスを高めるうえで多大な貢献をしている。さらにベースキャンプとしての機能も未だ重要である。研究許可の取得からカウンターパートとの折衝、ロジスティックの手配、事故の際の対応など、円滑にフィールドワークを実施するためのサポートを必要に応じて提供している。これまで、バンコク連絡事務所はタイとの交流拠点と認識されてきた。しかし所員の研究関心は、近年、急速にタイ以外の東南アジア大陸部諸国へと拡大しつつある。そこでバンコク連絡事務所は、東南アジア大陸部の交流拠点として、より活発な活動を周辺国をも視野に入れて展開できるよう、連絡事務所のさまざまな態勢を見直しつつある。

現在の連絡事務所の住所は以下のとおりである。

8 B, Raj Mansion, 31 - 33, Soi 20, Sukhumvit Road,
Bangkok 10110, Thailand
Tel: + 66 - 2259 - 8485, Fax : + 66 - 2259 - 8419
e-mail : bangkok@cseas.kyoto-u.ac.jp

(2) ジャカルタ連絡事務所

ジャカルタ連絡事務所は、1970年10月に、ジャカルタのクバヨラン・バルのラジャサ通りに

開設され、1973年に運営経費が国の予算として認められて正式な開設の運びとなった。その後同事務所は、一度ジャカルタのメンテン地区で開設されたことを除けば、以降クバヨラン・バル地区内で事務所をもってきた。

東南ア研では、1983年度に「東南アジア諸国現代政治・社会動向分析のための地域資料緊急整備5カ年計画」が発足し、東南アジア諸語の資料収集を開始した。ジャカルタ連絡事務所は、この計画の一環として、インドネシア語やジャワ語などの各地の言語で書かれた資料およびオランダ語の資料、さらに統計類の収集を開始した。これらの図書収集は今日まで継続しており、ジャカルタ連絡事務所の重要な業務となっている。

官制化以前からの開設は、1968年よりインドネシア科学院(LIPI)傘下のLEKNAS(社会経済研究所)と共同で実施されていた南スマトラ州地域経済調査を円滑に実施するという目的もあった。以降も、同連絡事務所は東南ア研とインドネシア各地の大学等研究機関との共同研究の円滑化を図ってきた。今日、東南ア研は、ハサヌディン大学、インドネシア科学院、ボゴール農業大学、インドネシア国立国土地理調査機構と研究交流協定を結び、また科研プロジェクトなどでその他の研究機関とも共同研究を実施しており、その円滑な推進のため同連絡事務所が大いに活用されている。

また、同連絡事務所は、東南ア研のみならず京大内の他の研究機関、ひいては日本国内の研究機関のインドネシアにおける研究や教育の円滑化のためにも協力してきた。具体的には、これら研究機関が調査許可を取得するための支援や、インドネシアから日本への留学生や研究者の派遣に対する支援、インドネシアの教育研究機関による日本側との共同研究への助言などである。

さらに、同連絡事務所はジャカルタにおけるセミナーの開催なども実施してきた。今後、東南アジア研究所とインドネシア内機関との研究協力関係をさらに東南アジア島嶼部の各地にも広げるための拠点として活用することも構想されている。

現在の連絡事務所の住所は以下のとおりである。

Jl. Kartanegara No. 38, Kebayoran Baru

Jakarta Selatan, 12180, Indonesia

Tel: + 62 - 21 - 7262619, Fax: + 62 - 21 - 7248584

e-mail: jakarta@cseas.kyoto-u.ac.jp

2. 自己点検・評価

2004年4月より、従来の自己点検・評価委員会と将来構想委員会を合体させて、将来構想・自己評価委員会を発足させた。本委員会は、所長、各部門長、事務長から構成され、東南ア研の研究活動を一層活性化させるため、所員の自己点検ならびに評価の円滑な実施にあたっている。

すでに1993年より5年間にわたり所員からの報告書の提出が行われた旧自己点検・評価が、1998年度には更に充実した自己点検と評価システムの確立のため、大幅な手続きの改編が本委員

会のもとで図られた。「京都大学東南アジア研究所所員自己点検・評価レポート」においては、所員は「研究業績についての自己評価」と「所員活動記録」の二部構成からなる報告書の提出が義務づけられている。第一部の「研究業績についての自己評価」のために、所員は「東南アジアに関する研究業績を通してどのように知的存在感を示しているか」についての他者評価を前提にしたレポートを提出し、第二部の「所員活動記録」では、「研究」（現在の研究テーマ・トピック、研究業績、共同研究、学会活動ならびに運営、補助金および奨励金受領と受賞実績など）、「教育」（学内外講義担当、論文指導、学位審査など）、「管理運営」「社会的貢献」「一年を振り返っての所感・期待・評価」を報告する。これらは所員一人ひとりが、毎年の活動を真摯に自己評価するよい機会となっている。

3. 広 報

研究活動広報のため、東南ア研では、和文要覧、CSEAS Report とニューズレターを発行している。和文要覧と英文要覧（CSEAS Report）は毎年交互に刊行しており、和文要覧は本冊で12冊目、CSEAS Report は13冊目が2003年に出版された。1979年創刊のニューズレターは、以後現在に至るまで春と秋の年2回発行し、東南ア研の現況を関係者に伝えている。また広く学生や一般に東南ア研を紹介する冊子として、この春、日本語、英語、タイ語、インドネシア語による小パンフレットを発行した。研究所のみならず、バンコク・ジャカルタ両海外連絡事務所などに置いて、一般の関心が深まることを期待している。

さらに東南ア研のホームページ（<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>）で、研究会の案内、スタッフ紹介、研究プロジェクト、所蔵図書、出版物、公募情報などについて最新情報を発信している。東南ア研所蔵の地図・人工衛星画像・写真もホームページで公開し始めており、今後一層の充実を目指している。

4. 日本財団アジア・フェローシップ（API フェローシップ）

日本財団アジア・フェローシップ（API フェローシップ）は、2001年にアジア諸国の知識人・諸機関の協力に基づいて設けられた。API フェローシップは、Public Intellectuals（公共領域で活躍する知識人）、即ち、学術研究者、メディア関係者、芸術家、NGO リーダー等、世論形成に影響力を持ち、自ら活動の実践に参画する人々、または将来そのような社会的役割を担う能力と意欲をもつ人々に、近隣諸国における研究・交流の機会を与え、地域的、国際的な知的共同作業を奨励するプログラムであり、東南アジア研究所が、日本のパートナー機関となっている。2004年時点で参加国は、インドネシア、フィリピン、タイ、マレーシア、および日本である。詳細情報は、API ホームページ（<http://www.ikmas.ukm.my/api/contact>）を参照されたい。

第6章 大学院教育

農学研究科：熱帯農学専攻（協力講座）

1981年に農学研究科に熱帯農学専攻が設置され、センターの農学系の教授、助教授らが協力講座として3講座（熱帯稲作論、熱帯地文環境論、熱帯水文環境論）を担当してきた。熱帯農業に関連した環境、生態、農村発展論にわたって長期のフィールドワークを中心として教育訓練を行い、これまでに計27名の修士ならびに博士修了者を送り出してきた。この内、留学生は11名で、大半が博士号を取得して帰国し、それぞれの職場で活躍している。

なお、熱帯農学専攻は、農学部・農学研究科の改組にともなって1996年をもって廃止された。

人間・環境学研究科：東南アジア地域研究講座（協力講座）

人間・環境学研究科の第2専攻（文化・地域環境学専攻）が1993年度に発足するとともに、センターの教授・助教授ほぼ全員が東南アジア地域研究講座（協力講座）担当として参画し、センターの5部門14分野に沿った授業科目を設けて学生を募集してきた。各年度の入学者数は、1993年度6名（うち留学生1名）、94年度4名（うち留学生3名）、95年度4名、96年度3名、97年度3名である。1998年度のアジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）の発足にともない、同年度より学生を募集していない。

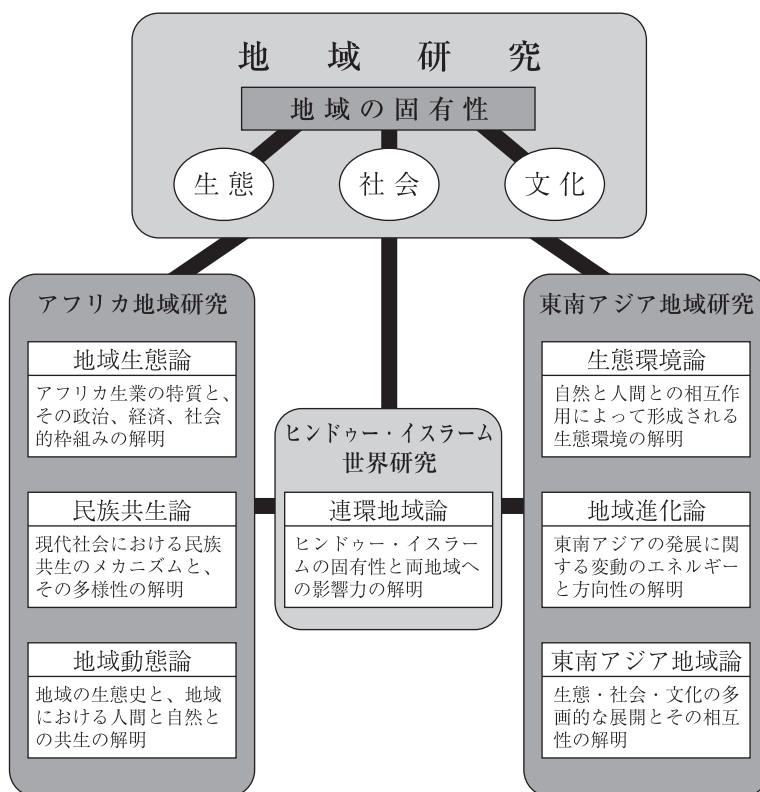
2003年3月をもって、在籍していた学生は全員ASAFASに移籍し、この講座は廃止された。各人が、東南アジア諸地域に自分のフィールドを持ち、長期にわたる調査研究を通して地域を総合的に研究するというスタイルは、ASAFASでの教育に受け継がれている。

2003年3月までに、5名の学生が博士の学位を取得した。

アジア・アフリカ地域研究研究科：東南アジア地域論講座（協力講座）

1998年4月、アジア・アフリカ地域研究研究科が発足した。この研究科は、東南アジア地域研究専攻とアフリカ地域研究専攻の2専攻から構成されるが、東南アジア地域研究専攻の中に連環地域論講座を置き、東南アジアとアフリカの両地域に接続するヒンドゥー・イスラーム両世界をも含めて、地域間比較を視野に入れた地域研究教育を進めていくことにした。それぞれの地域の歴史が育んできた生態・社会・文化の固有性を解明するとともに、諸地域が抱える現代的な課題についても地域研究の方法を通じて考究していく。本研究科の構成は付図のとおりである。

東南アジア地域研究専攻は、3基幹講座を創設したものであり、一方アフリカ地域研究専攻は、人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻のアフリカ地域研究講座（旧アフリカ地域研究センター）を移行させたものである。本研究科は5年一貫制の博士課程を設けており、学生定員は東南アジア地域研究専攻14名、アフリカ地域研究専攻12名の計26名である。



東南アジア研究所は、東南アジア地域研究専攻の東南アジア地域論講座全体を協力講座として担当し、このために教授5、助教授3名をあてている。さらに、研究科共通科目担当にその他の教授・助教授全員があたり、全研究所をあげて大学院教育に参加している。

本研究科の東南アジア地域研究専攻の教育面における大きな特徴は、集団指導体制である。この専攻に入学した1回生は主指導教官1名に加えて副指導教官2名を自主的に選ぶことができる。この制度によって、専攻としては比較的幅広い分野から学生をリクルートすることができ、また学生は比較的自由に研究テーマを選ぶことができる。学生は、5年一貫制教育の中で、長期にわたる本格的なフィールドワークを通して、地域の生態・社会・文化の相互関係を総合的に把握する能力を養うことを期待されている。

2004年4月現在、東南アジア地域研究専攻全体で7名が博士論文を提出して学位を取得済みで、その他の上級生も多くが博士論文提出をめざして最終段階に入っている。

医学研究科社会健康医学系専攻

社会健康医学系専攻は、京都大学大学院医学研究科の新しい専攻として2000年4月にスタートした。当初は修士課程のみであったが後に博士課程も追加され、修士課程は2004年4月からは専門職大学院に改組された。東南アジア研究所の教官のうち2名が協力講座として参加し、社会生態学講座内の環境生態学分野と人間生態学分野を担当し、教育と研究に貢献している。2004年4月現在で、両分野で合計4名が修士課程を修了した。

第7章 研究スタッフ

東南アジア研究所の現職研究スタッフの略歴、現在の研究テーマ、主要な研究業績などを紹介する。各研究スタッフは、研究部では統合地域研究研究部門、人間生態相関研究部門、社会文化相関研究部門、政治経済相関研究部門、続いて地域研究情報ネットワーク部の順に配列されており、1. 最終学歴、2. 学位、3. 専門分野、4. 現在の研究テーマ、5. 略歴、6. 主要な研究業績の順である。

1. 研究部

統合地域研究研究部門

田中 耕司

1. 京都大学農学部, 1969.
2. 京都大学農学修士, 1972.
3. 熱帯農学, 熱帯環境利用論
4. (1) 熱帯アジアにおけるファーミング・システム
(2) 熱帯における生物資源利用とその管理
(3) フロンティア社会の地域間比較

(1)は、従来から行ってきた作付体系研究を営農システム研究へと展開したものである。東南アジアの生態環境と人との関わりの総体を、土地利用、作付体系、資源管理などの側面から把握しようとする試みで、近年は、ベトナム南部のメコン・デルタにおける開拓農村や、ラオス北部山地などで関連する調査を行っている。(2)は、熱帯における生物資源としてのさまざまな有用植物をめぐるポリティカル・エコロジーを論じようとするもの。東部インドネシアやラオス、ミャンマー、ベトナム、雲南などでアブラギリ属の油料樹種の利用とその栽培に関わる土地利用問題を調査するとともに、島嶼部と大陸部の生物資源の利用と管理をめぐる比較研究へと発展させることをねらっている。(3)は、これまでの開拓社会の研究を東南アジアのフロンティア論へと展開しようとする研究で、アメリカ西部のフロンティア研究を準拠枠としながら、フロンティア概念の相対化と今日的意義を論じようとする。

5. 1973年、京都大学農学部助手に採用される。
1979年、東南アジア研究センター助手に配置換

1984年助教授、1998年教授に昇任。2004年4月、東南アジア研究所教授。

この間、1974年ビルマ、アッサム等において野生イネの分布と栽培イネの生態型分化の調査に従事。1979年、インド、スリランカにおいてクロッピングシステム等の比較研究調査を行う。1980～85年にかけて3次にわたり、インドネシアにおいて熱帯島嶼域の人の移動に関わる環境形成過程の研究調査に参加、その後、インドネシアで農業移民の調査、バングラデシュで農村開発調査、インドネシア、マダガスカル、中国、ベトナム、ラオス等で稲作技術・文化の調査を行う。近年は、インドネシアやフィリピンなど東南アジア海域世界の生業と生活に関する文化生態学的調査とベトナムやラオス、ミャンマーでの農業生態学的調査を進めている。

6. (1) “Farmers’ Perceptions of Rice-Growing Techniques in Laos: ‘Primitive’ or ‘Thammasat’?” 『東南アジア研究』31(2), 1993.
- (2) 「森と野の狭間——東南アジアの熱帯雨林から」梅原猛・伊東俊太郎(監修)『森の文明・循環の思想』講談社, 1993.
- (3) 「生活者の『森』と観察者の『森林』」山田勇(編)『森と人との対話』人文書院, 1995.
- (4) 「フィールド・ワークから生まれた稲作論」農耕文化研究振興会(編)『稲作空間の生態』大明堂, 1996.
- (5) “Who Owns the Forest?: The Boundary between Forest and Farmland at the Frontier of Land Reclamation,” 『東南アジア研究』34(4), 1997.
- (6) “Development of Southeast Asian Rice

- Culture: An Ecohistorical Overview,” in Y. Oshima *et al.* (eds.), *Asian Paddy Fields: Their Environmental, Historical, Cultural and Economic Aspects under Various Physical Conditions*, College of Agr., Univ. of Saskatchewan, 1997.
- (7) 「東南アジアの水田利用の集約性——熱帯アジアと日本との比較論に向けて」(共著)『環境科学総合研究所年報』16, 1997.
- (8) 「水田が支えるアジアの生物生産」『岩波講座地球環境学6 生物資源の持続的利用』岩波書店, 1998.
- (9) 「海と陸のはざまに生きる」秋道智彌(編)『講座人間と環境——自然はだれのものか』昭和堂, 1999.
- (10) 「東南アジアのフロンティア論に向けて」坪内良博(編)『〈総合的地域研究〉を求めて』京都大学学術出版会, 1999.
- (11) “Cropping Systems Research and Area Studies in Southeast Asia: Toward an Integration of Agronomic Studies and Sociocultural Studies,” in T. Horie *et al.* (eds.), *World Food Security and Crop Production Technologies for Tomorrow*, The Crop Science Society of Japan, 1999.
- (12) 『自然と結ぶ——「農」にみる多様性』(編著)昭和堂, 2000.
- (13) 「フロンティア世界としての東南アジア——カリマンタンをモデルに」坪内良博(編)『地域形成の論理』京都大学学術出版会, 2000.
- (14) 「インドネシア『外島』での村落形成」日本村落研究学会(編)『[年報] 村落社会研究 36』農山漁村文化協会, 2000.
- (15) “Agricultural Development in the Broad Depression and the Plain of Reeds in the Mekong Delta: Conserving Forests or Developing Rice Culture?” 『東南アジア研究』39(1), 2001.
- (16) 「穀作農耕における『個体』と『群落』の農法」『農耕の技術と文化』24, 2001.
- (17) “Crop-Raising Techniques in Asian Rice Culture: Resemblances to Root and Tuber Crop Cultivation,” in S. Yoshida and P. J. Matthews (eds.), *Vegeculture in Eastern Asia and Oceania*, (JCAS Symposium Series 16), JCAS, National Museum of Ethnology, 2002.
- (18) 「生態学的アジア地図」山室信一他(編)『アジア新世紀1 空間 アジアへの問い』岩波書店, 2002.
- (19) “Kemiri (*Aleurites moluccana*) and Forest Resource Management in Eastern Indonesia: An Eco-historical Perspective,” 『アジア・アフリカ地域研究』No. 2, 2002.
- (20) 「根栽農耕と稲作——『個体』の農法の視点から」堀田満他(編)『イモとヒト』平凡社, 2003.

白石 隆

1. 東京大学教養学部, 1972.
2. コーネル大学 Ph. D. (歴史学), 1986.
3. 歴史学, 比較政治学
4. 東南アジア政治・政治史
東アジアの地域形成, 東南アジア国家形成のマクロ比較史の分析, インドネシア現代政治分析を中心とする。
5. 1975年, 東京大学東洋文化研究所助手, 1979年, 東京大学教養学部(国際関係論)助教授, 1987年コーネル大学助教授(歴史・アジア研究), 1990年同准教授, 1996年同教授, 1996年京都大学東南アジア研究センター教授。2004年4月, 京都大学東南アジア研究所教授。
6. (1) 「上からの国家建設——タイ, インドネシア, フィリピン」『国際政治』第84号, 1987.
(2) *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1926*, Cornell University Press, 1990.
(3) “Dangir’s Testimony: Saminism Reconsidered,” *Indonesia*, No. 50, 1990.
(4) *Reading Southeast Asia*, (編) Cornell Southeast Asia Program, 1990.
(5) 『インドネシア——国家と政治』リポート, 1992.
(6) 「インドネシアの国家建設——スハルト体制下における技術・戦略産業育成」『東南アジア世界の歴史的位相』東京大学出版会, 1992.
(7) “Current Data on the Indonesian Military Elite,” (共著) *Indonesia*, No. 55, 1993.
(8) *Japanese in Colonial Southeast Asia*, (共編) Cornell Southeast Asia Program, 1993.

- (9) “Current Data on the Indonesian Military Elite, January 1992–August 31, 1993,” (共著) *Indonesia*, No. 56, 1993.
- (10) *Approaching Suharto’s Indonesia from the Margins*, (編) Cornell Southeast Asia Program, 1995.
- (11) “Current Data on the Indonesian Military Elite: Selected Biographies,” (共著) *Indonesia*, No. 59, 1996.
- (12) 『新版インドネシア』(ネットワークの社会科学2) NTT出版, 1996.
- (13) “The Phantom World of Digoel,” *Indonesia*, No. 61, 1996.
- (14) 「インドネシアの近代における『わたし』——カルティニの ik とスワルディの saya」『東南アジア研究』34 (1), 1996.
- (15) “Policing the Phantom Underground,” *Indonesia*, No. 63, 1997.
- (16) 『スカルノとスハルト——偉大なるインドネシアをめざして』岩波書店, 1997.
- (17) *Network Power: Japan and Asia*, (共編著) Cornell University Press, 1997.
- (18) 『崩壊インドネシアはどこへ行く』NTT出版, 1999.
- (19) 『海の帝国』中央公論新社, 2000.
- (20) 『インドネシアから考える』弘文堂, 2001.

林 行夫

1. 龍谷大学文学部, 1979.
2. 京都大学博士(人間・環境学), 2001.
3. 文化人類学, 宗教社会学
4. 東南アジア大陸部における民族間関係のなかの宗教と文化再編の比較研究
東南アジア大陸部とりわけタイ, ラオス, カンボジアを中心とする上座仏教の制度的布置をそれぞれの国家の枠組みで捉えるとともに, その実践を地域ごとに展開される動的な民族間関係, 精霊祭祀の変容過程, 儀礼を組織する俗人の諸活動において検討することにより, 国境を超え民族や地域を融合・分離させる宗教実践が, 近年のグローバルな社会変化のなかで, どのようなかたちで生きられる文化を構築, 再編しているのかを地域間比較の観点から明らかにする。
5. 1988年国立民族学博物館研究部助手, 1993年京都大学東南アジア研究センター助教授, 2002

年より同教授。2004年4月, 京都大学東南アジア研究所教授。1981年から東北タイのラオ人社会の宗教変容と集落形成について定着調査, 広域調査を行う。1989年以後は, フィールドをラオス, 中国雲南省, カンボジアに拡げ, 上座仏教の実践形態と制度復興に関する調査研究に従事。1995年より西南中国を含めた東南アジア大陸部の民族間関係と移動にかんする比較研究プロジェクトを組織。2003年以降は, 大変貌を遂げた同地域の社会・文化変容の動態を一般化すべく, 今日の国境域での宗教実践と制度仏教について調査研究にとりくむ。

6. (1) 「モータムと『呪術的仏教』——東北タイ・ドンデン村におけるクン・プラタム信仰を中心に」『アジア経済』25 (10), 1984.
- (2) 「葬儀をめぐるブン(功德)と社会関係」『東南アジア研究』23 (3), 1985.
- (3) 「タイ仏教における女性の宗教的位相についての一考察」『龍谷大学社会学論集』7, 1986.
- (4) 「ラーオ系稲作村における互助規範と功德のシユアの社会的意味——タイ上座部仏教の文化人類学的考察」『ソシオロジ』105, 1989.
- (5) 「ダルマの力と帰依者たち——東北タイにおける仏教とモータム」『国立民族学博物館研究報告』14 (1), 1989.
- (6) 「『王』・功德・開発——現代タイ王権と仏教」松原正毅(編)『王権の位相』弘文堂, 1991.
- (7) 「仏教儀礼の民族誌」石井米雄(編)『講座仏教の受容と変容2・東南アジア編』佼成出版社, 1991.
- (8) 「ラオ人社会の変容と新仏教運動——東北タイ農村のタマカーイをめぐる」田辺繁治(編)『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』京都大学学術出版会, 1993.
- (9) 「森林の変容と生成——東北タイにおける宗教表象の社会史試論」佐々木高明(編)『農耕の技術と文化』集英社, 1993.
- (10) “Notes on the Inter-ethnic Relation in History: With Special Reference to Mon-Khmer Peoples in Southern Laos,” in Surat Worangrat (ed.), *Chonklum Chattiphon nai aeng Sakon Nakhon*, Sathaban Ratchaphat Sakon Nakhon, 1995.
- (11) 「仏教の多義性——戒律の救いの行方」青木

- 保 (編)『宗教の現代』(岩波講座 文化人類学 第11巻) 岩波書店, 1997.
- (12) 「もうひとつの『森』——ラオ人とモン＝クメール系諸語族の森林観から」『東南アジア研究』35(3), 1997.
- (13) 「カンボジアにおける仏教実践——担い手と寺院の復興」大橋久利 (編)『カンボジア——社会と文化のダイナミクス』古今書院, 1998.
- (14) 「『ラオ』の所在」『東南アジア研究』35(4), 1998.
- (15) “Rup Laksana Mai khong Phi Khumkhong Muban nai Mu Chao Thai-Lao nai phak tawanookchiangnua khong Prathet Thai,” *Warasan Mahawithayalai Maha Sarakham*, 17(1), 1999.
- (16) “Spells and Boundaries: *Wisa* and *Thamma* among the Thai-Lao in Northeast Thailand,” in Y. Hayashi and Yang Guangyuan (eds.), *Dynamics of Ethnic Cultures across National Boundaries in Southwestern China and Mainland Southeast Asia: Relations, Societies, and Languages*, Chiang Mai: Ming Muang Publishing House, 2000.
- (17) 『ラオ人社会の宗教と文化変容——東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会, 2000.
- (18) “Buddhism without Official Organization: Notes on Theravada Buddhist Practice in Comparative Perspective,” in Y. Hayashi and Aroonrut Wichienkeo (eds.), *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China*, Bangkok: Amarin Printing, 2002.
- (19) *Practical Buddhism among the Thai-Lao: Religion in the Making of a Region*, Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2003.
- (20) “Reconfiguration of Village Guardian Spirit among the Thai-Lao in Northeast Thailand,” in N. Tannenbaum and C. Ann Kammerer (eds.), *Founders’ Cults in Southeast Asia: Ancestors, Polity, and Identity*, New Haven: Yale University Southeast Asia Studies, 2003.
- 阿部 健一 (客員 2004年4月1日~2005年3月31日)
1. 京都大学農学部, 1984.
 2. 京都大学農学修士, 1986.
 3. 東南アジア生態史
 4. (1) スマトラ泥炭湿地林史
(2) 東南アジア熱帯林のポリティカル・エコロジー
(3) メコン河流域開発への地域研究的アプローチ
(4) 実践的地域研究の試み——東ティモールのコーヒー事業
東南アジアの熱帯林 (中国南部も含めたい) をめぐる, 「先住民」「国家」「グローバルな関心」の関わりを歴史的に明らかにすることが現在にいたるまでの研究のテーマである。生活の場としての熱帯林, 資源としての熱帯林, 地球環境問題の中の熱帯林をとらえることになる。スマトラの泥炭湿地林で始めた研究(1)を, 広く東南アジア熱帯林まで広げた(2)。さらに, 関心は熱帯林だけでなく, 対象地域を「メコン河流域」として, メコン開発の歴史の変遷(3), とくに日本の関与を中心に, 開発と環境の問題を扱ってゆきたいと思っている。また地域への関わり方について, いろいろ考えることがある。研究対象として地域を調査することに物足りなさを感じている。機会があって, 独立したばかりの東ティモールで地域振興の事業に携わるようになったが, 実践と研究はけっして二項対立的なものではなく, 相互に補完的であると実感するようになっていく。
 5. 当時としては珍しく, アカデミックキャリアの比較的早い時期に, 熱帯林で調査することができた。熱帯林の森林生態学的な調査から始めたが, しだいに熱帯林に関わる人々の方に興味に移った。東南アジア研究センターの助手として採用されて(1989年)以降, その傾向は強くなっている。私のやってきた森林生態学的研究は, 時代遅れになっているし, 細分化され同時に組織化された現在の自然科学的熱帯林研究には, もはや関心はない。スマトラ泥炭湿地林の調査は, センターの助手となってから始めたが, 今日まで断続的に続けている。国立民族学博物館地域研究企画交流センターに配置換え(1996年)になってからは, 新たな研究環境の利点を生かして, より広く中国の雲南を含めた東南アジアの熱帯林の地域研究(ポリティカル・エコロジー)を研究対象とするよう

にした。まとめつつあるのは「雲南の森林史」であるが、ベトナム・カンボジア・ネパール・ブータンでも臨地調査を行った。山田勇教授の科研で、アフリカ・南米の熱帯林を訪れる機会を得たことは、東南アジア熱帯林を外から見直す貴重な経験だった。地域研究企画交流センターでは、国際シンポジウムを主催する経験も積ませてもらった。これまでに、“Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival” (Co-organized with Ishii Masako), “Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspectives,” “Tropical Forests and Extreme Conflicts,” “In, out, in, out: Populations, Migrations, and the Social Ecology of Tropical Forests,” “Water and Cultural Diversity,” “Mekong River Development: Viewed from Yunnan,” “Impacts on the Good Earth: Recent Environmental Histories in China”などを開催している。

2000年から総合研究大学院大学先導科学研究科生命体科学専攻を併任。そこでの活動は、総合研究大学院大学のホームページで紹介している (<http://sendou.soken.ac.jp>)。

6. (1) 「スマトラ泥炭湿地林の近代——試論」『東南アジア研究』31 (3), 1993.
- (2) 「スマトラの泥炭湿地林に暮らす人びと——人と自然のぶつかりあうフロンティア」『地理』40 (1), 1995.
- (3) 「ラジャが残したチムールの森」山田勇 (編) 『森と人の対話』人文書院, 1996.
- (4) 「森と人と自分と——スマトラ泥炭湿地林の開拓」山田勇 (編) 『フィールドワーク最前線』弘文堂, 1996.
- (5) 「熱帯多雨林から地域研究へ」『総合的地域研究』13, 1996.
- (6) “Cari Rezeki, Numpang, Siap: The Reclamation Process of Peat Swamp Forest in Riau,” 『東南アジア研究』34 (4), 1997.
- (7) 『事典東南アジア——風土・生態・環境』(共編著) 弘文堂, 1997.
- (8) 「雲南の森林史 (I) ——中甸盆地の神山」『東南アジア研究』35 (3), 1997.
- (9) 「雲南の森林史 (II) ——中標高盆地の森林破壊とユーカリ植林」『東南アジア研究』35

(3), 1997.

- (10) 「泥炭湿地林——スマトラの開拓移民と開発の将来」『TROPICS』6 (3), 1997.
- (11) 「地域生態史の視点」『地域研究論集』1 (2), 1998.
- (12) 「泥炭湿地林と『開発』内閣」『月刊みんぱく』3月号, 1999.
- (13) 「神の山のゆくえ——雲南の人と森」山田勇 (編) 『森と人のアジア』(講座人間と環境) 昭和堂, 1999.
- (14) 「伝統の生成システムの欠如——固定化しない東南アジア」高谷好一 (編著) 『〈地域間研究〉の試み (下)』京都大学学術出版会, 1999.
- (15) “Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival,” (共著) JCAS Symposium Series No. 10, The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 2000.
- (16) 「森の中から見た熱帯林問題」『季刊民族学』98, 2001.
- (17) 「雲南の森林史 (III) ——サルウィン河 (怒江) 上流の山地集落と森林資源の商品化」古川久雄 (編著) 『異生態系接触に関わる人口移動と資源利用システムの変貌』, 科学研究費補助金研究成果報告書, 2000.
- (18) 「東チモール独立は幸せをもたらすか」他月刊みんぱく編集部 (編) 『世界の紛争』河出書房新社, 2003.
- (19) *The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspectives*, (共編著), Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2003.
- (20) *Political Ecology of Mekong River Development* (編著) 科学研究費補助金研究成果報告書, 2003.

村上 勇介 (客員 2004年4月1日~2005年3月31日)

1. 東京外国語大学外国語学部, 1986.
2. 筑波大学国際学修士, 1991.
3. ラテンアメリカ地域研究, ラテンアメリカ政治研究
4. (1) 1990年代ペルーの政治社会変動とフジモリ政権
- (2) ペルーにおける政治参加
- (3) ペルーの人々の政治意識

- (4) 「民主化」以降のラテンアメリカにおける民主主義の定着に関する比較研究
ラテンアメリカの人々と政治の関わりについてペルーを中心に研究を進めてきており、今後、アンデス諸国（ボリビア、コロンビア、エクアドル、ベネズエラ）やラテンアメリカの他の国々、また、他地域との比較を行いたい。1990年代の初めから行ってきたフジモリ政権期のペルー政治に関する研究(1)は最終的なまとめの段階にある。また最近では、国会議員選挙と地方選挙における選挙運動の実態調査を行い政治参加について研究する(2)とともに、首都リマで意識調査を実施し政治意識に関しても分析した(3)。前者の選挙運動の調査は、誕生した地方政府による政治について追跡調査を実施し、合わせて昨年からペルーで進められている地方分権化の実態について調査する予定である。将来の比較研究(4)では、ペルーを基点とする意向であるが、切り口として政党のあり方や政党間の関係に視点を置いて始めてみたいと思っている。
5. 1987～89年、メキシコ国立自治大学国際関係センター研究員、1991～95年、在ペルー日本大使館専門調査員・理事官（政務担当）、1995年、国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手、2002年同助教授、現在に至る。
6. (1) 「メキシコの対中米政策——1979年以降」『ラテンアメリカ・レポート』7(1)、アジア経済研究所、1990。
(2) 「メキシコ社会の変容とサリーナス政権の政治改革」『ラテンアメリカ・レポート』8(4)、アジア経済研究所、1991。
(3) 「フジモリとペルー政治」『イベロアメリカ研究』16(1)、上智大学イベロアメリカ研究所、1994。
(4) 「ペルーの政党に関する一考察」『外務省調査月報』(2)、外務省、1994。
(5) “Un análisis de la política exterior japonesa hacia el gobierno de Fujimori: desde la perspectiva interna del Japón,” *Agenda internacional* 2(1), Instituto de Estudios Internacionales, Pontificia Universidad Católica del Perú, 1995。
(6) 「ペルーの1995年選挙に関する一考察」『イベロアメリカ研究』17(1)、上智大学イベロアメリカ研究所、1995。
(7) 「ペルーの大統領選挙と内政——その力学と民主主義『制度』の模索」『国際問題』429、日本国際問題研究所、1995。
(8) 「ペルーにおける選挙制度の史的展開——一つの接近」『地域研究論集』1(1)、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、1997。
(9) 「第二次フジモリ政権の政治的課題」『外交時報』1337、外交時報社、1997。
(10) 「融解する政治『制度』——ペルーとメキシコの事例からの一考察」『民博通信』79、国立民族学博物館、1997。
(11) 「政治制度の解体?——1990年代ペルーの政治と今後の課題」『ラテンアメリカ・レポート』15(2)、アジア経済研究所、1998。
(12) 「ペルーにおける下層民と政治——1980年代以降の研究の特徴と今後の展開に向けての課題」『地域研究論集』2(1)、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、1999。
(13) *El espejo del otro: el Japón ante la crisis de los rehenes en el Perú*, Ideología y política 12, Lima: Instituto de Estudios Peruanos y The Japan Center for Area Studies, 1999。
(14) 「迷走するペルー政治——2000年大統領・国会議員選挙とフジモリの辞意表明」『ラテンアメリカ・レポート』17(2)、アジア経済研究所、2000。
(15) 「ペルーの『自主クーデタ』に対するアメリカ外交」大津留（北川）智恵子・大芝亮（編）『アメリカが語る民主主義——その普遍性、特殊性、相互浸透性』（MINERVA人文・社会科学叢書44）、ミネルヴァ書房、2000。
(16) *La democracia según C y D: un estudio de la conciencia y el comportamiento político de los sectores populares de Lima*. Urbanización, migraciones y cambios en la sociedad peruana 15, Lima: Instituto de Estudios Peruanos y The Japan Center for Area Studies, 2000。
(17) 「空転する民主政治——1998年アヤクチョの地方選挙にみるペルー政治の実像」遅野茂雄・志柿光浩・田島久歳・田中高（編）『ラテンアメリカ世界を生きる』新評社、2001。
(18) 「ペルーの下層の人々にとって民主主義の持つ意味」『国際政治（特集：「民主化」以降のラテンアメリカ政治）』131、日本国際政治学会、2002。

- (19) 「フジモリ政治への一視角——信頼から失望への軌跡」松原正毅(編)『地鳴りする世界——9.11をどうとらえるか』恒星出版, 2002.
- (20) 「1990年代ペルーの政治過程分析に向けた予備的考察——第1期目のフジモリ政治を見る二つの視角」『地域研究論集』4(1), 国立民族学博物館地域研究企画交流センター, 2002.

濱元 聡子 (2003年4月1日～2005年3月31日)

1. 立命館大学国際関係学部, 1992.
2. 京都大学博士(人間・環境学), 2004.
3. 東南アジア地域研究, 文化人類学
4. マカッサル海峡における人の移動に関する社会史的な地域研究
1995年以来, インドネシア・マカッサル海峡で人の移動に関する社会史的な地域研究に従事している。具体的には「海」をひとつの「地域」としてとらえることができるとしたら, それはどのようなかたちで可能であるのかを, そこで生活する人びとの移動をてがかりに, 文化人類学的アプローチを中心的な手法にして, 明らかにしようと試みている。地域といっても, 生態環境としてとらえるだけではなく, 人の暮らしが営まれる社会的空間としてとらえようと考えてきた。個人史の聞き取りや, 過去100年間ほどに起こった出来事を, 一次資料や聞き取りから再構築することを試みてきた。大文字の「世界史」の間隙に位置してきたような海の「地域」の社会像を描こうとしている。イスラームが多数派でありながらも, その教義の理解や実践は, 中東や大陸部のイスラーム国家のそれとは, 異なる部分もおおきい。「海」の地域であることが, どの程度にその差異に関わっているのだろうか。ムスリム女性商人の移動に同行して, 自分の歩幅と目線で確かめた東南アジア海域世界像を明らかにし, その社会史を書き起こした試みが博士論文としてまとめられたものである。その次の段階としては, 「海」を含む国境と国家が今後どのような変化と変容を経験するのかというところへつながらる予定である。具体的には, ムスリムにとってのマッカ巡礼の経験をめぐる日常生活世界の動態の研究に着手したところである。
5. 1993～94年マレーシア・サバ州において国境を越える人の移動に関する研究に従事。1995～2000年マカッサル海峡島嶼部において, 日常的

に行われる人の移動に関する社会史的研究に従事。2000年～現在, 東南アジア島嶼部イスラーム社会における巡礼と商業活動をめぐる女性の移動研究に従事。

- (1) 日本学術振興会特別研究員 DC 1 (1997年4月～2000年3月)
- (2) 日本学術振興会特別研究員 PD (2000年4月～2003年3月)
- (3) 東南アジア研究センター非常勤研究員 (2003年4月～2004年3月)
- (4) 東南アジア研究所非常勤研究員 (2004年4月～2005年3月)
6. (1) 「東マレーシア・サバ州における人の移動——スルー海・スラウェシ海に惹かれた国境からみる東南アジア海域世界の構造」立命館大学国際関係学研究科修士論文, 1994.
- (2) 「東マレーシア・サバ州における人の移動——スルー諸島からのバジャウ族の移動を中心に」『南方文化』22, 1995.
- (3) 「『移動の島』の女たち・その生活世界の展開——マカッサル海峡島嶼部における社会的動態の考察」京都大学人間・環境学研究科修士論文, 1997.
- (4) 「ハッジ・ミラの行商記録——マカッサル海峡における女性の生活世界」『ジェンダー——移動と後期近代』(「ジェンダー」研究会平成9年度報告書), 1998.
- (5) 「発酵保存食品チャオの生活誌——マカッサル海峡B島における生業活動の変化」『東南アジア研究』37(3), 1999.
- (6) フィールド便り「オルケス・ムラユのある風景——あるムスリム社会の結婚式」『アジア・アフリカ地域研究』No. 1, 2000.
- (7) 書評 “Christian Heersink. *Dependence on Green Gold: A Socio-economic History of the Indonesian Coconut Island Selayar*” 『東南アジア研究』38(1), 2000.
- (8) 書評 “Roger Tol; Kees van Dijk; and Greg Acciaioli, eds. *Authority and Enterprise among the People of South Sulawesi*” 『東南アジア研究』39(2), 2001.
- (9) 書評 “Jeroen Touwen. *Extremes in the Archipelago: Trade and Economic Development in the Outer Island of Indonesia, 1900–1942*” 『東南アジア研究』40(3), 2002.

- (10) 「島嶼間移動をめぐる社会史的な地域研究——〈しま〉模様の海」京都大学大学院人間・環境学研究科博士学位請求論文, 2004.

富田 晋介 (2003年4月1日～2005年3月31日)

1. 関西大学工学部, 1997.
2. 京都大学博士 (農学), 2003.
3. 熱帯農業生態学
4. 東南アジア大陸山地部における環境保全と持続的発展に関する総合的研究

この研究の問題意識は以下の4点である。1. 大陸山地部の脆弱な自然環境下において、そこに暮らす人々はどうのような生活安定のためのシステムを培ってきたのか。2. 中国経済浸透などの急速なグローバル化、政策や援助などの外部からの介入が増す中で、そのような仕組みはどうのような影響を受け、変容していつているか。3. そして、現在どのような問題が生じており、今後は、どのような問題が生じる可能性があるのか。4. 今後は、どのような生活安定のためのシステムを構築すればよいのか。

以上について明らかにするために、地域においてもっとも重要な生活基盤のひとつである、土地、森林、水などの自然資源とそれを利用する人間活動との関係に焦点をあて、GISモデリングの手法からアプローチしている。

5. 2002～03年、華頂短期大学非常勤講師。2003年4月～2004年3月、京都大学東南アジア研究センター非常勤研究員。2004年4月～2005年3月、京都大学東南アジア研究所非常勤研究員。
6. (1) “Impact of Direct Dry Seeding on Rainfed Paddy Vegetation in Northeast Thailand,” (共著) *Weed Biology and Management* 3 (2), 2003.
- (2) “Differences of Weed Vegetation in Response to Cultivating Methods and Water Conditions in Rainfed Paddy Fields in Northeast,” (共著) *Weed Biology and Management* 3 (2), 2003.
- (3) “Rice Yield Losses by Competition with Weeds in Rainfed Paddy Fields in Northeast Thailand,” (共著) *Weed Biology and Management* 3 (3), 2003.
- (4) “Changing Aspects of Shifting Cultivation in Northern Laos: Land Allocation

Policy and Commercialization of Crop Production,” (共著) in Furukawa *et al.* (eds.), *Ecological Destruction, Health and Development: People-Environment Interactions in Contemporary Asia*, Kyoto University Press, 2004.

中口 義次 (2003年4月1日～2005年3月31日)

1. 島根大学農学部, 1997.
2. 京都大学博士 (医学), 2003.
3. 病原細菌学, 分子遺伝学, 分子疫学
4. 「アジアで重要な腸管感染症原因細菌のダイナミズムに関する研究」

- (1) 「迅速・高感度な腸管感染症原因菌の診断法の開発とその応用 (アジア分離菌と輸入食品)」
- (2) 「腸炎ビブリオ感染症の国際的流行に関する分子疫学的解析」
- (3) 「タイでの病原性大腸菌の臨床分離株での分子遺伝学的解析」
- (4) 「アジアを含む世界中で分離された腸管感染症原因菌の保存とデータベース化」

東南アジアの国々における「腸管感染症」は現在でも重要な問題である。周辺の衛生環境や生活習慣と密接に関係しており、さまざまな要因の解析や検討が必要である。日本では東南アジアの国々から多くの食品を輸入しており、「輸入感染症」についても考える必要がある。感染症の診断および食品の安全性には、病原性細菌の検出が重要である。その診断も迅速性、正確性、さらには簡便性が要求されている。そこで新たな診断方法を共同開発し、現地での診断、研究および輸入食品の安全性の確立に向けて取り組んでいる(1)。1996年以降、腸炎ビブリオの東南アジアで発生した新クローンによる世界的な大流行が報告され、菌のダイナミズムを視野に入れた多角的な解析が急務であると考えられた。そこで分子遺伝学的・分子疫学的な解析手法を用い、過去に起こったであろう流行を立証しようとしている(2)。病原性大腸菌感染症において、タイで分離された病原性大腸菌のダイナミズムを明らかにしようと試みている(3)。アジア各地及び世界中で分離された腸管感染症原因細菌の生化学的・遺伝学的特徴を明らかにした後、データベース化し、世界中の研究者に公開し、疫学的な情報交換や現地調査に役立てていく予定で行っている(4)。全体的には、腸管感染

症を引き起こす腸管感染症原因菌、特に、腸炎ビブリオ及び病原性大腸菌のアジアでの分離株における分子遺伝学的・分子疫学的解析によるダイナミズムについてと、その診断方法およびフィールドへの応用に向けての総合的な研究を目指している。

5. 島根大学農学部 (1995年10月～97年3月), 「好温性ラン藻のアミノ酸合成酵素遺伝子群の解析」に従事。大阪府立大学大学院農学生命科学研究科 (1997年4月～99年3月), 「ヒトセントロメア蛋白質 B (CENP-B) が認識するセントロメア DNA 配列の解析」に従事。京都大学大学院医学研究科 (1999年4月～2003年3月), 「腸炎ビブリオの毒素遺伝子の発現に関する研究」に従事。京都大学東南アジア研究センター (2003年4月～2004年3月), 京都大学東南アジア研究所 (2004年4月～2005年3月) において, 非常勤研究員として「アジアで重要な腸管感染症原因細菌のダイナミズムに関する研究」に従事。
6. (1) 「組換え体ヒトセントロメア蛋白質 B (CENP-B) の DNA 結合能を用いたウシセントロメア DNA の単離」(共著)『生化学』70 (8), 1998.
- (2) 「腸炎ビブリオの *tdh* 遺伝子に由来する mRNA の迅速測定法の開発」(共著)『臨床と微生物』28 (2), 2000.
- (3) 「腸炎ビブリオの産生するウレアーゼが *trh* および *tdh* 遺伝子の転写に及ぼす影響」(共著)『日本細菌学会誌』55 (1), 2000.
- (4) 「腸炎ビブリオ *trh* 遺伝子転写産物の解析」(共著)『臨床と微生物』29 (2), 2001.
- (5) 「腸炎ビブリオ *tdh*, *trh* 遺伝子特異的 mRNA の TRC 増幅反応による迅速測定法の検討」(共著)『日本細菌学会誌』56 (1), 2001.
- (6) 「腸炎ビブリオの患者・環境分離株中の *tdh*, *trh* 遺伝子転写産物の迅速かつ定量的検出法 (TRC 法) の評価」(共著)『臨床と微生物』30 (2), 2002.
- (7) 「腸炎ビブリオ *trh* 遺伝子の転写開始点の同定とプロモーター領域の解析」(共著)『日本細菌学会誌』57 (1), 2002.
- (8) “Identification of the Transcriptional Start Site and Analysis of the Promoter Region of *Vibrio parahaemolyticus trh* Genes,” (共著) Paper presented at 37th

Joint Conference on Cholera and Other Bacterial Enteric Infections panel (Okinawa, Japan), 174–176, December 2002.

- (9) 「TRC 法による腸炎ビブリオ菌耐熱性溶血毒 mRNA のリアルタイム検出」(共著)『臨床化学』第 32 巻補冊 2 号, 『臨床病理』第 51 巻補冊, 2003.
- (10) 「腸炎ビブリオ感染症の国際的流行に関する研究——遡及的解析」(共著)『臨床と微生物』31 (2), 2003.
- (11) 「迅速・簡易な TRC 法による腸炎ビブリオ菌耐熱性溶血毒 mRNA のリアルタイム検出」(共著)『臨床と微生物』31 (2), 2003.
- (12) 「腸炎ビブリオ感染症の国際的流行に関する研究——遡及的解析」(共著)『日本細菌学会誌』58 (4), 2003.
- (13) 「迅速簡易な TRC 法による腸管出血性大腸菌の志賀毒素群遺伝子 mRNA のリアルタイムモニタリング」(共著)『日本臨床微生物学雑誌』13 (4), 2003.
- (14) 「腸炎ビブリオ *trh* 遺伝子の転写・発現に影響を及ぼす領域の検討」(共著)『日本細菌学会誌』58 (1), 2003.
- (15) “Intercalation Activating Fluorescence DNA Probe and Its Application to Homogeneous Quantification of a Target Sequence by Isothermal Sequence Amplification in a Closed Vessel,” (共著) *Analytical Biochemistry*, Vol. 314, 2003.
- (16) “The Urease Gene Cluster of *Vibrio parahaemolyticus* does not Influence the Expression of the Thermostable Direct Hemolysin (TDH) Gene or the TDH-related Hemolysin Gene,” (共著) *Microbiology and Immunology*, 47 (3), 2003.

見市 建 (2003年4月1日～2006年3月31日)

1. 関西学院大学法学部, 1996.
2. 神戸大学博士 (政治学), 2002.
3. 政治学
4. 現代インドネシアにおける政治とイスラーム
現代インドネシアにおけるイスラーム政治勢力が, どのような組織やネットワークによってその思想を伝達し, 活動に結びついているのかを研究している。民主化に伴い活発化しているイスラーム

ム政治勢力はインドネシアにおけるここ数十年の社会変化を反映している。とくに都市部の中間層にみられるイスラーム化は顕著であり、これが学生を中心とした政治運動に結びついている。イスラーム政治勢力の分析を通して現代インドネシアの政治と社会を大掴みできるような分析枠組みを提出することを目標としている。当面は、イスラーム関係の出版物の翻訳・出版・流通に焦点をあて、インドネシアのイスラーム政治勢力の見取り図を書きたいと思っている。

5. 日本学術振興会特別研究員（2000～02年）を経て、2002年、東南アジア研究センター教務補佐員として着任、同年10月から非常勤研究員、2003年4月から再び日本学術振興会特別研究員になり現在に至る。2004年4月より関西学院大学非常勤講師。
6. (1) 「ポスト・アブドゥルラフマン・ワヒド体制への継続と変化——東ジャワ・クディリにおける第30回ナフダトゥル・ウラマー大会より」『アジア経済』41(5), 2000.
- (2) 「インドネシアにおける『イスラーム市民社会論』の二大潮流」『国際協力論集』8(2), 2000.
- (3) “Kiri Islam, Jaringan Intelektual dan Partai Politik: Sebuah Catatan Awal,” *Tashwirul Afkar*, 10, 2001.
- (4) 「世界のイスラーム5：インドネシア——数千人規模の反米デモが起きた理由」『外交フォーラム』163, 2002.
- (5) 「民主化期におけるイスラーム主義の台頭——インドネシアのダーワ・カンパスと正義党」『現代の宗教と政党——比較の中のイスラーム』（日本比較政治学会年報第4号）, 2002.
- (6) 「インドネシアにおけるイスラーム左派と知識人ネットワーク」『東南アジア研究』40(1), 2002.
- (7) 「出版物から見た20世紀東南アジアのイスラーム」『上智アジア学』20, 2002.
- (8) 「インドネシアにおけるイスラーム主義とモダニティの交錯」『地域研究論集』5(2), 2003.
- (9) “Islamic Youth Movements in Indonesia,” *IHAS Newsletter*, 32, The International Institute of Asian Studies, 2003.

人間生態相関研究部門

山田 勇

1. 京都大学農学部, 1966.
2. 京都大学農学博士, 1979.
3. 熱帯生態学
4. (1) 東南アジア熱帯多雨林の生態資源
(2) 地球生態系における東南アジアの位置づけ
(3) 熱帯林生態系における人と自然のかかわり
東南アジアの熱帯雨林世界は、世界の森林生態系の中でも、生物多様性、森林構造の大きさと複雑さ、資源の豊富さにおいて、群を抜いている。また、大島嶼域であることから、古くから人々の往来がはげしく、アフリカやアマゾンとは異なった特色を持っている。この東南アジアの中で、ボルネオは熱帯雨林の中心であり、また大陸部の中国雲南、ミャンマーなどは、モンスーン林の中心として、多様な資源と人々の生活が見られる。
ここ数年、これらの熱帯域の上に存在する生物から人間の生活までを含んで「生態資源」とよび、これを中心に仕事を行ってきた。
赤道直下で最も多様な生態資源は、高緯度に移るにつれて、画一化してゆく。この変容過程を地球レベルで比較調査し、最終的に東南アジアの生態像を浮かび上がらすことを当面の研究テーマとしている。そのためさらなるフィールドワークが必要となる。
- (4) 環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源利用の変容過程の地域間比較
ヒマラヤを中心に、周辺の大生態系間における社会と生態資源利用の変化を調査する。
5. 1975年、東南アジア研究センターに助手として採用される。1980年、農林水産省関西林木育種場、1981年同関東林木育種場室長をへて、1988年より、東南アジア研究センター助教授。京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻助教授を兼任。1995年より教授。人間・環境学研究科およびアジア・アフリカ地域研究研究科併任。2004年4月、東南アジア研究所教授。
1965年以降、以下の海外研究活動を行う。1965年タイ、カンボジア、マレーシアの植物調査、1968～70年インドネシアの森林調査、1976年インドネシアの森林調査、1977年タイ、マレーシア生態調査、1978年フィリピン生態調査とインドネシア調査、1979年北米山林調査、

- 1982, 1983, 1984～86年までブルネイ森林調査, 1988年北米および中米の森林調査, 1988～89年パプアニューギニア, インドネシアの低湿地調査, 1990年タイ, インドネシア, 中国, 1991年マレーシア, タイ, ラオス, 中国の生態調査。1992, 1993年アマゾン, マレーシア, インドネシア, 1994年ギリシャ, トルコ, エジプト, エクアドル, ボリビア, グアテマラ, ベルー, インドネシア, マレーシア, ブルネイ。1995年中国, ネパール, ホンコン。1996年マレーシア, ネパール, フィンランド, スウェーデン, ノルウェー, チェコ, オーストリア, ポーランド, ケニア, カメルーン, フランス。1997年マレーシア, 中国, アメリカ, カナダ, エクアドル, ベルー, ボリビア, チリ, アルゼンチン。1998年マレーシア, 中国, ベトナム。1999年インド, ミャンマー, ブラジル, 中国, マレーシア。2000年インドネシア, 中国, 2001年ベトナム, ミャンマー, インドネシア, シンガポール, 2002年中国, 台湾, インドネシア。2003年, 中国, フランス, イタリア, ドイツ, スイス, オーストリア, イラン, インドネシア。
6. (1) Forest Ecological Studies of the Montane Forest of Mt. Pangrango, West Java (I)～(IV)『東南アジア研究』13(3)-15(2), 1975-77.
 - (2) 『熱帯の有用樹種』(共著) 熱帯農業研究センター, 1978.
 - (3) "Ecological Study of Mangrove and Swamp Forests in South Sumatra," (共著) in *South Sumatra, Man and Agriculture*, CSEAS, Kyoto Univ., 1980.
 - (4) 「西ジャワパングランゴ山山地林における落葉落枝などの季節変化」『東南アジア世界』創文社, 1980.
 - (5) 「東南アジアの低湿地林1. マングローブ」『東南アジア研究』21(2), 1983.
 - (6) 「同2. マングローブの分布」『東南アジア研究』21(3), 1983.
 - (7) 「同3. 淡水湿地林」『東南アジア研究』21(4), 1984.
 - (8) 「同4. 泥炭湿地林」『東南アジア研究』22(2), 1984.
 - (9) 『東南アジアの低湿地』(共著) 農林統計協会, 1986.
 - (10) *Report on the Forest Research in Negara Brunei Darussalam from 1984 through 1986*, JICA, 1987.
 - (11) *The Changing Pattern of Vertical Stratification along an Altitudinal Gradient of the Forests of Mt. Pangrango, West Java*, Kluwer, 1990.
 - (12) 『東南アジアの熱帯多雨林世界』創文社, 1991.
 - (13) 『熱帯雨林を考える』(共編著) 人文書院, 1992.
 - (14) *Vegetation Science in Forestry*, (共編著) Kluwer, 1995.
 - (15) 『森と人との対話』(編著) 人文書院, 1996.
 - (16) 『フィールドワーク最前線』(編著) 弘文堂, 1996.
 - (17) 『事典東南アジア——風土・生態・環境』(編集委員代表, 共編著) 弘文堂, 1997.
 - (18) *Tropical Rain Forests of Southeast Asia: A Forest Ecologist's View* (trans. by Peter Hawkes), University of Hawai'i Press, 1997.
 - (19) 『アジア・アメリカ生態資源紀行』岩波書店, 2000.
 - (20) 「京都発地球生態資源の旅」『科学』73(12), 岩波書店, 2003.

西淵 光昭

1. 広島大学水畜産学部, 1976.
2. オレゴン州立大学 Ph. D., 1983.
3. 病原細菌学
4. 東南アジアの環境中の病原性細菌の動態
 - (1) コレラ菌, 病原性大腸菌 O157, 腸炎ビブリオなどのような病原菌が, 東南アジア各地および周辺地域の環境(環境水や食品など)中にどのように分布しているかを明らかにする。
 - (2) 各地でこれらの病原菌による感染症がどの程度発生しているかを調べ, 環境中の菌の分布との相関関係を調べる。菌の分布と病気の発生が必ずしも相関しない場合, それぞれの地域のどのような要因(自然要因, 社会・経済的要因, 文化的要因など)が影響しているかを明らかにする。
 - (3) 各地の環境分離菌株や臨床分離菌株を遺伝子レベルで解析して, 感染症の伝播の様式および

- 感染経路を明らかにする。
- (4) 環境中に分布する病原性細菌が自然環境からヒトの体内へ移動したときに、栄養分、温度、pH、塩分濃度などの環境変化を菌がどのように認識して、病原性を発現するメカニズムをどのようにスタートするかを明らかにする。
5. 1977～78年、文部省派遣交換留学生としてオレゴン州立大学に留学し、魚病を研究。1980～82年（オレゴン州立大学博士課程在学中）、ヒト病原性ビブリオ属細菌の米国沿岸における分布調査に参加し、西海岸の調査を担当。1983～86年、メリーランド大学ワクチン開発センターで細菌病原性の分子遺伝学研究を開始。1986年、大阪大学微生物病研究所助手に採用される。1988年、京都大学医学部講師に採用され、同年、同助教授に昇任。1996年、京都大学東南アジア研究センター教授。2004年4月、京都大学東南アジア研究所教授。
6. (1) “Emergence of a Unique O3:K6 Clone of *Vibrio parahaemolyticus* in Calcutta, India, and Isolation of Strains from the Same Clonal Group from Southeast Asian Travelers,” (共著) *Journal of Clinical Microbiology*, 35 (12), 1997.
- (2) “Detection of *Escherichia coli* O157:H7 in the Beef Marketed in Malaysia,” (共著) *Applied and Environmental Microbiology*, 64 (3), 1998.
- (3) “Characterization of *Vibrio cholerae* O139 Bengal Isolated from Water in Malaysia,” (共著) *Journal of Applied Microbiology*, 85 (6), 1998.
- (4) “Isolation of *Escherichia coli* O157:H7 Strain Producing Shiga Toxin 1 but Not Shiga Toxin 2 from a Patient with Hemolytic Uremic Syndrome in Korea,” (共著) *FEMS Microbiology Letters*, 166 (1), 1998.
- (5) “Isolation and Molecular Characterization of Vancomycin-resistant *Enterococcus faecium* in Malaysia,” *Letters in Applied Microbiology*, 29 (2), 1999.
- (6) “*Vibrio parahaemolyticus* in Asia,” *Indian Journal of Microbiology*, 39, 1999.
- (7) “Isolation and Characterization of *Escherichia coli* O157 from Retail Beef and Bovine Feces in Thailand,” (共著) *FEMS Microbiology Letters*, 182 (2), 2000.
- (8) “Isolation of *Vibrio parahaemolyticus* Strains Belonging to a Pandemic O3:K6 Clone from Environmental and Clinical Sources in Thailand,” (共著) *Applied and Environmental Microbiology*, 66 (6), 2000.
- (9) “Clonal Dissemination of *Vibrio parahaemolyticus* Displaying Similar DNA Fingerprinting to Two Different Serovars (O3:K6 and O4:K68) in Thailand and India,” (共著) *Epidemiology and Infection*, 125 (1), 2000.
- (10) “Molecular Evidence That the Pandemic-associated O3:K6, O4:K68 and O1:K Untypeable (KUT) Strains of *Vibrio parahaemolyticus* Isolated from Different Countries Are Clonal,” (共著) *Emerging Infectious Diseases*, 6 (6), 2000.
- (11) “Characteristics of *Vibrio parahaemolyticus* O3:K6 from Asia,” (共著) *Applied and Environmental Microbiology*, 66 (9), 2000.
- (12) “Detection and Molecular Characterization of *Vibrio vulnificus* from Coastal Waters of Malaysia,” (共著) *Southeast Asian Journal of Tropical Medicine and Public Health*, 31 (4), 2000.
- (13) “Occurrence of the *vanA* and *vanC2/C3* Genes in *Enterococcus* Species Isolated from Poultry Sources in Malaysia,” (共著) *Diagnostic Microbiology and Infectious Diseases*, 39 (3), 2001.
- (14) “Molecular Epidemiologic Analysis of *Vibrio cholerae* O1 Isolated during the 1997–1998 Cholera Epidemic in Southern Thailand,” (共著) *Epidemiology and Infection*, 127 (1), 2001.
- (15) “Prevalence of the Pandemic Genotype of *Vibrio parahaemolyticus* in Dhaka, Bangladesh and Significance of Its Distribution across Different Serotypes,” (共著) *Journal of Clinical Microbiology*, 40 (1), 2002.
- (16) “Clinical, Epidemiologic, and Socio-economic Analysis of an Outbreak of *Vibrio parahaemolyticus* in Khanh Hoa

Province, Vietnam,” (共著) *Journal of Infectious Diseases*, 186 (11), 2002.

- (17) “Incidence of *Salmonella* spp. in Raw Vegetables in Selangor, Malaysia,” (共著) *Food Control*, 14, 2003.
- (18) “Prevalence and Serodiversity of the Pandemic Clone among the Clinical Strains of *Vibrio parahaemolyticus* Isolated in Southern Thailand,” (共著) *Epidemiology and Infection*, 130 (1), 2003.
- (19) “Application of Polymerase Chain Reaction for Detection of *Vibrio parahaemolyticus* Associated with Tropical Seafoods and Coastal Environment,” (共著) *Letters in Applied Microbiology*, 36 (6), 2003.
- (20) “Prevalence of Pandemic Thermostable Direct Hemolysin-producing *Vibrio parahaemolyticus* O3:K6 in Seafood and the Coastal Environment in Japan,” (共著) *Applied and Environmental Microbiology*, 69 (7), 2003.

松林 公蔵

1. 京都大学医学部, 1977.
 2. 京都大学医学博士, 1986.
 3. フィールド医学, 老年医学, 神経内科学
 4. (1) 本邦高齢者の健康度に関する縦断的追跡研究
(2) 東南アジア諸地域における人間の老化に関する生態学的ならびに老年医学的比較研究
(3) 痴呆性疾患に影響をおよぼす自然環境ならびに文化的背景に関する研究
- 人の疾病と老化のありさまは、その地域独自の生態系と密接な関連をもっている。また、地域固有の文化もまた、数千年にわたる食料生産の形態や技術伝播の歴史と不可分ではない。そして、人の健康観や死生観は、その地域の文化によって異なる価値概念でもある。今後の人類の医療のありかたを考えると、医学生物学という普遍的なグローバルズムとはまた別の、地域を重視した視点すなわちフィールド（臨地）医学的視点が重要と思われる。これまで、主としてミャンマー、インドネシア、ベトナムを中心としてフィールド医学的調査を継続しているが、本年度は対象地域をラオス、タイの他地域にも拡大し、疾病と老化の問題を追究する。

5. 1977年京大内科研修医を経て1978年静岡労災病院神経内科、1980年天理よろづ相談所病院神経内科勤務後1982年京大神経内科（医員）。1986年高知医大老年病科助手、1991年同講師、1998年同助教授を経て2000年より京大東南アジア研究センター教授（2004年4月、京大東南アジア研究所教授）、京大大学院医学研究科教授を兼任。

1982年以降、下記の海外学術調査を行った。1982、1985年チベット高原における高所医学研究、1989～90年にはヒマラヤ極低酸素環境下における生理学的研究とあわせてチベット高所住民に関する疫学調査を行った。また、1991年から現在にかけて、高知県香北町において地域在住高齢者の縦断的追跡調査を実施するとともに北海道浦臼町、滋賀県余呉町、京都府園部町に居住する高齢者と比較検討するのとあわせて、海外においてもフンザカラコルム、南米アンデス、中国雲南省、中国チベット自治区、モンゴル、韓国などにおいて、地域在住高齢者の健康度に関する生態学的比較調査を行っている。今後、東南アジア諸地域における老化のありさまならびに痴呆性疾患の実態を地域研究の一環として検討し、同時に超高齢化のすすむ本邦との比較研究を行う。

6. (1) “Incidental Brain Lesions on Magnetic Resonance Imaging and Neurobehavioral Functions in the Apparently Healthy Elderly,” (共著) *Stroke*, 23, 1992.
- (2) “Diurnal Blood Pressure Variations and Silent Cerebrovascular Damage in Elderly Patients with Hypertension,” (共著) *J Hypertens*, 10, 1992.
- (3) 『長寿伝説の里——高知医科大学カラコルム医学学術調査隊の記録』高知新聞社, 1992.
- (4) “Dependency of the Aged in the Community,” (共著) *Lancet*, 342, 1993.
- (5) “Polyneuritis Cranialis Due to Varicella-zoster Virus in the Absence of Rash,” (共著) *Neurology*, 45, 1995.
- (6) 『インカの里人——高知医科大学南米アンデス医学学術調査隊の記録』高知新聞社, 1995.
- (7) “Secular Improvement in Self-care Independence of Old People Living in Community in Kahoku, Japan,” (共著) *Lancet*, 347, 1996.
- (8) “Does Surge in Blood Pressure Precede or

- Follow Stroke?" (共著) *Lancet*, 347, 1996.
- (9) "Effects of Exercise on Neurobehavioral Function in Community-dwelling Older People More Than 75 Years of Age," (共著) *J Am Geriatr Soc*, 44, 1996.
- (10) "Serum Cholesterol Levels and Cognitive Function Assessed by P 300 Latencies in an Older Population Living in the Community," (共著) *J Am Geriatr Soc*, 45, 1997.
- (11) "Cognitive and Functional Status of the Japanese Oldest Old," (共著) *J Am Geriatr Soc*, 45, 1997.
- (12) "Home-blood Pressure Control in Japanese Hypertensive Population," (共著) *Lancet*, 350, 1997.
- (13) "Global Burden of Disease," (共著) *Lancet*, 350, 1997.
- (14) "Postural Dysregulation in Systolic Blood Pressure is Associated with Worsened Scoring on Neurobehavioral Function Tests and Leukoaraiosis in the Older Elderly Living in a Community," (共著) *Stroke*, 28, 1997.
- (15) "Quality of Life of Old People Living in the Community," *Lancet*, 350, 1997.
- (16) "Improvement in Self-care Independence May Lower the Increasing Rate of Medical Expenses for Community-dwelling Older People in Japan," (共著) *J Am Geriatr Soc*, 46, 1998.
- (17) "Frailty in Elderly Japanese," (共著) *Lancet*, 353, 1999.
- (18) "Health Status and Subjective Economic Satisfaction in West Papua," (共著) *Lancet*, 360, 2002.
- (19) "Depression Screening of Elderly Community-dwelling Japanese," (共著) *J Am Geriatr Soc*, 51, 2003.
- (20) "Depression, Age and ADL in Community-dwelling Elderly," (共著) *Geriatrics and Gerontology International*, 3, 2003.

安藤 和雄

1. 静岡大学農学部, 1978.
2. 京都大学博士 (農学), 1994.

3. 熱帯農学, 農村生態

4. (1) 応用的地域研究としての農村開発及び環境問題研究

(2) 農業と村落社会における地域性と在地性

(3) 新しい農業・農村観の構築

具体的には, アジア, 特に, バングラデシュ, ミャンマー, ラオス, 雲南 (中国), カザフスタンなど狭間地域とでもいえるこれらの国々のフィールドにおける農村開発, 環境問題, 持続的農業に関する研究を, 国際協力事業団の「住民参加型農村開発行政支援計画」と科研「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」の二つの共同研究プロジェクトを柱に応用的地域研究と位置付けて推進している。イスラム到来以前におけるベンガルのパーラ王朝期の東南アジア・南アジアの交流史に着目し, 東南アジア, 南アジアの周辺地域であるベンガル (バングラデシュ) とラカイン (ミャンマー) にまたがる狭間世界から, もういちどこの二つの地域の具体的な交わりの歴史と空間的ひろがり構築することで新たな地域観を提出したい。また, 京都府下での村落と私がかかわっている海外のフィールドの村落との比較の視点から, 掴むことができた新しい農業・農村観を日本社会へ問いかけてみたい。

5. 国際協力事業団青年海外協力隊員 (1978 ~ 81, バングラデシュ), バングラデシュ農科大学留学 (1984 ~ 86), 国際協力事業団長期派遣専門家 (1986 ~ 90, 94 ~ 95, バングラデシュ) を経て, 1996年に東南アジア研究センター助教授。2004年4月, 東南アジア研究所助教授。長期派遣専門家として, 村落調査, 小規模農村開発計画の策定・実施という参加型農村開発研究プロジェクトに参加する。こうした応用的地域研究の他に, 農業技術, 農村社会の地域性と在地性, ベンガルの地域性の東南アジアへの広がりを調査するために, 1997 ~ 2001年に, ミャンマー (イラワジデルタと中央平原ラカイン州, 農村開発と農業技術), バングラデシュ (ベンガルデルタ, 農村開発と環境問題), 中国 (珠江デルタ), タイ (チャオプラヤデルタ), 中国 (雲南, ハニ族の棚田農業), ラオス (サバナケット周辺の農業と定期市), カザフスタン (バルハシ湖方面の環境と人の移動) に関するフィールドワークを行った。

6. (1) 「バングラデシュのアウス稲・アマン稲の混

- 播栽培『農耕の技術』7, 1984.
- (2) 「バングラデシュにおける稲作に関する『格言』・『稲作儀礼』ノート——ノアカリ県シラディ村の稲作調査より」『コッラニ』9, 1984.
- (3) 「ベンガル・デルタ低地部の稲作——バングラデシュ東部地方におけるアウス・散播アマンの混播栽培とパーボイルド米に関するノート」『東南アジア研究』25 (1), 1987.
- (4) 「バングラデシュ・ハオール地域ジャワール村の灌漑稲作と近代の農業変容」(共著)『農業土木学会誌』58 (12), 1990.
- (5) 「ベンガルデルタ低地部の作付体系——技術変容と作付体系展開の地域間比較」(共著)『東南アジア研究』28 (3), 1990.
- (6) 「ベンガルデルタの村落形成についての覚書」(共著)『東南アジア研究』28 (3), 1990.
- (7) 「バングラデシュ・ハオール縁辺地域における乾季稲作と伝統的灌漑技術——ジャワール村における事例研究」(共著)『アジア経済』32 (2), 1991.
- (8) “Rice-Cultivation and Land Tenancy System under Shallow Tubewell Irrigation in Barind Tract, Bangladesh: A Case Study in Tetulia Village, Bogra District,” (共著) *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, No. 3, 1991.
- (9) 「バングラデシュの低平地における動的水文環境への適応農業」(共著)『農業土木学会誌』60 (5), 1992.
- (10) 「伝統稲作農業の特色」(共著) 白田・佐藤・谷口 (編)『もっと知りたいバングラデシュ』弘文堂, 1993.
- (11) 「第7章バングラデシュ」『アジア畑作指導マニュアル』全国農業改良普及協会, 1993.
- (12) 「バングラデシュの農村道路建設による水文環境の攪乱」(共著)『農業土木学会誌』62 (9), 1994.
- (13) 「マタボール達と在地の農村開発——バングラデシュ, ドッキンチャムリア村におけるアクション・リサーチの記録」(共著)『東南アジア研究』33 (1), 1995.
- (14) 「バングラデシュの農村開発の現状と援助」河合明宣 (編)『発展途上国産業開発論』放送大学教育振興会, 1995.
- (15) 「バングラデシュの氾濫原における乾季畑作と稲作農業——ジャムナ氾濫原ドッキン・チャムリア村の事例」(共著)『南アジア研究』第9号, 1997.
- (16) 「NGOの発展を支える在地性」斉藤千宏 (編)『NGOが変える南アジア』コモンズ, 1998.
- (17) 「農村開発における在村リーダーシップとインフラ整備事業の可能性——バングラデシュ・ドッキンチャムリア村の事例」佐藤寛 (編)『開発援助とバングラデシュ』アジア経済研究所, 1998.
- (18) 「洪水とともに生きる——ベンガル・デルタの氾濫原に暮らす人びと」田中耕司 (編)『自然と結ぶ——「農」にみる多様性』(講座・人間と環境3) 昭和堂, 2000.
- (19) 「バングラデシュの在地の技術と農村開発——当事者としての現場」『熱帯研究』11 (1), 2001.
- (20) 「『在地の技術』の展開——バングラデシュ・D村の事例に学ぶ」『国際農林業協力』24 (7), 2001.

河野 泰之

1. 東京大学農学部, 1981.
2. 東京大学農学博士, 1986.
3. 自然資源管理
4. (1) 土地資源評価

土地は地域をかたち作る場である。土地がどのように使われてきたか、今後、どのように使っていくべきかを議論するために、農業生産や環境保全、生物多様性の保護など多様な視点を統合した土地資源評価を試みている。現在のところ、タイ東北部を対象としている。
- (2) 東南アジア大陸山地部の農業と環境

農業生産と環境保全はある局面では相互補完的であるが、別の局面では対立する。この対立が顕著に見られる東南アジア大陸山地部を対象として、技術、社会、制度・政策を分析し、農業・環境問題に関する基本的な視点の提示をめざしている。
- (3) モンスーンアジアの水利

灌漑排水などの水利の発展過程の分析を通じて、生態環境と社会・経済システムの相互関係を追究する。これまでに、紅河、メコン河、チャオプラヤ河のデルタ地帯や四川省、雲南省を対象としてきた。

5. 1987年東南アジア研究センター助手, 1992～94年アジア工科大学灌漑工学経営プログラム助教授, 1998年東南アジア研究センター助教授。2004年4月, 東南アジア研究所助教授。1981年ジャワ島, 1983～84年タイ, スリランカ及び南インド, 1986年ルソン島, 1989年イラン, イラク, エジプト, 1990, 1991年中国, 1995～98年ベトナム紅河デルタやタイ東北部等, 1999～2003年ラオス北部やベトナム北部山地, 2001～03年ミャンマーにおいて土地・水利用や水利開発の調査に従事する。
6. (1) “Land and Water Resources Management for Crop Diversification in the Chao Phraya Delta, Thailand: A Case Study of Citrus Cultivation in the North Rangsit Irrigation Project,” (共著) 『東南アジア研究』 33 (2), 1995.
- (2) “Spread of Direct Seeded Lowland Rice in Northeast Thailand: Farmers’ Adaptation to Economic Growth,” (共著) 『東南アジア研究』 33 (4), 1996.
- (3) “Post-1949 Development of the Dujiangyan Irrigation System, South China: Bridging over a Gap between the Government and Farmers,” *International Journal of Water Resources Development*, 13 (1), 1997.
- (4) 「社会開発型ODA 事業における GIS の役割——東北タイ造林普及計画 (REX) を例として」(共著) 『GIS——理論と応用』 5 (1), 1997.
- (5) 「タイ国における農業開発の現状と今後の課題」(共著) 『農業土木学会誌』 65 (4), 1997.
- (6) “Yielding Ability in Direct Seeding Rice Culture in Northeastern Thailand,” (共著) 『熱帯農業』 42 (4), 1998.
- (7) “Village-level Irrigation System Management in the Command Area of Nam Ha 1 Irrigation Scheme,” (共著) in *Towards an Eco-regional Approach for Natural Resource Management in the Red River Basin of Vietnam*, 1998.
- (8) 「東南アジアにおける農業発展と地域性——灌漑開発を中心として」 『システム農学』 15 (1), 1999.
- (9) “Technical Changes in Rainfed Rice Cultivation in Northeast Thailand,” (共著) in *World Food Security and Crop Production Technologies for Tomorrow*, 1999.
- (10) “Direct Seeded Rice Cultivation in Northeast Thailand: Present Situation and Problems Involved,” (共著) in *World Food Security and Crop Production Technologies for Tomorrow*, 1999.
- (11) “Methodology for Regional Level Land Productivity Evaluation: A Case Study of Rainfed Agriculture in Northeast Thailand,” (共著) in *Can Biological Production Harmonize with Environment?* 1999.
- (12) “Competition and Interdependence between Paddy and Weeds of Rainfed Agriculture in Northeast Thailand,” (共著) in *Can Biological Production Harmonize with Environment?* 1999.
- (13) “Changes in Village-level Cropping Patterns in the Red River Delta after Doi Moi: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province,” (共著) 『熱帯農業』 43 (3), 1999.
- (14) 「焼畑で暮らす山地民とグローバルな環境保全」 『サイアス』 2000年12月号, 2000.
- (15) “Canal Development and Intensification of Rice Cultivation in the Mekong Delta: A Case Study in Cantho Province, Vietnam,” 『東南アジア研究』 39 (1), 2001.
- (16) “Changing Roles of Cooperatives in Agricultural Production in the Red River Delta,” (共著) in *Vietnamese Society in Transition*, 2001.
- (17) “A GIS-Based Crop-Modelling Approach to Evaluating the Productivity of Rainfed Lowland Paddy in North-East Thailand,” (共著) in *Increased Lowland Rice Production in the Mekong Region*, 2001.
- (18) “Impact of Direct Dry Seeding on Rainfed Paddy Vegetation in Northeast Thailand,” (共著) *Weed Biology and Management*, 3, 2003.
- (19) “Integrating Geographic Collection Database Repositories with Z 39.50-Compliant Gateway” (共著) *Asian Journal of Geoinformatics*, 4 (2), 2003.

- (20) “Sustainable Agro-resources Management in the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia” (共編著) 『東南アジア研究』 41 (4), 2004.

柳澤 雅之

1. 京都府立大学農学部, 1991.
 2. 京都大学博士 (農学), 2000.
 3. 熱帯農業生態学
 4. (1) 紅河デルタ農村開発戦略の多様性
ベトナム紅河デルタ村落で見られる多様な小規模農村手工業は、血縁のみならず、地縁、親戚縁者、知人友人、年齢階梯組織など、さまざまなネットワークを利用して分業体制が形成され複雑なシステムを発達させてきた。現在、市場メカニズムを取り入れた一連の社会・経済改革 (ドイモイ) による試行錯誤を経て、新しい経済ネットワークシステムが形成されつつある。臨地調査や仏領期に蓄積された研究成果との比較から、多様な生業システムとそれらを媒介する多様なネットワークの形成と変化を動態的に考察する。
 - (2) 東南アジア大陸山地部における農村開発と環境保護との関係
東南アジア大陸山地部は多様な自然環境の上に多様な言語・文化をもつ人々が暮らす。20世紀後半以降のアジアの急激な経済発展により地域の景観は大きく変容を受け一方、世界的な環境問題への関心の高まりから環境問題も避けて通れない課題となっている。農村開発と環境保護とのバランスを自然や文化の多様性の中で考察する。
5. 1999年、東南アジア研究センターに助手として採用される。2004年4月、東南アジア研究所助手。これまでに行った主な海外調査は以下の通りである。1992～94年、タイ中部の畑作地帯を対象として森林から大規模畑作地帯が形成されるまでの史的展開に関する聞き取り調査を行った。1994年から毎年、紅河デルタの1村落を対象とした学際的調査に参加し、これは現時点 (2004年) も継続中である。1995～96年にメコンデルタの水利および農業技術調査、1999～2002年には北部山地にて地域の多様性と農業集約化過程に関する調査を行った。これらの他に、それぞれ短期間ではあるが、1995年にフィリピンのミンドロ島でハヌノー・マンヤン族の植物利用に関する調査、1999年にスリランカで水稻栽培技術調査、

2000年にラオス北部山地で焼畑に依存する人たちの農業変容に関する調査、2001～02年にミャンマーでファーミングシステムに関する調査を行ってきた。

6. (1) “Development of Field Crops in Thailand: A Case Study in Saraburi and Lopburi Provinces,” (共著) 『東南アジア研究』 33 (4), 1996.
- (2) “Changes in Village-Level Cropping Patterns in the Red River Delta after Doi Moi: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province, Vietnam,” (共著) *Japanese Journal of Tropical Agriculture*, 43 (3), 1999.
- (3) “An Interdisciplinary Study of a Rice Growing Village: History and Contemporary Changes,” in N. N. Kinh, P. S. Teng, C. T. Hoanh, and J. C. Castella (eds.), *Towards an Ecoregional Approach for Natural Resource Management in the Red River Basin of Vietnam*, Ministry of Agriculture and Rural Development of Vietnam and International Rice Research Institute. The Agricultural Publishing House, Hanoi, 1999.
- (4) “Fund-Raising Activities of a Cooperative in the Red River Delta: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province, Vietnam,” 『東南アジア研究』 38 (2), 2000.
- (5) “Status of Vegetable Cultivation as Cash Crops and Factors Limiting the Expansion of the Cultivation Area in a Village of the Red River Delta in Vietnam,” (共著) *Japanese Journal of Tropical Agriculture*, 45 (4), 2001.
- (6) “Changing Roles of Cooperatives in Agricultural Production in the Red River Delta: A Case Study of the Coc Thanh Cooperative in Nam Dinh Province,” in J. Kleinen (ed.), *Vietnamese Society in Transition: The Daily Politics of Reform and Change*, Het Spinhuis Publishers, 2001.
- (7) “Quan ly cong dong cac he thong thuy loi o chau tho song Hong,” (共著) in Phan Huy Le (ed.), *Cac nha Viet Nam hoc nuoc*

ngoai viet ve Viet Nam tap 1 and 2, Hanoi: Nha xuất ban the gioi, 2002.

- (8) 「地域研究と村落調査」『東南アジア史別巻——東南アジア史研究案内』池端雪浦他（編），岩波書店，2003.
- (9) “Clean, Green, and Beautiful: Environment and Development under the Renovation Economy,” (共著) in Hy Van Luong (ed.), *Postwar Vietnam: Dynamics of a Transforming Society*, Lanham, USA: Rowman & Littlefield Publishers, INC, 2003.
- (10) “Agricultural Intensification and Diversification in the Northern Mountains Region of Vietnam,” in Hayashi Y. and T. Sayavongkhamdy (eds.), *Cultural Diversity and Conservation in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China Regional Dynamics in the Past and Present*, Bangkok: Amarin Printing and Publishing Public Company Ltd., 2003.
- (11) “Natural Bio-resources Use and Their Roles in Household Food Security in North-west Laos,” (共著) 『東南アジア研究』41 (4), 2004.
- (12) “Development Process of Cash Crops in the Northern Mountains Region of Vietnam: A Case Study in Moc Chau District of Son La Province, Vietnam,” in Furukawa H., Nishibuchi M., Kono Y., and Kaida Y. (eds.), *Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigm*, Kyoto University Press, 2004

社会文化相關研究部門

濱下 武志

1. 東京大学文学部，1972.
2. 東京大学文学修士，1974.
3. アジア地域研究
4. (1) 華僑・華人のネットワーク
- (2) 地域システム
- (3) ポスト国家の時代における宗主権と主権
- (4) 海洋アジア
東南アジア華人と中国華南との歴史的な結びつきを，シンガポールと香港に焦点を当てて調査を

行い，タイ・マレーシアを中心として，ヤンゴン・ジャカルタの調査を加え，華僑送金のメカニズムと，華南・東南アジア間の商業ネットワークを研究してきた。香港においては，貿易・貿易金融の検討に加え19世紀後半の土地改革，商業組織，外国銀行，地域組織などを調査している。1997年の返還後の変化にも注目した研究を行っている。

5. 1979年，一橋大学経済学部専任講師，1981年，一橋大学経済学部助教授，1982年，東京大学東洋文化研究所助教授，1988年，東京大学東洋文化研究所教授，2000年，京都大学東南アジア研究センター教授。2004年4月，京都大学東南アジア研究所教授。
6. (1) 『中国近代経済史研究——清末海関財政と開港場市場圏』東文研研究報告，1989.
- (2) 『近代中国の国際的契機』東京大学出版会，1990.
- (3) 『アジア交易圏と日本工業化1500-1900』（共編著）リプロポート，1991.
- (4) 「朝貢と条約」溝口雄三他（編）『アジアから考える』3，東京大学出版会，1994.
- (5) 『香港』筑摩書房，1996.
- (6) 『朝貢システムと近代アジア』岩波書店，1997.
- (7) “The Intra-regional System in East Asia in Modern Times,” in P. J. Katzenstein and T. Shiraishi (eds.), *Network Power: Japan and Asia*, Cornell University Press, Ithaca and London, 1997.
- (8) 「アジアの〈近代〉」『岩波講座世界歴史20アジアの〈近代〉』岩波書店，1999.
- (9) 「一九世紀後半の朝鮮をめぐる華僑の金融ネットワーク」杉山伸也，リンダ・グローブ（編）『近代アジアの流通ネットワーク』創文社，1999.
- (10) 「東南アジアをどうとらえるか（1）」坪内良博（編著）『〈総合的地域研究〉を求めて』京都大学学術出版会，1999.
- (11) 「アジア共同通貨構想と人民元」『大航海』No. 31, 1999.
- (12) 「地政論——統治史からみた地域と海域」『地域の世界史11 支配の地域史』山川出版，2000.
- (13) 「東からみた海のアジア史」『海のアジア1

- 海のパラダイム』岩波書店, 2000.
- (14) 『沖繩入門——アジアをつなぐ海域構想』筑摩書房, 2000.
- (15) 「中国近現代史研究の視點」『東方学』第100輯, 2000.
- (16) “Overseas Chinese Financial Networks and Korea,” in S. Sugiyama and Linda Grove (eds.), *Commercial Networks in Modern Asia*, Curzon, 2001.
- (17) 「グローバリゼーションの中の東アジア地政文化——『近代国家』から東アジア地域世界へ」『中国——社会と文化』第17号, 2002.
- (18) 「交差するインド系ネットワークと華人系ネットワーク——本国送金システムの比較検討」秋田茂・水島司(編)『現代南アジア6 世界システムとネットワーク』東京大学出版会, 2003.
- (19) “Ryukyu Networks in Maritime Asia,” *Kyoto Review of Southeast Asia*, Issue 3 / Nations and Other Stories/ March 2003.
- (20) “Tribute and Treaties: Maritime Asia and Treaty Port Networks in the Era of Negotiation, 1800–1900,” in Giovanni Arrighi, Takeshi Hamashita and Mark Selden (eds.), *The Resurgence of East Asia*, Routledge, 2003.
- 石川 登
1. 東京都立大学人文学部, 1985.
2. ニューヨーク市立大学 Ph. D., 1998.
3. 社会人類学
4. マレー世界の社会動態論
 野外調査によって知ることのできる人々の生活とこれをとりまくマクロな社会動態の結びつきに注意をはらうこと, そのためにフィールドワーカーとして可能なかぎり歴史を意識すること, この二点を基本姿勢としながら調査研究を進めている。
5. 1994年, 東南アジア研究センター助手。1999年, 同助教授。2004年4月, 東南アジア研究所助教授。主に東マレーシアおよびインドネシア, 西カリマンタン州にて調査に従事する。
6. (1) 「シドニー W. ミンツ著 『甘さと権力——砂糖が語る近代史』」『民族学研究』54 (4), 1990.
 (2) 「ボルネオにおける非単系出自論の可能性」『社会人類学年報』16, 1990.
- (3) 「理論と民族誌——『高地ビルマ』をめぐる人類学小史 1954–1982」『民族学研究』57 (1), 1992.
- (4) 「農民と往復切符——循環的労働移動とコミュニティ研究の frontline」『民族学研究』58 (1), 1993.
- (5) 「境界の社会史——ボルネオ西部国境地帯とゴム・ブーム」(特集: 「ポリティカル・エコノミーと民族誌」)『民族学研究』61 (4), 1997.
- (6) 「民族の語り方——サラワク・マレー人とは誰か」青木 保・内堀基光他(編)『民族の生成と論理』(岩波講座 文化人類学第5巻) 岩波書店, 1997.
- (7) “Between Frontiers: The Formation and Marginalization of a Border Malay Community in Southwestern Sarawak, Malaysia 1870s–1990s,” Ph. D. Dissertation, The City University of New York, 1998.
- (8) “On the Value and Value Equivalence of Commodity, Labor and Personhood: The Use and Abuse of Nation-States in the Border Land of Western Borneo,” presented at the 4th International Symposium, “Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival,” Joint Research Project on Population Movement in the Modern World, Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, Osaka, September 17–19, 1998.
- (9) “A Benevolent Protector or a Failed Exploiter?: Local Response to Agro-economic Policies under the Second White Rajah, Charles Brooke (1868–1917) of Sarawak,” in Shamsul A. B. and T. Uesugi (eds.), *Japanese Anthropologists, Malaysian Society: Contribution to Malaysian Ethnography*, Senri Ethnological Studies 48, National Museum of Ethnology, 1998.
- (10) 「空間の履歴——サラワク南西部国境地帯における国家領域の生成」坪内良博(編)『地域形成の論理』京都大学学術出版会, 1999.
- (11) “The Social History of Coconuts in Sematan, Southwestern Sarawak,” *The Sarawak Museum Journal*, 54 (75), 1999.

- (12) 「文化と経済のボーダーランド——ボルネオ南西部国境地帯の調査から」川田順造(編)『文化としての経済』山川出版社, 2001.
- (13) 「マレーシア, サラワク北部クムナ川流域社会における森林資源収奪と人口移動」基盤研究(A)(2)『異生態系接触に関わる人口移動と資源利用システムの変貌』(研究代表者, 古川久雄)科学研究費補助金研究成果報告書, 2001.
- (14) The Genesis of Nation Space in the Borderlands: A Case from Southwestern Sarawak, 1871–1917, Paper presented at Simposium Internasional II Jurnal Antropologi Indonesia “Globalisasi dan Kebudayaan Lokal: Suatu Dialektika Menuju Indonesia Baru,” Padang, Indonesia, 18–21 July 2001.
- (15) 「北ボルネオ会社植民地における労働管理——戦間期における国際協調主義と帝国主義ネットワーク」基盤研究(B)(2)『帝国の文化人類学的研究』(研究代表者, 永渕康之)科学研究費補助金研究成果報告書, 2002.
- (16) 「共同体の定位——ボルネオ島西部国境社会における『村落』『国家』『民族』」基盤研究(A)(2)『東南アジア社会変容過程のダイナミズム——民族間関係・移動・文化再編』(研究代表者, 加藤剛)科学研究費補助金研究成果報告書, 2002.
- (17) 「国家の歴史と村びとの記憶——サラワク独立をめぐる」黒田悦子(編)『個人と民族の運動』山川出版社, 2002.
- (18) “Remembering National Independence at the Margin of the State: A Case from Sarawak, East Malaysia,” *Japanese Review of Cultural Anthropology*, vol. 4, 2003.
- (19) 「東南アジア島嶼部のフロンティア空間——ボルネオ島西部インドネシア/マレーシア国境地帯からの視点」『トランスナショナルティ研究——場を越える流れ』大阪大学21世紀COEプログラム, 2003.
- (20) 「国家が所有を宣言するとき——東南アジア島嶼部における領有」三浦徹・岸本美緒・関本照夫(編)『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』東京大学出版会, 2004.

カローライン シィ ハウ
Caroline Sy HAU

1. フィリピン大学(英文学), 1990.
2. コーネル大学 Ph.D. (英文学), 1998.
3. カルチュラル・スタディーズ
4. (1) 東南アジアの華僑
(2) フィリピンにおける文化的生産
(3) 東南アジアにおける植民地主義とナショナリズムの比較
近著 *Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation, 1946–1980* (Ateneo de Manila University Press, Philippines, 2000) および近編著 *Intsik* (Anvil Publishing, Philippines, 2000) では, フィリピンにおける歴史と文学の緊密な緊張関係を探究してきた。他いくつかの論文では, フィリピンや東南アジアにおける華僑の文化的生産, 「東南アジア」および「アジア」の地域言説の理論化について, そして第三世界の民族解放闘争における知識人の役割について著した。現在2冊の本の著作に向けて準備している。1冊は上述の本の続編ともいえるべきもので, 1980年代初期から今にいたるフィリピン・ナショナリスト文学の研究であり, 今1冊は第二次世界大戦期以来のフィリピン華僑の日常生活の研究である。
5. 1990年, フィリピン大学講師, 1994年, コーネル大学副手, 1998年, フィリピン大学講師, 1999年, 京都大学東南アジア研究センター助教授。2004年4月, 京都大学東南アジア研究所助教授。
6. (1) “Dog eaters, Postmodernism, and the Worlding of the Philippines,” in Priscelina Patajo Legasto and Cristina Patajo Hidalgo (eds.), *Philippine Post-Colonial Literary Studies: Essays on Language and Literature*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1993.
- (2) “Hierarchy and Hybridity in Homi Bhabha’s ‘Signs Taken for Wonders,’” in Jaime Biron Polo (ed.), *Critical Forum, Manila: National Commission for Culture and the Arts*, 1995.
- (3) “Alterities of Rupture in Octavia E. Butler’s *Kindred*,” *Journal of English and Comparative Literature*, 4 (2), 1996.
- (4) *The Best of Tulay: An Anthropology of Chi-*

- nese Filipino Writing in English, Tagalog and Chinese, (共編) Manila: Kaisa Para sa Kaunlaran, Inc., 1997.
- (5) “Kidnapping, Citizenship, and the Chinese,” *Public Policy* 1 (1), 1997.
- (6) *All the Conspirators* by Carlos Bulosan, (編) Pasig: Anvil Publishing, Inc., 1998.
- (7) “Literature, Nationalism, and the Problem of Consciousness,” *Diliman Review*, 46 (3, 4), 1998.
- (8) “Afterword to Intsik: An Anthropology of Chinese Filipino Writing,” in Priscelina Patajo Legasto (ed.), *Filipiniana Reader: A Companion Anthropology of Filipiniana Online*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1998.
- (9) “‘Who Will Save Us from the Law?’: The Criminal State and the Illegal Alien in Post-1986 Philippines,” in Vicente L. Rafael (ed.), *Figures of Criminality in Indonesia, Vietnam, and the Philippines*, Ithaca: Cornell Southeast Asia Program, 1999.
- (10) “Clash of Spirits, Texts, and Histories,” *Public Policy*, 3 (1), 1999.
- (11) “On Representing Others: Intellectuals, Pedagogy, and the Uses of Error,” in Paula Moya and Michael Hames Garcia (eds.), *Reclaiming Identity: Realist Theory and the Predicament of Postmodernism*, Berkeley: University of California Press, 2000.
- (12) *Intsik: An Anthropology of Chinese Filipino Writing*, (編) Pasig: Anvil Publishing, 2000.
- (13) *Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation, 1946-1980*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2000.
- (14) 「フィリピン文学——想像と創造のパレット」大野拓司・寺田勇文 (編) 『現代フィリピンを知るための60章』明石書店, 2001.
- (15) “Individual, Ethnic and National Identity in the Age of Globalization: The Case of the Ethnic Chinese in Southeast Asia,” (共著) in Armando Malay, Jr. (ed.) *Going Global: Asian Societies on the Cusp of Change*, Quezon City: The Asian Center, University of the Philippines, 2001.
- (16) “The Cultural and Linguistic Turns in the Writing of Philippine History,” *Journal of Commonwealth and Post-colonial Literature*, 7 (2), (Fall 2000; actual publication year Summer 2002)
- (17) “Philippine Literary Nationalism and the Engendering of the Revolutionary Body,” in Ma. Odine de Guzman (ed.), *Body Politics: Essays on the Cultural Representation of Women’s Bodies*, Quezon City: University of the Philippines Center for Women’s Studies, 2002.
- (18) “The Question of Foreigners: Bai Ren’s Nanyang Piaoliuji and the Re/making of Chinese and Philippine Nationness,” in James T. Siegel and Audrey R. Kahin (eds.), *Southeast Asia over Three Generations: Essays Presented to Benedict R. O’G. Anderson*, Ithaca: Southeast Asia Program, Cornell University, 2003.
- (19) “Language Policy and Ethnic Relations in the Philippines,” (共著) in Michael E. Brown and Sumit Ganguly (eds.), *Fighting Words: Language Policy and Ethnic Relations in Asia*, Cambridge: Massachusetts Institute of Technology Press, 2003.
- (20) “Nation and Migration: Going Underground in Japan” *Philippine Studies*, 51 (2), 2004.

速水 洋子

1. 国際キリスト教大学教養学部, 1981.
2. ブラウン大学 Ph.D. (人類学), 1992.
3. 文化人類学, 東南アジア地域研究
4. (1) 東南アジア大陸部における山地・低地の民族間関係
(2) 東南アジア周縁社会における宗教と社会の動態
(3) 東南アジアにおけるジェンダーと家族
15年前に始めた北タイ山地のカレンと呼ばれる人々の村での調査が今にいたる研究の出発点である。そこから空間的にはより広く北タイ山地からミャンマーでの調査を行い、時間的には時々刻々と変わる現況から植民地初期ビルマまで遡っ

て資料や文献を渉猟している。これまでの研究を包含する主題は、大陸部山地における山地と平地の民族間関係であるが、扱ってきた主なテーマとしては、宗教実践の動態に関わるもの、山地における森林や土地の権利の主張をめぐるもの、そしてジェンダーの視点から宗教変化や移動体験、民族間関係を捉えるものに大きく分かれる。そのいずれにおいても、近代国家の枠組の生成の下にありながら、必ずしもそればかりに規定されるものではない周縁の人々の生活の変化を、民族間関係の変遷を見ながら追ってきた。

現在は「家族」に関心をもっており、自分自身の生活体験に根ざした自他理解を目指しながら、フィールド調査を続けたい。

5. 1993年、東北大学、宮城学院女子大学にて非常勤講師、1996年、東南アジア研究センターに助手として採用される。1998年、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助手に配置換。2000年より、東南アジア研究センター助教授。2004年4月、東南アジア研究所助教授。1987年よりタイにて調査活動を行う。1987～89年、1996年以後毎年北タイを中心とする調査。2000年よりミャンマーでの研究開始。
6. (1) “Ritual and Religious Transformation among Sgaw Karen of Northern Thailand: Implications on Gender and Ethnic Identity,” Ph. D. dissertation, Brown University, 1992.
- (2) 「カレン族における周縁の力と宗教・社会変動——十九世紀ビルマから今日のタイまで」『民族学研究』57(3), 1992.
- (3) 「カレン族の赤いスカート」『季刊民族学』17(2), 1993.
- (4) “To Be Karen and to Be Cool: Community, Morality and Identity among Sgaw Karen in Northern Thailand,” *Cahier des Sciences Humaines*, 29(4), Paris: Editions de l’Orstom, 1993.
- (5) 「北タイ山地における仏教布教プロジェクト——あるカレン族村落群の事例」『東南アジア研究』32(2), 1994.
- (6) 「カレン族における秩序と豊饒、男と女」清水昭俊(編)『洗練と粗野——社会関係を律する価値』東京大学出版会, 1995.
- (7) “Karen Tradition According to Christ or Buddha: The Implications of Multiple Reinterpretations for a Minority Ethnic Group in Thailand,” *Journal of Southeast Asian Studies*, 27(2), 1996.
- (8) “Between Tradition and the State: Women and Ethnic Boundary among a Minority Ethnic Group in Northern Thailand,” in *Proceedings of the International Conference on Women in the Asia-Pacific Region: Persons, Powers and Politics*, Singapore: National University of Singapore, 1997.
- (9) “Internal and External Discourse of Communality, Tradition and Environment: Minority Claims on Forest in the Northern Hills of Thailand,” 『東南アジア研究』35(3), 1997.
- (10) “Motherhood Redefined: Women’s Choices on Family Rituals and Reproduction in the Peripheries of Thailand,” *Sojourn*, 13(2), 1998.
- (11) 「『民族』とジェンダーの民族誌——北タイ・カレンにおける女性の選択」『東南アジア研究』35(4), 1999.
- (12) 「『森に生きるカレン』と伝統の創造」山田勇(編)『森と人のアジア——伝統と開発のはざまに生きる』昭和堂出版, 1999.
- (13) 「周縁社会に生きる女性たち——北タイ・カレン」窪田幸子・八木祐子(編)『社会変容と女性——ジェンダーの文化人類学』ナカニシヤ出版, 1999.
- (14) 「タイ国家の領土におけるカレンの土地権——共同性と伝統の構築」杉島敬志(編)『土地所有の政治史——人類学的視点』風響社, 1999.
- (15) “Buddhist Missionary Project in the Hills of Northern Thailand: A Case Study from a Cluster of Karen Villages,” *Tai Culture: International Review on Tai Cultural Studies*, 4(1), 1999.
- (16) “The Decline of Founder’s Cults and Changing Configurations of Power: Village, Forest and State among Karen,” in Nicola Tannenbaum and C. A. Kammerer (eds.), *Founder’s Cults*, New Haven, CT: Center for Southeast Asian Studies, Yale University,

2003.

- (17) "Morality, Sexuality and Mobility: Changing Moral Discourse and Self," in Claudio O. Delang (ed.), *Living at the Edge of Thai Society: The Karen in the Highlands of Northern Thailand*, Routledge Curzon, 2003.
- (18) *Gender and Modernity: Perspectives from Asia and Pacific*, (共編) Kyoto Area Studies on Asia, Vol. 4, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2003.
- (19) *Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen*, Kyoto Area Studies on Asia, Vol. 7, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2004.
- (20) 「越境の時とその語り——北タイカレン女性」田中雅一・松田素二 (編) 『ミクロ人類学の世界』世界思想社, 2004.

小泉 順子

1. 東京大学教養学部, 1983.
2. 東京大学博士 (農学), 1991.
3. 歴史学, タイ史
4. (1) 18世紀末から20世紀初頭のシャム (タイ) 史
- (2) 歴史叙述
- (3) ジェンダー史
主に未刊タイ語公文書史料を利用しながら, 18世紀末から20世紀初頭におけるシャム (タイ) の政治, 経済, 社会を, 主に徴税や徭役を軸に, 地域間・地域内交易, 権力の重層性, ジェンダー, 植民地主義, ナショナリズムなどのファクターを織り込みつつ実証的に検討。所謂前近代から近代に至る時代のシャムについて, 新たな歴史像や課題の提起を試みてきた。主たる研究領域は相互に関連する次の3つに大別される。まず交易/市場/国家の相互関係に関わる実証研究の領域。第2にヒストリオグラフィやジェンダーなど方法論に関わる領域。そして今日グローバル化の中で顕在化するポピュラーカルチャーにおける歴史の表象/生産/消費の問題である。今後は, 近代を歴史化する方法として, 歴史を経過, 経緯, 変化として線的に考えるのではなく, 多様な要素の重なりや蓄積としてモデル化する可能性も考えてみたい。

5. 1987~89年タイ国チュラロンコーン大学経済学部大学院留学 (文部省アジア諸国等派遣留学生), 1991年東京大学教養学部助手, 1993年東京外国語大学外国語学部専任講師, 1995年同学部助教授, 1995~97年 Visiting Fellow, Division of Pacific and Asian History, Research School of Pacific and Asian Studies, the Australian National University, 2004年4月, 京都大学東南アジア研究所助教授。
6. (1) 「徭役と人頭税・兵役の狭間」『上智アジア学』第17号, 1999.
- (2) 「アユタヤ時代における賦役制度の『創造』」『東洋文化研究所紀要』第137冊, 1999.
- (3) "From a Water Buffalo to a Human Being: Women and the Family in Siamese History," in Barbara Watson Andaya (ed.), *Other Pasts: Women, Gender and History in Early Modern Southeast Asia*, Center for Southeast Asian Studies, University of Hawaii, 2000.
- (4) 「メイド・イン・タイランド——タイシルクの来歴に関するノート」『東洋文化研究所紀要』第140冊, 2000.
- (5) 「人を“タート”にしたくない——タイ史のジェンダー化へ向ける一試論」(共著)『東南アジア 歴史と文化』No. 29, 2000.
- (6) 「もう一つの『ファミリー・ポリティクス』——ラタナコーシン朝シャムにおける近代の始動」『講座 東南アジア史 5 東南アジアの再編』岩波書店, 2001.
- (7) "King's Manpower Constructed: Writing the History of the Conscripted of Labour in Siam," *South East Asia Research* (London), 10 (1), 2002.
- (8) "Engendering Thai History: 'I do not wish my people to be that,'" (共著) *Asian Research Trends: A Humanities and Social Science Review*, No. 13, 2003.
- (9) 「バーンチャーン諸系譜に関するノート——シャム史史料の歴史性をめぐって」『東洋文化研究所紀要』第142冊, 2003.
- (10) 「アンナ・レオノーウェンスが問いかけるもの」『東洋文化研究所紀要』第145冊, 2004.

政治経済関連研究部門

水野 広祐

1. 京都大学経済学部, 1978.
2. 京都大学農学博士, 1994.
3. 経済発展論, 農業経済学, 労働経済学
4. (1) 制度と経済発展
(2) インドネシアにおける労働組合と労使関係
(3) 西ジャワ農村における住民組織とコミュニティに根ざした発展
(4) 経済発展における小営業と在来的発展
(5) インドネシア政治経済論

現在, ミクロ的には「組織と制度」という主題のもと, 民主化・地方分権化への過渡期インドネシアにおいて生まれている新しい組織がどのように制度を変えており, これがどのように経済発展を支えるのかについて研究している。具体的には, (1)「労働組合と労使関係」の研究によって, 新たに多数生まれている労働組合がどのように労使関係に変化をもたらしているのか, また企業レベルや国家レベルの労働政策や人的資源開発政策にどのような変化が現れているのか研究している。また, (2)「住民組織とコミュニティにもとづく発展」では, 特に農村において生まれている住民組織や, 地方分権化の結果変化しつつある行政組織が, 地域経済の発展を促進しうるのかどうかに関して研究している。さらに, (3)「経済発展における小営業と在来的発展」研究では, 通貨危機後より活発になった中小零細企業の活動に焦点を当てている。またマクロ的には, 通貨危機後の資本所有関係の再編などに注目し, 土地・労働・資本および組織の制度に関する検討と, 政策と長期的数量的な変化に関する研究を統合させた(4)インドネシア政治経済論に取り組んでいる。

5. アジア経済研究所研究員 (1978～96年) を経て, 1996年東南アジア研究センターに助教授として着任, 2003年4月に教授に昇進。2004年4月, 東南アジア研究所教授。

1984～86年にボゴール農業大学開発研究センター客員研究員として, 「インドネシアにおける中小零細企業の発展と農村内非農業部門に関する調査研究」を行う。1989～92年にバンドゥン工業大学環境研究センターにおいて, 「西ジャワ農村における非農業部門研究」プロジェクトに参加し建材産業の調査を行う。1990年には, ガジャ

マダ大学農村地域開発研究センターにおける「中部ジャワ農村経済の系譜的分析」プロジェクトに参加し, 農家経済調査を行う。1994年および1997年と2000～01年に, バンドゥン工業大学大学院開発研究科において客員講師として経済発展論等を講義。1995年大阪市立大学経済学部客員教授, 1996～97年および1999年と2001年にジャカルタ連絡事務所駐在。1998～2002年に「環境調和型持続的農村開発研究」プロジェクト, 2001年より「過渡期インドネシアにおける人類学的研究」プロジェクトに参加。2002年より「インドネシアの民主化における地方政治の変容」プロジェクト (研究代表), および「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『古い』の問題を中心として」プロジェクトに参加。2002年から2003年に「インドネシア農村経済の15年——西ジャワにおける構造調整政策と民主化過程に対する住民の対応と制度の変化」に関し, 在外研究員として調査研究。

6. (1) 「1970年代後半におけるインドネシア土地紛争とその特質」滝川 勉 (編)『東南アジア農村の低所得階層』アジア経済研究所, 1982.
- (2) 「インドネシアの土地所有権と1960年農地基本法——インドネシアの土地制度とその問題点」『国際農林業協力』10 (4), 1988.
- (3) “Perspektif Peranan Industri Bahan Bangunan dalam Industrialisasi Pedesaan,” in Sayogyo, M. Tambunan (ed.), *Industrialisasi Pedesaan, Dilengkapi Dengan Memorandum Bersama Tentang Industrialisasi Pedesaan*, Pusat Studi Pembangunan, Institut Pertanian Bogor, Ikatan Sarjana Ekonomi Indonesia, 1990.
- (4) 「西ジャワ農村における土地所有権の確認書類保有状況」梅原弘光 (編)『東南アジアの土地制度と農業変化』アジア経済研究所, 1991.
- (5) 「規制緩和政策下のインドネシアにおける労働問題と労働行政——1980年代後半のフォーマルセクターを中心に」『アジア経済』33 (5), 1992.
- (6) 「インドネシアにおける農村出身女子労働者保護問題——急成長輸出産業と中東への労働力輸出」『アジア経済』33 (6), 1992.
- (7) 『東南アジア農村階層の変動』(共編著) アジア経済研究所, 1993.

- (8) 「西ジャワ農村における労働力移動と農村諸階層——プリアンガン高地の農村工業村の事例」『アジア研究』39(3), 1993.
- (9) 「インドネシア農村におけるプリブミ資本織布小工業の展開——西ジャワ・マジャラヤ地方の産地における小営業」『東南アジア研究』31(3), 1993.
- (10) 『中部ジャワ農村の経済変容——チョマル郡の85年』(共著) 東京大学出版会, 1994.
- (11) 『東南アジア農村の就業構造』(編著) アジア経済研究所, 1995.
- (12) “Perubahan Sektor Ekonomi Nonpertanian dan Perpindahan Tenaga Kerja di Desa Karang Tengah dan Desa Pesantren,” in H. Kano, F. Husken and D. Surjo (eds.), *Di Bawah Asap Pabrik Gula, Masyarakat Desa Di Pesisir Jawa Sepanjang Abad Ke-20*, AKATIGA & Gadjah Mada University Press, 1996.
- (13) *Rural Industrialization in Indonesia: A Case Study of Community-Based Weaving Industry in West Java*, Institute of Developing Economies, 1996.
- (14) 『東南アジアの経済開発と土地制度』(共編著) アジア経済研究所, 1997.
- (15) 「インドネシアにおける行政組織と住民組織——西ジャワ・プリアンガン高地農村の事例」加納啓良(編)『東南アジア農村発展の主体と組織——近代日本との比較から』アジア経済研究所, 1998.
- (16) 『インドネシアの地場産業——アジア経済再生の道とは何か?』(地域研究叢書 No. 7) 京都大学学術出版会, 1999.
- (17) “Characteristics of Off-farm Sector and Labor Movements in Karang Tengah and Pesantren 1904–1990,” in H. Kano, F. Husken and D. Suryo (eds.), *Beneath the Smoke of the Sugar: Mill, Javanese Coastal Community during the Twentieth Century*, AKATIGA & Gadjah Mada University Press, 2001.
- (18) 「インドネシア経済とIMF・世銀——構造調整・民主化・下からの開発の時代」『土地制度史学』第175号, 2002.
- (19) 「グローバリゼーションとインドネシアにおける労働組合政策と労働組合——資本移動類型とDeyo説との関連で」『社会政策学誌』第8号, 2002.
- (20) 「インドネシアにおける労使紛争処理制度とその紛争事例——『合議の原則』(ムシャワラー)のもとにおける労使紛争処理」『アジア経済』44(5;6), 2003.

藤田 幸一

1. 東京大学農学部, 1982.
2. 東京大学農学博士, 1992.
3. 農業経済学
4. (1) 南アジアの灌漑と農業・農村発展
(2) 南・東南アジアの農村社会組織と開発行政
(3) アジア途上国の農村開発金融
(4) ミャンマーおよびラオスの農業・農村開発政策
 バングラデシュ・インドで農業発展の原動力となった管井戸灌漑の水取引「市場」について過去10年来続けてきた研究を集大成するとともに、南・東南アジアの農村社会組織と開発行政、マイクロ・クレジットを中心とする農村開発金融の各研究を継続している。また、ミャンマー農村の社会経済的研究を、引き続き継続・深化させると同時に、これまでの成果の公表を始めたところである。ラオスの農村経済研究も、農村金融に焦点を当てつつ、昨年度から開始した。今後、南アジアと東南アジアの両地域にまたがる農村研究の蓄積を基盤に、その本格的な比較研究、およびより広い学問体系への体系化をめざしたい。
5. 1986年, 農林水産省農業総合研究所研究員。1995年, 同研究所主任研究官。1995年, 東京大学助教授。1998年, 京都大学東南アジア研究センター助教授。2004年4月, 京都大学東南アジア研究所助教授。1992~94年, バングラデシュでJICAプロジェクト「農村開発実験に関する共同研究」に長期派遣専門家として参加。2000年12月から1年間, JICA専門家としてミャンマーに滞在。バングラデシュなど南アジア諸国, ミャンマー, ラオス, インドネシアなどの農業・農村発展の社会経済学的研究に従事, 現在に至る。
6. (1) 「バングラデシュにおける農業発展——農業構造と技術変化の関連を中心に」『アジア経済』27(12), 1986.
(2) 「マダガスカルにおける稲作の不振と政策対

- 応」『農業総合研究』42 (1), 1988.
- (3) 「ザンビアにおける経済危機と農業の価格・流通政策」『農業総合研究』42 (1), 1988.
- (4) 「灌漑開発と制度的諸問題」佐藤 宏 (編) 『バングラデシュ——低開発の政治構造』アジア経済研究所, 1990.
- (5) 「農村土地なし貧困層への制度的金融——バングラデシュ・グラミン銀行」『アジア経済』31 (6;7), 1990.
- (6) 「ジャワ農村における農業労働慣行に関する一考察——西部ジャワ州天水田地域の農村調査から」『農業総合研究』44 (3), 1990.
- (7) 『バングラデシュ農業発展論序説——技術選択に及ぼす農業構造の影響を中心に』農業総合研究所, 1993.
- (8) 『『緑の革命』と所得分配——バングラデシュの灌漑水市場の経済分析を通じて』『農業経済研究』66 (4), 1995.
- (9) 「村落公共機能の強化をめざして——バングラデシュ農村開発の新戦略」『東南アジア研究』33 (1), 1995.
- (10) 「バングラデシュ農村非制度金融の新動向——階層間金融フローの『逆転』をめぐる」『農業総合研究』49 (3), 1995.
- (11) “Role of the Groundwater Market in Agricultural Development and Income Distribution: A Case Study in a Northwest Bangladesh Village,” (共著) *Developing Economies*, 33 (4), 1995.
- (12) 「小規模インフラ事業にみる行政と村落——バングラデシュにおける事例研究」(共著) 山本裕美 (編) 『経済改革下のアジア農業と経済発展』アジア経済研究所, 1998.
- (13) 「農村開発におけるマイクロ・クレジットと小規模インフラ整備」佐藤 寛 (編) 『開発援助とバングラデシュ』アジア経済研究所, 1998.
- (14) 「ミャンマー乾期灌漑稲作経済の実態——ヤンゴン近郊農村フィールド調査より」(共著) 『東南アジア研究』38 (1), 2000.
- (15) “Credit Flowing from the Poor to the Rich: The Financial Market and the Role of the Grameen Bank in Rural Bangladesh,” *Developing Economies*, 38 (3), 2000.
- (16) 「1990年代バングラデシュにおける地下水市場の変容——非効率の構造と所得分配への含意」『アジア経済』42 (6), 2001.
- (17) 「インド・西ベンガル州の農業発展と管井戸灌漑——ノディア県一農村調査より」『アジア経済』43 (7), 2002.
- (18) 「制度の経済学と途上国の農業・農村開発——政府・市場・農村コミュニティのはざまにて」『農業経済研究』74 (2), 2002.
- (19) “Groundwater Market and Agricultural Development in West Bengal: Perspectives from a Village Study,” *Japanese Journal of Rural Economics*, 5, 2003.
- (20) 「90年代ミャンマーの稲二期作化と農業政策・農村金融——イラワジ管区一農村調査事例を中心に」『経済研究』54 (4), 2003.

パトリシオ アビナーレス
Patricio N. ABINALES

1. フィリピン大学 (歴史学・政治学), 1978.
2. コーネル大学 Ph.D. (政治学), 1997.
3. 歴史学, 比較政治学
4. (1) アメリカ植民地主義とフィリピン政治学の社会構築
(2) フィリピンにおける国家と社会の関係
(3) ジェンダーと社会暴力
センター助教授としての最初の年は、極めて有意義であった。博士論文を加筆・修正し、それは *Making Mindanao: Cotabato and Davao in the Formation of the Philippine Nation-State* として Ateneo de Manila University Press から出版された。その後もアメリカ植民地期の政治形成の研究を継続するとともに、マルコス独裁下での反政府共産運動の起源 (特に南部フィリピンにおけるそれ) に関する研究を行っている。また、*Critical Asian Studies* の Southeast Asia 関係編集者を務めた。
現在、Donna J. Amoroso と共に、フィリピンにおける国家と社会の関係についての教科書を完成させ、アメリカの Rowman and Littlefield およびフィリピンの Anvil Publishing で出版の予定である。また、最近 *Love, Sex and the Filipino Communist* というタイトルで Anvil Publishing から本を出版した。
5. フィリピン大学第三世界研究センター助手、フィリピン大学政治学部助手、フィリピン大学文学部講師等を経て1998年、オハイオ大学政治学部助教授。1999年、京都大学東南アジア研究セ

- ンター助教授。2004年4月、京都大学東南アジア研究所助教授。
6. (1) *The Revolution Falters: The Left in Philippine Politics after 1986* (編著), Ithaca, New York: Cornell University Southeast Asia Program, 1996.
 - (2) “The Church and State and the Church as State in the Philippines: Review Essay,” *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, 28 (2), 1997.
 - (3) “State Building, Communist Insurgency and Cacique Politics in the Philippines,” in Paul B. Rich and Richard Stubbs (eds.), *Counter-insurgent States: Guerrilla Warfare and State-Building in the Twentieth Century*, New York and London: MacMillan, 1997.
 - (4) “Davao-kuo: The Political Economy of a Japanese Settler Zone in Philippine Colonial Society,” *Journal of American-East Asian Relations*, December, 1997.
 - (5) *Images of State Power: Essays on Philippine Politics from the Margins*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1998.
 - (6) “The Muslim-Filipino and the Philippine State,” *Public Policy* (A University of the Philippines Quarterly), August, 1998.
 - (7) “Muslim Political Brokers and the Philippine Nation-State,” in Carl J. Trocki (ed.), *Gangsters, Democracy and the State in Southeast Asia*, Ithaca, N. Y.: Cornell University Southeast Asia Program, 1998.
 - (8) “The Muslim Rebellion Reconsidered,” *Philippine Yearbook*, 1999.
 - (9) “Filipino Marxism and the National Question,” *Filipinas* (A Journal of Philippine Studies, Special Issue on Post-War Filipino Nationalisms, edited by Patricio N. Abinales and Benito M. Vergara, Jr.), 32, 1999.
 - (10) “The Rise and Demise of a Colonial Frontier Society: Davao Americans and the Moro Province,” *Kinaadman*, Spring, 1999.
 - (11) “Review Essay: Booty Capitalism: The Politics of Banking in the Philippines, by Paul D. Hutchcroft. Ithaca and London: Cornell University Press, 1998,” *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Spring, 2000.
 - (12) “From Orang Besar to Colonial Big Men: Datu Piang of the Magindanaos and the American Colonial State,” in Alfred W. McCoy (ed.), *Lives at the Margin: Biographies of Obscure Filipinos*, Madison: Center for Southeast Asian Studies, University of Wisconsin, 1999 and Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2000.
 - (13) *Making Mindanao: Cotabato and Davao in the Formation of the Philippine Nation-State*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2000.
 - (14) *Fellow Traveler: Essays on Filipino Communism*, Quezon City: University of the Philippines Press, 2001.
 - (15) “Populist Presidents and Coalition Politics in the Philippines,” *Current History: A Journal of Contemporary World Affairs*, April, 2001.
 - (16) “An American Colonial State: Authority and Structure in Southern Mindanao,” in Angel Velasco Shaw and Luis H. Francia (eds.), *Vestiges of War: The Philippine-American War and the Aftermath of an Imperial Dream*, N. Y.: New York University Press, 2002.
 - (17) “American Rule and the Formation of Filipino ‘Colonial Nationalism,’” 『東南アジア研究』 39 (4), 2002.
 - (18) “Progressive-Machine Conflict in Early Twentieth Century American Politics and Colonial State-building in the Philippines,” in Julian Go and Anne Foster (eds.), *The American Colonial State in the Philippines in Global Perspective*, Duke University Press, 2003.
 - (19) “The Philippines: Dilemmas of Renewed Security Ties,” *Great Decisions Journal. Foreign Policy Association* (New York), Anniversary Edition, 2004.
 - (20) *Love, Sex and the Filipino Communist*. Manila: Anvil Publishing Inc., 2004.

岡本 正明

1. 京都大学法学部, 1994.
2. 京都大学大学院人間・環境学修士, 1996.
3. 比較政治学
4. (1) インドネシアにおける地方分権政策
(2) 東南アジアにおける地方政治
(3) ドナーによる東南アジアへの政策支援と現地社会との関わり

権威主義的なスハルト体制崩壊後のインドネシアにおいて、「ビッグバン・アプローチ」とも言われるほどラディカルな形で始まった地方分権化が、一体どのような地方政治の変動をもたらしているのかについての分析枠組みを提示することが現在の私の最も大きなテーマである。民主化と平行して地方分権化が始まっただけに、地域ごとに地方政治のパターンは非常に多様性を見せており興味を尽きない。また、インドネシアと比較する意味でも、この作業と平行する形で東南アジア各地の地方政治研究の業績を見直している。とりわけ、フィリピンやタイといった民主化を経た国民国家の地方政治のパターンは、インドネシアの将来を見据える上でも参考になる。

私自身が地域開発の専門家としてインドネシアに派遣されたこと、インドネシアの政治的自由化に伴って様々なドナーが民主化支援、警察支援、地域開発支援など政策支援に携わっており地域社会に良い意味でも悪い意味でも変容を加えていることから、こうした政策がどれだけの影響を対象地域に与えているのかを考察したい。

5. 1996年, 日本学術振興会特別研究員。99年東南アジア研究センター非常勤研究員。2000年, 国際協力事業団「地方分権化における地方政府間協力関係」支援のための短期専門家としてインドネシア南スラウェシ州に派遣される。2001年, 国際協力事業団「地域開発政策支援」のための長期専門家としてインドネシア南スラウェシ州に派遣される。2003年東南アジア研究センター助教授。2004年4月東南アジア研究所助教授。とりわけ地方分権化後のインドネシア地方政治研究に従事する。
6. (1) 「スハルト期インドネシアの対外政策, 80年代前半に始まる変容——対外政策の原則, Bebas Aktif の持つ意味をふまえて」『アジア研究』43(4), 1997.

- (2) 「革命期を生き抜いた植民地期原住民政官吏 (パンレ・プラジャ) ——インドネシア・西ジャワ州の場合」『東南アジア研究』38(2), 2000.
- (3) 「改革派に転向したスハルト期地方エリートたち——バンテン州新設の政治過程に焦点を当てて」『アジア・アフリカ地域研究』1(1), 2001.
- (4) 「インドネシアにおける地方分権について——国家統合のための分権プロジェクトの行方」『地方行政と地方分権』JICA 国総研報告書, 2001.
- (5) “Decentralization in Indonesia: A Project for National Integration,” *Government Decentralization Reforms in Developing Countries*, Institute for International Cooperation, Japan International Cooperation Agency, 2001.
- (6) 「インドネシアの地方分権——分権の流れと問題の類型化」村松岐夫・白石隆 (編)『日本の政治経済とアジア諸国 (上) 政治秩序篇』国際日本文化研究センター共同研究報告, 2003.
- (7) 「地方分権化後インドネシアの中央地方関係——自治体への箍を締め始めた中央政府の諸政策について」『インドネシアの将来展望と日本の援助政策』(財)国際金融情報センター, 2004.
- (8) “Bagaimana Menemukan Kembali Banten dan/atau ‘Ke-Banten-an’?” in Abdul Malik (ed.), *Apa dan Siapa Orang Banten: Pandangan Hidup, Kosmologis dan Budaya*. (forthcoming)

阿部 茂行 (客員 2004年4月1日~2005年3月31日)

1. 大阪大学経済学部, 1970.
2. ハワイ大学 Ph. D. (経済学), 1977.
3. 経済学
4. (1) タイとマレーシアのマクロ経済政策の研究
タイとマレーシアのマクロ経済運営の違いはアジア通貨危機以降だっている。経済回復は両国とも順調であることが、経済運営の違いとあいまって、興味深い研究課題となっている。制度の問題, 国家と市場の役割について研究する。
(2) 東南アジアの高齢化とセーフティネットの研究
日本のみならず東南アジアでも高齢化は今後大

- きな問題となる。この問題については過去2年ほどシンガポールを中心に、生産性分析を用いて、高齢労働者の生産性が意外に高いことを実証してきた。教育や熟練の重要性が分かり、今後それらをどう役立てるか、どう政策に結びつけるかが研究課題となる。同時に高齢化を見据えた東南アジア各国のセーフティネットの現状とその効率の比較調査を実施する。
- (3) アジア諸国と日本の生産連関分析と経済連携の研究
日本の海外直接投資がアジアの生産構造を変えた。アジア経済研究所が編纂した多国間産業連関表を使って、1970年代、1980年代、1990年代の変貌を精緻に分析することにより、種々の経済連携協定の有効性を検討する。
5. 1977年、国連ESCAP経済担当官、1980年京都産業大学経済学部講師、1981年同助教授、1987年同教授、1991年神戸大学経済経営研究所教授、1998年東南アジア研究センター教授。2004年4月同志社大学政策学部教授。
6. (1) “A CGE Analysis of Income Distribution: The Case of Malaysian Economy,” *Asian Economic Journal*, 1 (2), 1988.
(2) “Competitiveness and Exchange Rate Adjustments in Korea,” *Development & South-South Cooperation*, 5 (9), 1989.
(3) “Industrial Relations and Their Evolution in Japan,” in Chung-hoon Lee and Fun-koo Park (eds.), *Emerging Labor Issues in Developing Asia*, KDI Press, 1991.
(4) “Development Assistance,” (共著) in K. Abe, W. Gunter and H. See (eds.), *Economic, Industrial and Managerial Coordination between Japan and the USA*, Macmillan, 1992.
(5) 「アジアの中の南と北——援助より投資を」『アステイオン』TBSブリタニカ、1992。(英語版とフランス語版の *Japan Echo* に翻訳の上、再録)
(6) “Malaysia Model II,” in Ichimura and Matsumoto (eds.), *Econometric Models of Asian-Pacific Countries*, Springer-Verlag, 1993.
(7) 「国際競争力からみた為替レート——韓国と台湾のケース」高木保興・猪木武徳(編)『発展途上国と日本』同文館、1993。
(8) “South Asia and Japan: Prospects for Future Cooperation,” (共著) in S. P. Gupta, William E. James, and Robert K. McCleery (eds.), *South Asia as a Dynamic Partner*, MacMillan India Ltd., 1994.
(9) 「日本の対ASEAN直接投資とASEANとの産業内貿易の発展」石垣健一・永谷敬三(編著)『環太平洋経済の発展と日本』勁草書房、1995。
(10) “Prospects for Asian Economic Integration,” in S. Nishijima and P. H. Smith (eds.), *Cooperation or Rivalry?* Westview, 1996.
(11) “Preparing the Way for Development Cooperation in APEC: Jumping the Aid Administration and Policy Hurdles,” (共著) in Andrew Elek (ed.), *Building an Asia-Pacific Community: Development Cooperation within APEC*, The Foundation for Development Cooperation, 1997.
(12) *Japan: Why It Works, Why It Doesn't*, (共編著) University of Hawai'i Press, 1997.
(13) 『アジア経済研究』研究叢書48, 神戸大学経済経営研究所, 1998.
(14) *Asia-Pacific Economic Linkages*. (共編著) Pergamon, 1999.
(15) “Economic Development in China and Its Implications to Japan,” (共著) in Magnus Blomstrom, Byron Gangnes, and Sumner La Croix (eds.), *Japan's New Economy: Continuity and Change in the Twenty First Century*, Oxford: Oxford University Press, 2001.
(16) “Motives for Japanese DFI: Survey, Analysis, and Implications in Light of the Asian Crisis,” (共著) *Journal of Asian Economics*, 10 (1), 1999.
(17) “Regional Integration in Asia,” (共著) in Kasrow Fatemi (ed.), *The New World Order*, Elsevier Press, 2000.
(18) 「シンガポール経済はまぼろしか?——生産性分析の新しい試み」(共著)『アジア・アフリカ地域研究』第2号, 2002.
(19) “Population and Globalization,” (共著)『東南アジア研究』40 (3), 2002.
(20) “Is ‘China Fear’ Warranted? Perspectives from Japan’s Trade and Investment Re-

relationships with China,” *Asian Economic Papers*, 2 (2), 2003.

浦野真理子 (客員 2004年4月1日～2005年3月31日)

1. 津田塾大学学芸学部, 1989.
2. ジョージタウン大学 Ph. D., 2002.
3. インドネシア政治, 比較政治学, 政治思想史
4. (1) インドネシアの地方分権化と地方紛争
(2) 特に民族・宗教など文化的シンボルを旗印としたインドネシアの社会運動

(1)国家の政策と社会運動が相互にどのように関連しあっているか, (2)宗教や民族などの文化シンボルやイデオロギーなどの理念領域が, 政治経済分野における人間の行動にどのように影響しているか, などの問題を, インドネシアをフィールドとして考察することに関心を持っている。

カリマンタンを中心に, おもにダヤク人の社会運動を研究の対象としている。1997年から1999年にかけて東西カリマンタンで行ったフィールド・リサーチのデータをもとに, 住民の所属宗教(プロテスタント系キリスト教とカトリック系キリスト教)の違いにより, 地域住民の間に発展した社会運動のイデオロギーや活動組織の性質が大きく異なってきていることを考察した。現在は, インドネシアでのフィールド・リサーチのデータと, ラテン・アメリカなど他地域におけるケース(特に「先住民」と呼ばれる人々の社会運動とカトリックおよびプロテスタント教会との関わり)との比較を試みている。

また, 特に最近では, 1998年のスハルト大統領退陣後の民主化の一環として進められているインドネシアの地方分権化の過程が, 土地と自然資源をめぐる, 民族・宗教間および住民と森林開発会社との間の地域紛争の勃発にどのような影響を与えているかを考察している。

5. 1992年に津田塾大学に提出した修士論文では, 17世紀イギリスにおける農民運動の思想的背景を扱った。この間, 熱帯林問題を扱う環境保護団体を通じてインドネシアを訪問し, またインドネシア研究者と交流する機会が与えられた。このとき, 漠然とはあるが, 思想的な問題が現実のこととして起こっているインドネシアに強い興味を感じた。これが, その後, 1994年から米国ジョージタウン大学での勉強をはじめたあと, 博士論文のために1997年9月から1999年12月ま

で, インドネシアの東カリマンタンを中心とする農村でのフィールド・リサーチを行うきっかけとなった。その後, 2002年8月にジョージタウン大学を卒業し, 2003年4月から現在にいたるまで札幌の北星学園大学経済学部でアジア経済などの科目を教えている。

6. (1) 「ジェラード・ウィンスタンリの思想——反動的との評価への反論を中心に (上)」『国際関係学研究』(津田塾大学) No. 19 別冊, 1993.
(2) 「インドネシアの森林と日本の木材輸入」『“開発”をひらく——草の根から見たインドネシアの開発と日本』(INGI 神奈川シンポジウム報告書), 日本インドネシア NGO ネットワーク, 1993.
(3) 「ジェラード・ウィンスタンリの思想——反動的との評価への反論を中心に (下)」『国際関係学研究』(津田塾大学), No. 20 別冊, 1994.
(4) “The Role of Customary Institutions in Adjusting Local Household Structure into the Modern State System,” paper presented at Midwest Political Science Association, Annual Meeting, Chicago, Illinois, April 27–30, 2000.
(5) “Cultural Symbols and Collective Action of Peasants: A Case Study from East Kalimantan, Indonesia,” paper presented at New York Conference of Association for Asian Studies, Annual Meeting, Albany, New York, October 20–21, 2000.
(6) “Reinventing *Adat*: Framing of Cultural Symbols by Peasants and State in Competition over Land Ownership: A Case Study from East Kalimantan, Indonesia,” paper presented at Association for Asian Studies, Annual Meeting, Chicago, Illinois, March 20–21, 2001.
(7) “Framing Indigenous Identities: State, Church and Peasant Resistance in Kalimantan, Indonesia,” paper presented at American Anthropological Association, Annual Meeting, Washington, DC., November 28–December 2, 2001.
(8) “Appropriation of Cultural Symbols and Peasant Resistance Movements to Timber Industry in East and West Kalimantan, Indo-

nesia,” paper presented at the Association for Asian Studies, Annual Meeting, Washington, DC., April 4-7, 2002.

(9) “Appropriation of Cultural Symbols and Peasant Resistance: A Case Study from East Kalimantan, Indonesia,” Ph. D. Dissertation, Georgetown University, 2002.

(10) “Constraints on Counter-Hegemonic Efforts of Subaltern Elites: A Case Study from Peasant Resistance to Timber Industry in East Kalimantan, Indonesia,” paper presented at the 2002 Annual Meeting of American Political Science Association, Boston, Massachusetts, August 29-September 1, 2002.

(11) “Inventing Tradition: Reinvention of *Adat* by the State and Challenging Actors in Colonial and Modern Indonesia,” paper presented at the Asian Studies Conference Japan, Sophia University, Tokyo, June 21-22, 2003.

岡 通太郎 (2004年4月1日～2005年3月31日)

1. 明治大学商学部, 1994.
2. 明治大学農学修士, 2001.
3. 農業経済学, インド地域研究
4. 現代インド農村における経済変容

現代インド農村における経済活動が、農業技術の進歩あるいは非農業部門を含んだ経済発展によって、いかなる変容を遂げているかを研究している。インド農村にはカーストを軸とする社会関係が存在しており、その変容は複雑である。例えば非農業部門の雇用機会拡大が農業労働者の賃金を上昇させるように作用したかといった考察には、パトロン・クライアントのような社会関係やそれを基盤とした金融・保険制度を分析することが求められる。当面は事例村の一次データをもとに農村経済の実態解明を試み、今後の広域研究の礎石を作りたいと考えている。

5. 1994～98年の商社勤務を経て、2001年3月明治大学農学修士、2004年3月ASAFAS博士課程単位取得退学の後、同年4月より日本学術振興会特別研究員となり、東南アジア研究所で研究に従事する。
6. (1) 「インドのOF計画における県連合会の位置

——プネー県牛乳生産者協同組合連合会を事例として」『日本農業経済学会論文集』2000.

- (2) 「解題・翻訳：インド酪農の発展：回顧と展望」『のびゆく農業』農政調査委員会, 2002. (原題：Katar Singh and Virendra P. Singh, *Dairy Development in India: Retrospect and Prospect*, Research Paper 15, Institute of Rural Management Anand, 1998.)
- (3) 「インドにおける改良牛普及格差の要因分析——グジャラート州中部村落内の社会経済関係からの考察」『アジア経済』45(2), 2004.

遠藤 環 (2004年4月1日～2007年3月31日)

1. 京都大学法学部, 1999.
2. 京都大学経済学修士, 2001.
3. 地域経済学
4. バンコクにおけるインフォーマル経済・都市経済論

グローバル化時代に入り、タイにおいても都市の産業構造や労働市場は、大きく変化しつつあり、住民の労働や生活にも大きな影響を与えている。本研究の目的は、グローバル化時代におけるバンコクの構造変化と、それが特に都市の底辺層の「労働」と「生活」に与える影響を明らかにすることである。近年、「インフォーマルセクター」のみでなく、従来フォーマルセクターとされてきた部門でも、雇用の不安定化などが進行している。本研究では、「実態」調査（都市コミュニティにおける調査、その他）を中心に、都市の底辺層から、「モノ」「カネ」「ヒト」の都市の中（一部、外）での循環を把握し、多極化するバンコクの重層的な構図を描くことにつなげたいと考えている。

5. 日本学術振興会特別研究員（2001年4月～2004年3月）、チュラロンコン大学社会問題研究所客員研究員（「指導委託」による。2003年6月～）を経て、2004年4月より学術振興会特別研究員（PD）。
6. (1) 「タイにおける都市貧困政策とインフォーマルセクター論——二元論を越えて」『アジア研究』49(2), 2003.
- (2) “Promotional Policies for the Urban Informal Sector in Thailand: Analyzing from the Perspective of Policies for the Urban Poor,” Kyoto University, Economic Society Ph. D. Candidates’ Monograph Series No. 200212006,

2002.

- (3) 第5章;第11章 (訳)『必要の理論』山森亮他監訳, 劉草書房, 2004. (原題: Len Doyal and Ian Gough (著), *A Theory of Human Need*, The Guilford Press, 1991.)

2. 地域研究情報ネットワーク部

柴山 守

1. 立命館大学理工学部, 1970.
2. 京都大学工学博士, 1991.
3. 地域情報学, 人文情報学
4. (1) 情報技術の歴史・文化・地域研究への応用
(2) 多言語を含むデータベース開発, デジタルアーカイブ
(3) 画像処理, 古文書文字認識システムの高精度化
(1)は, コンピュータや情報技術を歴史, 文化, 地域研究へどのように応用するかという研究で, 沖縄歴史情報研究, 大坂町触の SGML (Standard Generalized Markup Language)/XML (eXtensible Markup Language) 化, 正倉院文書の復元過程記述などにおいて, 情報資源の蓄積, 提供方式に関する研究とシステム開発, テキスト記述・語彙分析, XML によるドキュメント構造解析を行う。最近では, 地理情報システム (Geographical Information Systems) 技術を歴史・文化・地域研究へ応用する研究を進め, 主に近世日本と東南アジア諸国間交易を GIS で探求し, 3次元表現, 可視化する試みに興味をもつ。(2)は, タイ語三印法典のデータベース化, 分散データベースの統合検索を実現する情報検索標準 Z 39.50 の歴史・文化・地域研究関連データベースへの適用, 近世古文書等のデジタルアーカイブ, 電子図書館に関する研究である。(3)は, つづけ字, くずし字を含む古文書文字認識, 画像処理に関する研究で, 古文書翻刻支援システム, 電子辞書の構築を進める。
5. 1970~82年, 京都大学大型計算機センター勤務を経て, 1982年東南アジア研究センター助手に配置換。1988年, 大阪国際大学助教授に就任。1993年, 同大学教授。1996年, 大阪市立大学教授に転任し, 学術情報総合センター勤務。2003年, 京都大学東南アジア研究センター教授に就任。

2004年4月, 京都大学東南アジア研究所教授。

この間, 1982年から歴史・文化・社会科学へのコンピュータ応用に関する研究を進め, 計量経済モデルシステムに関する研究, タイ語三印法典コンピュータ総辞索引及びデータベース化に関する研究を行う。1995年から5年間, 沖縄の歴史情報研究に従事し, その後, 近世大坂を中心にした古文書群のデジタルアーカイブと Web による提供の研究を進めた。2001年から, UC Berkeley ECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative) プロジェクト, 台湾中央研究院 PNC (Pacific Neighborhood Consortium), JVGC (Japan Vietnam Geoinformatics Consortium) に参加し, GIS の地域研究, 歴史・文化研究への応用に関する活動を進めている。

6. (1) 『情報処理入門講座 PL/I 基礎編』(共編著) コロナ社, 1983.
(2) “An Econometric Link System for the East and Southeast Asian Countries, Japan and the United States,” 『東南アジア研究』 22 (3), 1984.
(3) 『情報処理入門講座 PL/I 応用編』(共編著) コロナ社, 1985.
(4) “A Comparative Study of the Characteristics of Input Methods for Thai,” in *Proceedings of the Regional Symposium on Computer Science and its Application*, KMITL, Thailand, 1986.
(5) “Implementation of an Intelligent Thai Computer Terminal,” *Journal of Information Processing* (情報処理学会欧文誌), 8 (4), 1986.
(6) *The Computer Concordance to the Law of the Three Seals*, (共編著) Amarin Publications, Thailand, 5 vols., 1990.
(7) “Thai Morphological Analyses Based on the Syllable Formation Rules,” *Journal of Information Processing* (情報処理学会欧文誌), 15 (4), 1993.
(8) 『X 11 による画像処理基礎プログラミング』技術評論社, 1994.
(9) 「ビデオ画像による古文書の効率的画像入力法と自動接続処理」『情報処理学会論文誌』 40 (3), 1998.
(10) 「古文書画像の2値化レベル制御による対話型文字分割とその評価」(共著)『電気学会論文

誌 C』118-C(4), 1998.

- (11) "Implementation of Multimedia Workstation Using Open Source Software," *Journal of Geoinformatics*, 12 (2), 2000.
- (12) 「正倉院文書復原過程の XML/XSLT による記述」(共著)『情報知識学会誌』11 (4), 2002.
- (13) 「近世資料データベースと Z 39.50 標準による統合検索」『大阪市立大学学術情報総合センター紀要』3, 2002.
- (14) 「類似文字検索機能をそなえた電子くずし字辞典の開発」(共著)『情報処理学会研究報告』2002-CH-54, 2002 (23), 2002.
- (15) 「古文書を対象にした文字認識の研究」『情報処理』43 (9), 2002.
- (16) 「文字切出しを前提としない古文書標題認識」(共著)『情報処理学会研究報告』2003-CH-57, 2003 (5), 2003.
- (17) "Digital Archives Using XML Description and Application to Historical Resources," in *Proceedings of the Sixth REKIHAKU International Symposium*, 2003.
- (18) 「n-gram と OCR による定型表現がある古文書の文字の推定」(共著)『情報処理学会研究報告』2003-CH-58, 2003 (12), 2003.
- (19) 「メタデータによるデータベースの機関間連携の実現——人文科学データ共有のための標準化」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』2003 (21), 2003.
- (20) 「正倉院文書の情報化と復原」(共著)『正倉院文書研究』9, 吉川弘文館, 2003.

五十嵐忠孝

1. 東京大学医学部, 1970.
2. 東京大学保健学修士, 1972.
3. 人類生態学
4. (1) 小人口学
(2) 栄養と生業機構
5. 1975 年, 東京大学医学部保健学科助手に採用される。1982 年, 群馬大学医学部助教授に昇任, 1984 年, 東南アジア研究センターに配置換。2004 年 4 月, 東南アジア研究所助教授。

1970 ~ 73 年, トカラ列島でヒトの個体群生態学的調査, 1974 ~ 75 年, 韓国の一農村で人口移動の調査, 1979 年以降, インドネシア西ジャワ州のスンダ人村落で小人口学, 栄養と生業機構に

関する調査などに従事, 近年比較の観点からバリ島農村社会に調査の比重を移しつつある。

6. (1) "Change in Daily Activity Patterns during the Ramadan in an Islamic Society," in *Proceedings of the Second International Symposium on Asian Studies, 1980*, Vol. II, Asian Research Service, Hong Kong, 1981.
- (2) 「個人年齢の推定方法に関する若干の覚え書き——西部ジャワ・スンダ人村落での調査から」『東南アジア研究』20 (2), 1982.
- (3) "Seeking the Dates of Birth of Children: An Age-Estimation Method that Combines Dental Age with Indigenously Expressed "Time of Birth" for Use in Priangan, West Java," in *Proceedings of the Fourth International Symposium on Asian Studies, 1982*, Vol. III, Asian Research Service, Hong Kong, 1983.
- (4) 「漁撈と農耕の比較生態——西部ジャワ・プリアガン地方での調査から」大塚柳太郎(編)『生態人類学』至文堂, 1983.
- (5) "Locality-Finding in Relation to Fishing Activity at Sea," in Bela Gunda (ed.), *The Fishing Culture of the World: Studies in Ethnology, Cultural Ecology and Folklore*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1984.
- (6) 『インドネシア人類生態学調査集成』(共編)日産科学振興財団, 1984.
- (7) 「西ジャワ・プリアガン高地における水稻耕作——若干の人類生態学的観察」『農耕の技術』7, 1984.
- (8) 「西ジャワ・プリアガン高地の食糧資源と人口」小石秀夫・鈴木継美(共編)『栄養生態学』恒和出版, 1984.
- (9) 「インドネシアの人口, 出生, 死亡」『医学のあゆみ』132, 1985.
- (10) *Human Ecological Survey in Rural West Java in 1978 to 1982: A Project Report*, (共編著) Nissan Science Foundation, Tokyo, 1985.
- (11) "Some Biosocial Variables That May Account for Fertility Patterns in the Sundanese Society," in *Health Ecological Survey in Indonesia in 1983/84*, Part 1, Department of Public Health, Gunma University, 1985.

- (12) “Biosocial Variables Affecting Sundanese Fertility, West Java,” *Man and Culture in Oceania*, 3, 1987.
- (13) 「農作業・季節・星——西ジャワ・プリアンガン高地における畑地耕作をめぐる季節性と農作業のタイミング」『東南アジア研究』25 (1), 1987.
- (14) 「西ジャワ・プリアンガン地方のスンダ人農民社会における早婚・多産の文化・社会的背景」『東南アジア研究』25 (4), 1988.
- (15) 「ヒト・社会・出生間隔——東南アジアにおける具体像」矢野暢 (編)『東南アジア学の手続』(講座・東南アジア学第1巻) 弘文堂, 1990.
- (16) 「早婚・高出生力・文化——プリアンガン・スンダ人社会の事例」前田成文 (編)『東南アジアの文化』(講座・東南アジア学第5巻) 弘文堂, 1991.

ソン シャンフエン
宋 現 鋒

1. 中国鉱業大学煤田地質学部, 1992.
2. 中国科学院地理研究所, 自然地理学博士, 1998.
3. リモートセンシング・地理情報システム
4. (1) 地名-位置データベース構築による Web 地名検索システムの開発
(2) 空間情報科学のフリーオープンソースソフトウェアに関する開発利用
私の研究分野はリモートセンシングおよび地理情報システム科学であり, 主に自然資源管理および環境を観測する空間技術に関する地理情報システムの開発, 応用に従事している。2000年から, 空間情報科学におけるフリーオープンソースソフトウェアに関する開発に従事している。また, フリーオープンソースソフトウェア (UMN Mapserver, PostGIS/PostgreSQL, GRASS/postGRASS, Isite 等) を利用して, 空間情報データベース, WEB-GIS システムを開発した。
5. 1998年9月~2000年3月, 中国科技促進経済投資公司項目部研究員。2000年4月~02年3月, 日本学術振興会外国人特別研究員として, 京都大学東南アジア研究センターで研究に従事。2002年4月~03年3月, 京都大学東南アジア研究センター助手。2003年4月~04年4月, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究センター (東南アジア研究所) 21世紀

COE 研究員。2004年5月, 京都大学東南アジア研究所助手。これまでに参加し, また現在参加中の研究プロジェクトは以下のとおり。

- 科学技術部門における投資の評価 (1998~2000年)
 - 東南アジア研究に関するメタデータベースの構築 (2000~03年)
 - ラオス北部ナムバング流域のウドム村の土地利用変化 (2002~03年)
 - 東南アジアインタラクティブアトラス西暦500~1500年の構築 (2001~04年)
 - 地名-位置データベース構築による Web 地名検索システムの開発——東南アジア・カンボジアを対象として (2004~05年)
6. (1) “Towards Chaining Geo-Computational Web Applications across Multiple Sites,” (共著) in *Proceedings of The 20th International Cartographic Conference* (Volume 4), Beijing, China, August 6-10, 2001.
 - (2) “Integrating Geographic Information for Area Study under a Cyberspace: Experiences and Perspectives of Southeast Asian Studies,” (共著) in *Proceedings of Nara Symposium for Digital Silk Roads, Nara, Japan, Dec. 10-12, 2003*.
 - (3) “Integrating Geographic Collection Database Repositories with a Z 9.50-Compliant Gateway,” (共著) *Asian Journal of Geoinformatics*, 4 (2), 2003.
 - (4) “Process of Land Use Changes in Northern Laos: A Village-level Study in the Nam Beng River Basin,” (共著) 『熱帯農業』47 (別号2), 2003.

北村 由美

1. 関西大学文学部, 1996.
2. ハワイ大学図書館情報学修士 (MLIS), 1999.
3. 図書館情報学
4. (1) 東南アジア諸国における, 識字教育およびインフォメーション・リテラシー教育と図書館の役割
図書館には資料保存機関としての役割と, 社会教育施設としての役割がある。社会教育施設としての主な役割では, 従来から行われてきた識字教育と, その延長線上にあるインフォメーション・

リテラシー教育への図書館の関与が挙げられる。東南アジア諸国における、図書館システムの構造と位置付け、そして各種図書館が識字とインフォメーション・リテラシー教育の意味をいかに定義づけ、どのように実践しているかに興味を持っている。

(2) 引用文献に見られる東南アジア研究の研究動向分析

『東南アジア研究』創刊号からの収録論文における参考文献の内容を検討することにより、日本の東南アジア研究の研究動向を図書館学的に分析しようと試みている。

5. Center of Excellence in Disaster Management and Humanitarian Assistance (1999～2000) インフォメーション・アナリストを経て、2001年東南アジア研究センター助手。2004年4月、東南アジア研究所助手。
6. (1) 「インフォメーション・アナリストの役割——Center of Excellence in Disaster Management and Humanitarian Assistance の情報部門で」『図書館の学校』26, 2002.
- (2) Japanese Librarians Learning from American School Librarianship,” (共著) *Multimedia School* 9 (3), 2002.
- (3) 「コミュニティに向かう大学図書館人——東北タイマハサラカム大学図書館の実例」『図書館の学校』32, 2002.
- (4) 「図書館の扉の向こう——タイの大学図書館から学ぶこと」『東南アジア研究』40 (2), 2002.
- (5) 「検索システムの評価」及び「インターネットの検索技術」(共著) 根本彰 (監修) 『インターネット時代の学校図書館——司書・司書教諭のための「情報」入門』。東京電機大学出版局, 2003.
- (6) 「京都大学東南アジア研究センターにおけるコレクション形成と資料収集活動」『史資料ハブ』No. 1, 2003.
- (7) 「インフォメーション・パワーのための地域の参加」(訳) 『インフォメーション・パワーが教育を変える！ 学校図書館の再生から始まる学校改革』足立正治・中村百合子監訳：高稜社, 2003. (原題：“Community Engagement for Information Power,” in *The Information-Powered School*, by Public Education Net-

work, American Association of School Librarians, Chicago: American Library Association, 2002.)

木谷 公哉

1. 京都産業大学工学部, 1998.
2. 京都産業大学工学研究科修士, 2000.
3. 形状処理工学
4. (1) 情報資源共有化のための情報基盤システム設計と構築
- (2) 既存の Web システムへのアクセシビリティ適応手法の研究
- (3) データベース等情報発信システムの統括管理システムの設計と構築

情報資源の共有化はもはや避けては通ることのできないものとなり、様々な分野でその試みがなされている。いくつかの技術が標準的に使われているが、いまだまとまった手法が存在しない。しかしながら数カ月先には技術的に不可能だったものが可能になる現在においては、(1)のシステムの構築をする上でその動向を常に見定めておく必要がある。また情報発信をしていく上でバリアフリーを考慮に入れた設計をする機運が高まりつつあるが、既存のシステムへの適応はすでに構築した設計手法が多種多様であり非常に難しい問題である。そこで(2)の研究では、所内の既存 Web システムを元に、まずは聴覚を主体においた場合の適応における手順や手法の発見を図ろうとしている。(3)は、(1)(2)を東南アジア地域でも導入可能にするため、オープンソースを主体としたシステム構成をし、また統括的にシステムを管理できるようにする手法の研究を行っている。

さらに、円滑でかつ安定した情報伝達手段を確保するために、情報と伝達を妨げるコンピュータウィルスや SPAM 等の回避手法等、情報セキュリティ保護に関して興味を持っており、いくつかの手法を試している。

5. 1999年東南アジア研究センターに非常勤職員として採用され、2000年同センター助手として着任。2004年4月、東南アジア研究所助手。

1995～2000年京都産業大学でコンピュータ補助員として大学内のコンピュータに関するサポート業務に携わる。1997年同大学で緊急災害情報システムの構築を担当する。1999年同大学の大学院在学中に京都大学東南アジア研究センターに

非常勤職員として採用され、情報処理機能の整備・改善、セキュリティ対策を実施するとともにセンタースタッフへのコンピュータサポートを行った。2000年3月大学院卒業後、4月よりセンター助手になってからは、東南アジア研究センターの全建物、室内にいたるまでのネットワーク・システムの高速度化と整備、海外連絡事務所の情報システムの整備・改善、さらに様々な情報処理システムの導入・管理・運営、および安全なネットワーク運用を行いつつ、研究支援のための情報処理関連サポート、情報サービス支援のための情報技術関連の幅広い情報収集および実験を行っている。

6. (1) 「画像のフォーマット変換」京都産業大学論文, 1998.
- (2) 「海外利用を主眼としたモバイルコンピュータの一般的な使用方法マニュアル」東南アジア研究センター, 1999.
- (3) 「動画画像の再構築」京都産業大学修士論文, 2000.
- (4) 「サーバーへの暗号技術を用いた遠隔操作マニュアル」東南アジア研究センター, 2000.
- (5) 「情報処理室の過去と未来」東南アジア研究センター, 2000.
- (6) 「KUINS-III ネットワーク設計」東南アジア研究センター, 2001.
- (7) 「システム運用上の情報セキュリティポリシー」東南アジア研究センター, 2003.
- (8) 「どんなコンピュータでも対応できる万全の故障機器修復体制」, 『UNIX USER』(SOFT-BANK Publishing の月刊誌) 2003年12月号, 2003.
- (9) 「超ローコストで実現! タイ語図書データベース構築物語」, 『UNIX USER』2004年1月号, 2003.

米沢真理子

1. 京都大学文学部, 1972.
2. 京都大学文学修士, 1974.
4. (1) 季刊誌『東南アジア研究』の特質と変遷

編集に携わっている『東南アジア研究』は40年以上の歴史を持ち、創刊当時と現在では掲載原稿の内容は、かなり変化している。他の地域研究誌とも比較しながら、その特質と変遷をできる限り明らかにしたい。

(2) 高度情報化時代における出版

近年加速度的に高度化した情報通信・処理システムによって、出版も大きく変化せざるを得ない。活字から電子メディアへの移行は、単に表現手段の変化というにとどまらず、思考や記憶の様式、他者との関係性、世界観を根底から変えてしまう構造的な転換である。勿論、印刷物が完全に廃棄されて電子メディアへ移るという発展段階的なプロセスではなく、一方に他方が重なっていく重層的なプロセスではあるが、電子メディアによる情報交換・情報発信を視野に置きつつ、日本と東南アジア諸国における出版の現状と問題点について考えてみたい。

5. 1974年、京都大学東南アジア研究センターに文部事務官として採用される。1987年、資料部編集室助手に配置換え。2004年4月、京都大学東南アジア研究所助手。

ド ナ ア モ ロ ソ
Donna J. AMOROSO

1. ラファイエット大学 (国際事情), 1982.
2. コーネル大学 Ph. D. (東南アジア歴史学), 1996.
3. 歴史学
4. (1) マレーシアおよびフィリピンにおける国家の歴史
- (2) マレーシアにおけるナショナリズムとポスト植民地主義

オンラインレビュージャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* (KRSEA) の編者として、学術的にも一般的にも新しい話題 (政治, 森林再生, 国史編纂, 地域経済統合, イスラーム) による企画・編集に携わってきた。その中で、このウェブサイトの内容と機能の充実を図るとともに、東南アジア地域の研究者のみならず Public Intellectuals (公共領域で活躍する知識人) とのネットワークを広げることで、マネージング・エディターとしての職責も果たしている。2003年秋から2004年はじめにかけては、活動の拠点をバンコクに移し、ネットワークの一層の拡大に努めた。2003年11月には、バンコクで開催されたPNC年次会議 “Cultural Heritage and Collaboration in the Digital Age” に参加した。

現在の研究上の関心は、比較植民地主義、国家開発、ナショナリズムである。その成果をマレーシアとフィリピンで開催された国際会議で発表し、

- Patricio N. Abinales との共著による教科書原稿を完成させた。これは、アメリカとフィリピンで出版予定である。また、現在“Malaya in the Empire: Traditionalism and the Ascendency of the Ruling Class in Colonial Malaysia, 1874–1946” というタイトルで、本の原稿を執筆中である。
5. 1990～92年コーネル大学講師, 1992～93年コーネル大学刊 *Southeast Asia Program Publications* の編集助手, 94年同上編集長代理。1994～99年ライト州立大学助教授, 2000～01年東南アジア研究センター外国人研究員。2001年東南アジア研究センター Editorial Fellow。2004年4月, 東南アジア研究所 Editorial Fellow。
 6. (1) “Dangerous Politics and the Malay Nationalist Movement, 1945–47,” *South East Asia Research*, 6 (3), 1998.
 - (2) “Inheriting the ‘Moro Problem’: Muslim Authority and Colonial Rule in British Malaya and the Philippines,” in Julian Go and Anne Foster (eds.), *The American Colonial State in the Philippines in Global Perspectives*, Durham and London: Duke University Press, 2003.
 - (3) “Making Sense of Malaysia,” *Kyoto Review of Southeast Asia* 3, 2003.
<http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp/issue/issue2/index.html>
 - (4) *State and Social Forces in the Philippines* (共著). Lanham, MD: Rowman & Littlefield, forthcoming.

第8章 出版活動

東南アジア研究所では、東南アジア地域研究に関する様々な出版物を刊行している。1963年創刊の季刊学術誌『東南アジア研究』は、レフェリー制度のもとに学内外の東南アジア地域に関する重要な研究成果を掲載してきた。2004年4月現在41巻4号(通算167号)を数え、所収論稿は膨大な数に上る。

また東南アジア研究所では、東南アジア地域研究の発展に寄与するオリジナルな学術研究の発表の場として、以下の4種類の叢書を刊行している。

叢書名(言語)	出版社
東南アジア研究叢書(和文)	創文社
東南アジア研究叢書(英文) Monographs of the Center for Southeast Asian Studies	University of Hawai'i Press
地域研究叢書(和文)	京都大学学術出版会
地域研究叢書(英文) Kyoto Area Studies on Asia	Kyoto University Press; Trans Pacific Press (Melbourne)

東南アジア研究叢書(和文)は24冊、同叢書(英文: Monographs of the Center for Southeast Asian Studies)は20冊、地域研究叢書(和文)は14冊、同叢書(英文: Kyoto Area Studies on Asia)は8冊を刊行してきた。2000年4月より外部からの投稿も受け付けている。

さらに、2002年には、和英ほか東南アジア諸言語により、東南アジア地域に関する最新情報をレビューするオンライン・ジャーナル(*Kyoto Review of Southeast Asia*)を立ち上げ、既に5号を刊行した。

研究報告書シリーズは、シンポジウムの報告書、科学研究費補助金による海外学術調査の報告書、その他の研究奨励金を受けて行った研究の報告書、共同研究の中間的な成果、外国人研究員の研究報告書など各種のものを含んでいる。現在101冊を数える。

2004年4月現在で、研究所が刊行した東南アジア研究叢書(和文, 英文), 地域研究叢書(和文, 英文), 『東南アジア研究』(40巻1号以降), *Kyoto Review of Southeast Asia* (2号以降) および研究報告書シリーズの一覧を掲げる。なお、『東南アジア研究』は、研究所のホームページ(<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>)で電子的な複製(PDFファイル)としても提供している。現在利用いただけるのは最新号から遡って26巻1号までであるが、国立情報学研究所の支援により、近く全巻提供の予定である。

1. 研究叢書等

A. 東南アジア研究叢書（和文）

1. 棚瀬 襄爾. 1966. 『他界観念の原始形態』
2. 矢野 暢. 1968. 『タイ・ビルマ現代政治史研究』
3. 本岡 武. 1968. 『東南アジア農業開発論』
4. 坪内 良博; 坪内 玲子. 1971. 『離婚——比較社会学的研究』 創文社.
5. 飯島 茂. 1971. 『カレン族の社会・文化変容』 創文社.
6. シュトルツ. 1974. 『ビルマ——地誌・歴史・経済』 野上裕生（訳）. 創文社.
7. 市村 真一 編. 1974. 『東南アジアの自然・社会・経済』 創文社.
8. 石井 米雄 編. 1975. 『タイ国——ひとつの稲作社会』 創文社.
9. 石井 米雄. 1975. 『上座部仏教の政治社会学』 創文社.
10. 本岡 武. 1975. 『インドネシアの米』 創文社.
11. 市村 真一 編. 1975. 『東南アジアの経済発展』 創文社.
12. 口羽; 坪内; 前田 編. 1976. 『マレー農村の研究』 創文社.
13. 西原 正 編. 1976. 『東南アジアの政治的腐敗』 創文社.
14. エクスタイン他 編. 1979. 『中国の経済発展』 市村真一（監訳）. 創文社.
15. 渡部 忠世 編. 1980. 『東南アジア世界——地域像の検証』 創文社.
16. 水野 浩一. 1981. 『タイ農村の社会組織』 創文社.
17. 土屋 健治. 1982. 『インドネシア民族主義研究——タマン・シスワの成立と展開』 創文社.
18. 高谷 好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展——メナム・デルタの研究』 創文社.
19. 小林 和正. 1984. 『東南アジアの人口』 創文社.
20. 石井 米雄 編. 1986. 『東南アジア世界の構造と変容』 創文社.
21. 桜井由躬雄. 1987. 『ベトナム村落の形成——村落共有田＝コンディエン制の史的展開』 創文社.
22. 福井 捷朗. 1988. 『ドンデーン村——東北タイの農業生態』 創文社.
23. 口羽 益生 編. 1990. 『ドンデーン村の伝統構造とその変容』 創文社.
24. 山田 勇. 1991. 『東南アジアの熱帯多雨林世界』 創文社.

B. 東南アジア研究叢書（英文：Monographs of the Center for Southeast Asian Studies）

1. SATO, Takashi. 1966. *Field Crops in Thailand*. Kyoto: CSEAS.
2. WATABE, Tadayo. 1967. *Glutinous Rice in Northern Thailand*. Kyoto: CSEAS.
3. TAKIMOTO, Kiyoshi, ed. 1968. *Geology and Mineral Resources in Thailand and Malaya*. Kyoto: CSEAS.
4. KAWAGUCHI, Keizaburo; and KYUMA, Kazutake. 1969. *Lowland Rice Soils in Thailand*. Kyoto: CSEAS.
5. KAWAGUCHI, Keizaburo; and KYUMA, Kazutake. 1969. *Lowland Rice Soils in Malaya*. Kyoto: CSEAS.
6. MAEDA, Kiyoshige. 1967. *Alor Janggus, A Chinese Community in Malaya*. Kyoto: CSEAS.
7. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1975. *The Economic Development of East and Southeast Asia*. Honolulu: University Press of Hawaii.

8. NISHIHARA, Masashi. 1976. *The Japanese and Sukarno's Indonesia: Tokyo-Jakarta Relation, 1951-66*. Honolulu: University Press of Hawaii.
9. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1977. *Southeast Asia: Nature, Society and Development*. Honolulu: University Press of Hawaii.
10. KAWAGUCHI, Keizaburo; and KYUMA, Kazutake. 1977. *Paddy Soils in Tropical Asia*. Honolulu: University Press of Hawaii.
11. YOSHIHARA, Kunio. 1978. *Japanese Investment in Southeast Asia*. Honolulu: University Press of Hawaii.
12. ISHII, Yoneo, ed. 1978. *Thailand: A Rice-Growing Society*. Honolulu: University Press of Hawaii.
13. CHO, Lee-Jay; and KOBAYASHI, Kazumasa, eds. 1980. *Fertility Transition of the East Asian Populations*. Honolulu: University Press of Hawaii.
14. KUCHIBA, Masuo; TSUBOUCHI, Yoshihiro; and MAEDA, Narifumi. 1979. *Three Malay Villages: A Sociology of Paddy Growers in West Malaysia*. Honolulu: University Press of Hawaii.
15. CHO, Lee-Jay; SUHARTO, S.; MCNICOLL, G.; and MAMAS, S. G. M. 1980. *Population Growth of Indonesia: An Analysis of Fertility and Mortality Based on the 1971 Population Census*. Honolulu: University Press of Hawaii.
16. ISHII, Yoneo. 1986. *Sangha, State, and Society: Thai Buddhism in History*. Honolulu: University of Hawaii Press.
17. TAKAYA, Yoshikazu. 1987. *Agricultural Development of a Tropical Delta: A Study of the Chao Phraya Delta*. Honolulu: University of Hawaii Press.
18. TSUCHIYA, Kenji. 1988. *Democracy and Leadership: The Rise of the Taman Siswa Movement in Indonesia*. Honolulu: University of Hawaii Press.
19. FUKUI, Hayao. 1993. *Food and Population in a Northeast Thai Village*. Honolulu: University of Hawaii Press.
20. YAMADA, Isamu. 1997. *Tropical Rain Forests of Southeast Asia: A Forest Ecologist's View*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

C. 地域研究叢書 (和文 京都大学学術出版会刊)

1. 坪内 良博. 1996. 『マレー農村の20年』
2. 高谷 好一. 1996. 『「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座』
3. 立本 成文. 1996. 『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学の試み』
4. 坪内 良博. 1998. 『小人口世界の人口誌——東南アジアの風土と社会』
5. 高谷 好一 編. 1999. 『〈地域間研究の試み〉(上)——世界の中で地域をとらえる』
6. 坪内 良博 編. 1999. 『〈総合的地域研究を求めて〉——東南アジア像を手がかりに』
7. 水野 廣祐. 1999. 『インドネシアの地場産業——アジア経済再生の道とは何か?』
8. 高谷 好一 編. 1999. 『〈地域間研究の試み〉(下)——世界の中で地域をとらえる』
9. 坪内 良博 編. 2000. 『地域形成の論理』
10. 原 洋之介 編. 2000. 『地域発展の固有論理』

- | | |
|------------|--------------------------------------|
| 11. 加藤久美子. | 2000. 『盆地世界の国家論——雲南, シブソンパンナーのタイ族史』 |
| 12. 林 行夫. | 2000. 『ラオ人社会の宗教と文化変容——東北タイの地域・宗教社会誌』 |
| 13. 立本 成文. | 2000. 『家族圏と地域研究』 |
| 14. 玉田 芳史. | 2003. 『民主化の虚像と実像——タイ現代政治変動のメカニズム』 |

D. 地域研究叢書 (英文: **Kyoto Area Studies on Asia**)

- | | |
|--|--|
| 1. YOSHIHARA Kunio. | 1999. <i>The Nation and Economic Growth: Korea and Thailand.</i> |
| 2. TSUBOUCHI Yoshihiro. | 2001. <i>One Malay Village: A Thirty-Year Community Study.</i> |
| 3. Kasian TEJAPIRA. | 2001. <i>Commodifying Marxism: The Formation of Modern Thai Radical Culture, 1927-1958.</i> |
| 4. HAYAMI Yoko; TANABE Akio; and TOKITA-TANABE Yumiko, eds. | 2003. <i>Gender and Modernity: Perspectives from Asia and the Pacific.</i> |
| 5. HAYASHI Yukio. | 2003. <i>Practical Buddhism among the Thai-Lao: Religion in the Making of a Region.</i> |
| 6. LYE Tuck-Po; DE JONG, Wil; and ABE Ken-ichi, eds. | 2003. <i>The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspectives.</i> |
| 7. HAYAMI Yoko. | 2004. <i>Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen.</i> |
| 8. FURUKAWA Hisao, NISHIBUCHI Mitsuaki, KONO Yasuyuki, and KAIDA Yoshihiro, eds. | 2004. <i>Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigms.</i> |

1 は Kyoto University Press 刊。2 以降は Kyoto University Press と Trans Pacific Press (Melbourne) の共同出版。

E. その他の公刊図書

1. 講座・東南アジア学 (全 10 巻・別巻 1) 弘文堂.

第 1 巻 矢野 暢 編.	1990. 『東南アジア学の手法』
第 2 巻 高谷 好一 編.	1990. 『東南アジアの自然』
第 3 巻 坪内 良博 編.	1990. 『東南アジアの社会』
第 4 巻 石井 米雄 編.	1991. 『東南アジアの歴史』
第 5 巻 前田 成文 編.	1991. 『東南アジアの文化』
第 6 巻 土屋 健治 編.	1990. 『東南アジアの思想』
第 7 巻 矢野 暢 編.	1992. 『東南アジアの政治』
第 8 巻 吉原久仁夫 編.	1991. 『東南アジアの経済』
第 9 巻 矢野 暢 編.	1991. 『東南アジアの国際関係』
第 10 巻 矢野 暢 編.	1991. 『東南アジアと日本』
別 巻 矢野 暢 編.	1992. 『東南アジア学入門』
2. 講座・現代の地域研究 (全 4 巻) 弘文堂.

第 1 巻 矢野 暢 編.	1993. 『地域研究の手法』
---------------	-----------------

- 第 2 巻 矢野 暢 編. 1994. 『世界単位論』
- 第 3 巻 矢野 暢 編. 1993. 『地域研究のフロンティア』
- 第 4 巻 矢野 暢 編. 1993. 『地域研究と「発展」の論理』
3. 東南アジア研究センター 編. 1997. 『事典東南アジア——風土・生態・環境』 弘文堂.
4. TSUCHIYA, Kenji. 1992. *Demokrasi dan Kepemimpinan: Kebangkitan Gerakan Taman Siswa*. Jakarta: Balai Pustaka. (東南アジア研究叢書 (英文) No.18, *Democracy and Leadership: The Rice of the Taman Siswa Movement in Indonesia* のインドネシア語訳)
5. ISHII, Yoneo. 1993. *Sejarah Sangha Thai: Hubungan Buddhisme dengan Negara dan Masyarakat*. Bangi, Selangor, Malaysia: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia. (東南アジア研究叢書 (英文) No.16, *Sangha, State, and Society: Thai Buddhism in History* のマレー語訳)
6. NISHIHARA, Masashi. 1993. *Sukarno, Ratna Sari Dewi, dan Pampasan Perang*. Jakarta: Pustaka Utama Grafiti. (東南アジア研究叢書 (英文) No.8, *The Japanese and Sukarno's Indonesia* のインドネシア語訳)
7. FURUKAWA, Hisao. 1994. *Coastal Wetlands of Indonesia: Environment, Subsistence and Exploitation*. Kyoto University Press.
8. UEDA, Yoko. 1995. *Local Economy and Entrepreneurship in Thailand: A Case Study of Nakhon Ratchasima*. Kyoto University Press.
9. YOSHIHARA Kunito. 2003. *The Nation and Economic Growth: Korea and Thailand* (in Thai). Bangkok: Thammasat University Press. (Kyoto Area Studies on Asia No. 1, *The Nation and Economic Growth: Korea and Thailand* のタイ語訳)

2. 『東南アジア研究』(40 巻 1 号から 41 巻 4 号まで)

各報告は、コード番号・著者名・報告表題・掲載頁の順に配列されている。コード番号は、4, 5 桁目の数字が巻数を、3 桁目の数字が号数を、そして、1, 2 桁目の数字が報告の番号を表している。

40 巻 1 号 [Vol. 40, No. 1] 2002 年 6 月 [June 2002]

- 40101 Lye Tuck-Po. The Significance of Forest to the Emergence of Batek Knowledge in Pahang, Malaysia. 3-22.
- 40102 鈴木基義; 安井清子 [Suzuki Motoyoshi; and Yasui Kiyoko]. ラオス・モン族の食料問題と移住 [Food Problems and Migration among the Hmong Tribe in Laos]. 23-41.
- 40103 見市 建 [Miichi Ken]. インドネシアにおけるイスラーム左派と知識人ネットワーク [Islamic Left and Intellectual Network in Indonesia]. 42-73.
- 40104 Momose Kuniyasu; and Shimamura Tetsuya. Environments and People of Sumatran Peat Swamp Forests I: Distribution and Typology of Vegetation. 74-86.
- 40105 Momose Kuniyasu. Environments and People of Sumatran Peat Swamp Forests II: Distribution of Villages and Interactions between People and Forests. 87-108.

書評 [Book Review]

40106 Hayami Yoko. Jane Richardson Hanks; and Lucien Mason Hanks, *Tribes of the North Thailand Frontier*. 109 – 111.

現地通信 [Field Report]

40107 五十嵐忠孝 [Igarashi Tadataka]. パロロは出たか? [Did Palolo Swarming Occur?]. 112 – 113.

40 巻 2 号 [Vol. 40, No. 2] 2002 年 9 月 [Sept. 2002]

40201 吉田 信 [Yoshida Makoto]. オランダ植民地統治と法の支配——統治法 109 条による「ヨーロッパ人」と「原住民」の創出 [Colonialism and the Rule of Law: The Creation of “European” and “Inlander” in the East Indies]. 115 – 140.

40202 金子正徳 [Kaneko Masanori]. インドネシア新秩序体制下における「地方」の創造——言語・文化政策とランブン州の地方語教育 [Inventing a Regional Culture in New Order Indonesia: Language and Culture Policy and Local Language Education (*Pendidikan Bahasa Daerah*) in Lampung Province]. 141 – 165.

40203 芝原真紀 [Shibahara Maki]. タイ王国東北部農村世帯の生活構造における野生動植物採集の位置づけ——生活時間のアプローチから [Evaluating Hunting and Gathering Activities in the Life Structure of Rural Households in Northeastern Thailand Using the Time Allocation Approach]. 166 – 189.

40204 Momose Kuniyasu. Ecological Factors of the Recently Expanding Style of Shifting Cultivation in Southeast Asian Subtropical Areas: Why Could Fallow Periods Be Shortened? 190 – 199.

40205 Sukardjo, Sukristijono. Integrated Coastal Zone Management (ICZM) in Indonesia: A View from a Mangrove Ecologist. 200 – 218.

書評 [Book Reviews]

40206 濱元聡子 [Hamamoto Satoko]. Jeroen Touwen, *Extremes in Archipelago: Trade and Economic Development in the Outer Islands of Indonesia, 1900–1942*. 219 – 221.

40207 村上 咲 [Murakami Saki]. Frederick Cooper; and Ann Laura Stoler, eds, *Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World*. 222 – 224.

現地通信 [Field Reports]

40208 青山 亨 [Aoyama Toru]. 東ティモールに日は昇ったか? [Has the Sun Risen in East Timor?]. 225 – 226.

40209 小林 知 [Kobayashi Satoru]. 政党政治の実践とカンボジアの村社会 [On the Commune Election in Cambodia: The Installation of Party Politics in Rural Society]. 227 – 228.

40210 北村由美 [Kitamura Yumi]. 図書館の扉の向こう——タイの大学図書館活動から学ぶこと [Stepping out the Library Door: Learning from the Activities of Academic Libraries in Thailand]. 229 – 231.

40 巻 3 号 [Vol. 40, No. 3] 2002 年 12 月 [Dec. 2002]

Population and Globalization

40301 Abe Shigeyuki; La Croix, Sumner J.; and Mason, Andrew. Preface. 235 – 239.

- 40302 La Croix, Sumner J.; Mason, Andrew; Abe Shigeyuki. Population and Globalization. 240 – 267.
- 40303 Higgins, Matthew; and Williamson, Jeffrey G. Explaining Inequality the World Round: Cohort Size, Kuznets Curves, and Openness. 268 – 302.
- 40304 Alva, Soumya; and Entwisle, Barbara. Employment Transitions in an Era of Change in Thailand. 303 – 326.
- 40305 Tsuya Noriko O. ; and Chayovan, Napaporn. The Economic Crisis and Desires for Children and Marriage in Thailand. 327 – 349.
- 40306 Battistella, Graziano. Unauthorized Migrants as Global Workers in the ASEAN Region. 350 – 371.
- 40307 Tsay, Ching-lung. Labor Migration and Regional Changes in East Asia: Outflows of Thai Workers to Taiwan. 372 – 394.
- 40308 Leete, Richard; Mason, Andrew; Ogawa Naohiro; Mahmud, Simeen; and Chaudhury, Rafiqul Huda. Does Globalization Adversely Affect Population and Poverty? The Views of Five Panelists. 395 – 416.

40 卷 4 号 [Vol. 40, No. 4] 2003 年 3 月 [March 2003]

- 40401 Macdonald, Charles J-H. *Urug*. An Anthropological Investigation on Suicide in Palawan, Philippines. 419 – 443.
- 40402 Nguyen The Anh. Traditional Vietnam's Incorporation of External Cultural and Technical Contributions: Ambivalence and Ambiguity. 444 – 458.
- 40403 Soda Ryoji. Development Policy and Human Mobility in a Developing Country: Voting Strategy of the Iban in Sarawak, Malaysia. 459 – 483.
- 40404 伊藤正子 [Ito Masako]. タイ族・ヌン族の国内移住の構造——ベトナム東北山間部少数民族のネットワーク [The Structure of Rural-Rural Migration of the Tay-Nung People: Ethnic Minorities' Networks in the Vietnamese Northeast Mountain Area]. 484 – 501.
- 40405 鬼丸武士 [Onimaru Takeshi]. 阿片・秘密結社・自由貿易——19 世紀シンガポール、香港でのイギリス植民地統治の比較研究 [Opium, Secret Societies, Free Trade: A Comparative Study of British Colonial Rule in Nineteenth Century Singapore and Hong Kong]. 502 – 519.

現地通信 [Field Report]

- 40406 藤田幸一 [Fujita Koichi]. ミャンマー社会雑感 [Considering Myanmar Society]. 520 – 521.

41 卷 1 号 [Vol. 41, No. 1] 2003 年 6 月 [June 2003]

**Environmental Consciousness in Southeast and East Asia:
Comparative Studies of Public Perceptions of Environmental Problems
in Hong Kong (China), Japan, Thailand, and Vietnam**

- 41101 Rambo, A. Terry; Aoyagi-Usui Midori; Lee, Yok-shiu F.; Nickum, James E.; and Otsuka Takashi. Preface. 3 – 4.
- 41102 Nickum, James E.; and Rambo, A. Terry. Methodology and Major Findings of a Comparative Research Project on Environmental Consciousness in Hong Kong (China), Japan, Thailand, and Vietnam. 5 – 14.
- 41103 Lee, Yok-shiu F. Environmental Consciousness in Hong Kong. 15 – 35.
- 41104 Nickum, James E.; Aoyagi-Usui Midori; and Otsuka Takashi. Environmental Consciousness in

- Japan. 36 – 58.
- 41105 Panya, Opart; and Sirisai, Solot. Environmental Consciousness in Thailand: Contesting Maps of Eco-Conscious Minds. 59 – 75.
- 41106 Pham Thi Thuong Vi; and Rambo, A. Terry. Environmental Consciousness in Vietnam. 76 – 100.
-
- 41107 Nguyen The Anh. Village versus State: The Evolution of State-Local Relations in Vietnam until 1945. 101 – 123.

書評 [Book Reviews]

- 41108 吉原久仁夫 [Yoshihara Kunio]. Michael T. Rock, *Pollution Control in East Asia: Lessons from Newly Industrializing Countries*. 124.
- 41109 Hau, Caroline S. Resil B. Mojares, *Waiting for Mariang Makiling: Essays in Philippine Cultural History*. 125 – 127.
- 41110 藤田 渡 [Fujita Wataru]. 佐藤 仁, 『稀少資源のポリティクス——タイ農村にみる開発と環境のはざま』 [Sato Jin, *The Politics of Scarce Resources: Conservation and Development in Rural Thailand*]. 128 – 131.

現地通信 [Field Report]

- 41111 柳澤雅之 [Yanagisawa Masayuki]. ベトナムの変化の中で [Area Studies in the Vietnamese Transition]. 132 – 134.

41 巻 2 号 [Vol. 41, No. 2] 2003 年 9 月 [Sept. 2003]

- 41201 Aguilar, Jr. Filomeno V. Global Migrations, Old Forms of Labor, and New Transborder Class Relations. 137 – 161.
- 41202 Ooi, Keebeng. Three-Tiered Social Darwinism in Malaysian Ethnographic History. 162 – 179.
- 41203 Tran Duc Vien. Culture, Environment, and Farming Systems in Vietnam's Northern Mountain Region. 180 – 205.
- 41204 Fujita Wataru. Dealing with Contradictions: Examining National Forest Reserves in Thailand. 206 – 238.
- 41205 Ichikawa Masahiro. Shifting Swamp Rice Cultivation with Broadcast Seeding in Insular Southeast Asia: A Survey of Its Distribution and the Natural and Social Factors Influencing Its Use. 239 – 261.

書評論文 [Review Article]

- 41206 白石 隆 [Shiraishi Takashi]. アメリカ「帝国」, 「ならず者」国家, イスラム主義 [Empire, Rogue States, Islamism]. 262 – 266.

41 巻 3 号 [Vol. 41, No. 3] 2003 年 12 月 [Dec. 2003]

- 41301 Boonmathya, Ratana Tosakul. A Narrative of Contested Views of Development in Thai Society: Voices of Villagers in Rural Northeastern Thailand. 269 – 298.
- 41302 Barretto-Tesoro, Grace. Burial Goods in the Philippines: An Attempt to Quantify Prestige Values. 299 – 315.
- 41303 Simaraks, Suchint; Subhadhira, Sukaesinee; and Srila, Somjai. The Shifting Role of Large

Livestock in Northeast Thailand. 316 – 329.

- 41304 中西嘉宏 [Nakanishi Yoshihiro]. 未完の党=国家——ネー・ウィンとビルマ社会主義計画党 [Party-State Manque: Ne Win and the Burma Socialist Programme Party]. 330 – 360.
- 41305 森下明子 [Morishita Akiko]. スハルト体制崩壊後のインドネシア政治エリート——1999年総選挙による国会議員とはどのような人たちか [Indonesia's Political Elite after the Fall of Soeharto: The 1999 Elections to the People's Representative Council]. 361 – 385.

書評 [Book Reviews]

- 41306 Rambo, A. Terry. Jean Michaud, ed, *Turbulent Times and Enduring Peoples: Mountain Minorities in the South-East Asian Massif*. 386 – 389.
- 41307 西渕光昭 [Nishibuchi Mitsuaki]. 山崎修道監修; 小早川隆俊編著, 『新版・感染症マニュアル』 [Yamazaki Shudo, supervised; Kobayakawa Takatoshi, ed, *Infection Manual*, New Edition]. 389 – 390.
- 41308 藤田幸一 [Fujita Koichi]. 佐藤 寛編. 『援助と社会関係資本——ソーシャルキャピタル論の可能性』 [Sato Hiroshi, ed. *Aid and Social Capital: Potentials of the Concept of Social Capital*]. 390 – 392.
- 41309 吉原久仁夫 [Yoshihara Kunio]. Yuri, Sadoi, *Skill Formation in Malaysian Auto Parts Industry*. 392 – 393.

現地通信 [Field Report]

- 41310 古川久雄 [Furukawa Hisao]. オアシスの風と嵐 [Breezes Have Changed to Storms in Afghanistan]. 394 – 420.

41 巻 4 号 [Vol. 41, No. 4] 2004 年 3 月 [March 2004]

Sustainable Agro-resources Management in the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia

- 41401 Kono Yasuyuki; and Rambo, A. Terry. Preface.
- 41402 Yamada Kenichiro; Yanagisawa Masayuki; Kono Yasuyuki; and Nawata Eiji. Use of Natural Biological Resources and Their Roles in Household Food Security in Northwest Laos.
- 41403 Vityakon, Patma; Subhadhira, Sukaesinee; Limpinuntana, Viriya; Srila, Somjai; Trelo-ges, Vidhaya; and Sriboonlue, Vichai. From Forest to Farmfields: Changes in Land Use in Undulating Terrain of Northeast Thailand at Different Scales during the Past Century.
- 41404 Trelo-ges, Vidhaya; Limpinuntana, Viriya; and Patanothai, Aran. Nutrient Balances and Sustainability of Sugarcane Fields in a Mini-Watershed Agroecosystem of Northeast Thailand.
- 41405 Tran Duc Vien; Nguyen Van Dung; Pham Tien Dung; and Nguyen Thanh Lam. A Nutrient Balance Analysis of the Sustainability of a Composite Swiddening Agroecosystem in Vietnam's Northern Mountain Region.
- 41406 Sakurai Katsutoshi; Kawazu Hiwasa; Kono Yasuyuki; Yanagisawa Masayuki; Le Van Tiem; Le Quoc Thanh; Dangthaisong, Nittaya; and Trinh Ngoc Chau. Impact of Agricultural Practices on Slope Land Soil Properties of the Mountainous Region of Northern Vietnam: A Case Study in Bac Ha District, Lao Cai Province.
- 41407 Watanabe Etsuko; Sakurai Katsutoshi; Okabayashi Yukoh; Nouanthasing, Lasay; and Chanphengxay, Alounsawat. Soil Fertility and Farming Systems in a Slash and Burn Cultivation

- Area of Northern Laos.
- 41408 Ongprasert, Somchai; and Prinz, Klaus. Intensification of Shifting Cultivation by the Use of Viny Legumes in Northern Thailand.
- 41409 Kono Yasuyuki; and Rambo, A. Terry. Some Key Issues Relating to Sustainable Agro-resources Management in the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia.

書評 [Book Review]

- 41410 辻井洋行 [Tsujii Hiroyuki]. 植木真理子, 『経営技術の国際移転と人材育成——日タイ合弁自動車企業の実証分析』 [Ueki Mariko, *International Transfer of Managerial Skills and Human Resources Development: Empirical Study of Japanese & Thai Automotive Joint Companies*].

3. *Kyoto Review of Southeast Asia*

オンライン・ジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* (<http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp>) の第2号から5号までの内容を以下にあげる。

Issue 2 / Disaster and Rehabilitation / October 2002

Editorial

Disaster and Rehabilitation, by Yamada Isamu

In This Issue of the Kyoto Review, by Donna J. Amoroso

Review Essays (*abstracted in Indonesian, English, Filipino, Japanese, and Thai*)

Community Forestry and the Stewardship of Tropical Forests in Asia, by Wil de Jong

“Community Forest” and Thai Rural Society, by Fujita Wataru

Trends in Ecological Studies of West Malaysian Rainforests, by Momose Kuniyasu

Illegal Logging—History and Lessons from Indonesia, by Sato Yuichi

Features

Gender and the Management of Nature Reserves in Vietnam, by Tuong Vi Pham

Is Sustainable Mangrove Management Possible? by Le Thi Van Hue

Ecotourism in Vietnam: Potential and Reality, by Phan Nguyen Hong, Quan Thi Quynh Dao, and Le Kim Thoa

On the Politics of Nature Conservation in Thailand, by Pinkaew Laungaramsri

Constraints on People’s Participation in Forest Management in Thailand, by Pearmsak Makarabhirom

Commentary: Hjorleifur Jonsson on Nature Preservation and International Finance

Commentary: D.G. Donovan on Globalization from the Lao Hinterlands

Commentary: Zawawi Ibrahim on the Changing Environment of the Penans in Baram Sarawak

Reprints

The Stink That Won’t Go Away, by Jet Damazo

Garbage Nightmares: Forum on Garbage and Solid Waste Management, University of the Philippines, Diliman, March 4–8, 2002

Mainstream Development, by Piyaporn Wongruang

Chao Phya: A River Fraught with Danger, by Kamol Sukin and Sirinart Sirisunthorn

Books of Note

Laporan Akhir: Studi Perencanaan Partispatif Pulau-Pulau Kecil Di Kota Makassar (Final report:

Study on participatory planning in small islands of Makassar), by Hamamoto Satoko
EIA & Telapak, *Timber Trafficking: Illegal Logging in Indonesia, South East Asia and International Consumption of Illegally Sourced Timber*, by Kato Tsuyoshi
Michael Leigh, ed., *Borneo 2000: Environment, Conservation and Land*, by Ichikawa Masahiro

Film Review—"Bendum: In the Heart of Mindanao," by Coeli Barry and Donna J. Amoroso

Issue 3 / Nations and Other Stories / March 2003

Editorial

Nations and Other Stories, by Donna J. Amoroso

Review Essays (*abstracted in Indonesian, English, Filipino, Japanese, and Thai*)

Towards Reinventing Indonesian Nationalist Historiography, by Rommel Curaming

Making Sense of Malaysia, by Donna J. Amoroso

Exposition, Critique, and New Directions for Pantayong Pananaw, by Ramon Guillermo

Problems in Contemporary Thai Nationalist Historiography, by Patrick Jory

Features

Said Zahari's Long Nights, by Abdul Rahman Embong

On Knowledge, the Nation, and Universals, by Kasian Tejapira

To Suffer Thy *Comrades*, by Robert Francis Garcia

IT and the Study of History, by Chalong Soontravanich

Research and Documentation: Hamashita Takeshi on Ryukyu Networks in Maritime Asia

Research and Documentation: The Rekidai Hoan: Documents of the Ryukyu Kingdom

Research and Documentation: Liu Hong on Southeast Asian Studies in Greater China

Research and Documentation: Onimaru Takeshi on Japanese Studies on Communism in Asia

Research and Documentation: The Osaka Museum of Ethnology

Research and Documentation: Wu Xiao An on Centers for Chinese Studies in SEA

Reprints

Thailand-Cambodia: A Love-Hate Relationship, by Charnvit Kasetsiri

The Thai Cultural Constitution, by Nidhi Eoseewong

The Chinese in the Collective Memory of the Indonesian Nation, by Asvi Warman Adam

Books of Note

Rusli Amran and the Rewriting of Minangkabau History, by Jeffrey Hadler

Patricia M. Pelley, *Postcolonial Vietnam: New Histories of the National Past*, by Haydon L. Cherry

Confucianism in Vietnam, by Bruce Lockhart

Philip E. Catton, *Diem's Final Failure: Prelude to America's War in Vietnam*, by Edward Miller

Filomeno V. Aguilar, Jr., *Clash of Spirits: The History of Power and Sugar Planter Hegemony on a Visayan Island*, by Kenneth Paul Andrew Sze-Sian Tan

Marites N. Sison and Yvonne T. Chua, *Armando J. Malay: A Guardian of Memory (The Life and Times of a Filipino Journalist and Activist)*, by Patricio N. Abinales

Amitav Ghosh, *The Glass Palace*, by Sumit K. Mandal

Issue 4 / Regional Economic Integration / October 2003

Editorial

In This Issue and Coming Next . . . Islam, by Donna J. Amoroso

The Electronic Cultural Atlas Initiative, by Caverlee Cary, Leedom Lefferts, and Donna J.

Amoroso

Review Essays (*abstracted in Indonesian, English, Filipino, Japanese, and Thai*)

An Assessment of the Philippine Economy, by Germelino M. Bautista

Malaysian Chinese Business: Who Survived the Crisis? by Lee Kam Hing and Lee Poh Ping

Overseas Filipino Workers, Labor Circulation in Southeast Asia, and the (Mis) management of Overseas Migration Programs, by Odine de Guzman

Recent Research on Human Trafficking in Mainland Southeast Asia, by Supang Chantanavich

Features

Economic Regionalization in East Asia, by Urata Shujiro

Commentary: Kenichi Ohno: Will Vietnam's Growth Last?

Thailand's Positioning in a New Global Economic Paradigm, by Olarn Chaipravat

The Philosophy of Sufficiency Economy, by Medhi Krongkaew

Indonesian Migrant Workers in Japan: Typology and Human Rights, by Haning Romdiati

Focus on: NGOs Helping Migrant Workers in Japan

Japanese Government Support for Cultural Exports, by Nissim Otmazgin

Will the Mekong Survive Globalization? by Charnvit Kasetsiri

The "Bombay 5-6": Last Resource Informal Financiers for Philippine Micro-Enterprises, by Kondo Mari

Reprints

Mahathir's Economic Legacy, by Jomo K.S.

Economic Partnerships with ASEAN Members are Necessary, by Shiraishi Takashi

Sumatran Villagers Sue Japan over ODA Dam, by Amanda Suutari

Public Perceptions of Indonesia's Crisis, by Jasmin Sungkar

Renditions: Madness at Simpang Kraft, by Chik Rini

Books of Note

Arsenio Balisacan and Hal Hill, eds., *The Philippine Economy: Development, Policies, and Challenges*, by Eric Batalla

Notice for IDEAs, by IDEAs Executive Committee

Notice for International Journal of Business and Society, by IJBS editors

David Bouchier and Vedi Hadiz, eds., *Indonesian Politics and Society: A Reader*, by Patrick Jory

Edward Aspinnall and Greg Fealy, eds., *Local Power and Politics in Indonesia: Decentralisation and Democratisation*; Leo Suryadinata, Evi N. Arifin, and Aris Ananta, eds., *Indonesia's Population: Ethnicity and Religion in a Changing Political Landscape*, by Wahyu Prasetyawan

The *Newsbreak* Story, by *Newsbreak* editors

Notice for *Focus: Forum on Contemporary Arts & Society*, by *Focus* editors

Notice for *Wacana Seni: Journal of Arts Discourse*, by *Wacana Seni* editors

Issue 5 / Islam in Southeast Asia / March 2004

Editorial

In This Issue, by Donna J. Amoroso

Digital Dataset Critique, by Caverlee Cary

Review Essays (*abstracted in Indonesian, English, Filipino, Japanese, and Thai*)

Mapping the Terrain: Politics and Cultures of Islamization of Knowledge in Malaysia, by Alexander Horstmann

Women, Islam, and the Law, by Patricio N. Abinales

Features

- Workshop Report: "A Plural Peninsula" at Walailak University
Ties of Brotherhood: Cultural Roots of Southern Thailand and Northern Malaysia, by Suthiwong Phongphaibun
Vietnam-Champa Relations and the Malay-Islam Regional Network in the 17th–19th Centuries, by Danny Wong Tze Ken
Democracy Takes a Thumping: Islamist and Democratic Opposition in Malaysia's Electoral Authoritarian Regime, by Dan Slater
Yunnanese Muslims along the Northern Thai Border, by Wang Liulan
Moderate Indonesian Muslim Rejection of the US Attack on Iraq, by Nong Darol Mahmada
For the Record: An Anti-War Protest in Jakarta Days Before the Bali Bomb Attacks, by Sumit K. Mandal
Economic Development, Security, and Conflict Prevention in Southern Mindanao, by Tina Cuyugan
Comment on ARMM Education Policies, by Masako Ishii
Malaysia's Growing Economic Relations with the Muslim World, by Khadijah Md. Khalid

Reprints

- Islamic Art in Southeast Asia, by Patricia Ma. Araneta
Renditions: Blue Blood of the Big Astana, by Ibrahim A. Jubaira
[Above in Filipino, Indonesian, Thai]
After the Fall of Baghdad, by Ulil Abshar-Abdalla
Peace Demands Trust and Truth, by Sanitsuda Ekachai
Women and Islam in Malaysia, by Rose Ismail
Young Muslims Speak Out, by Purwani Diyah Prabandari
Beyond the Jilbab, by Andreas Harsono

Books of Note

- URL: < davidrumsey.com > by Caverlee Cary
Fatima Mernissi, *Islam and Democracy: Fear of the Modern World*, by Shanon Shah
Virginia Hooker and Norani Othman, editors, *Malaysia: Islam, Society and Politics*, by Carole Faucher
Hasan Madmarn, *The Pondok and the Madrasah in Patani*, by Naimah Talib
刘宏 (Liu Hong), 战后新加坡华人社会的嬗变：本土情怀, 区域网, 全球视野 (The Transformation of Chinese Society in Postwar Singapore: Localizing Process, Regional Networking, and Global Perspective), by Yow Cheun Hoe

4. 研究報告書シリーズ

研究報告書シリーズは、東南アジア研究所が単行本として出版したもので、シンポジウムの報告書、科学研究費補助金による海外学術調査の報告書、その他の研究奨学金を受けて行った研究の報告書など、各種のものを含んでいる。既刊のものを以下に年度順にあげる。

1. KAWAGUCHI, Keizaburo, ed. 1965. *Rice Culture in Malaya*, Symposium Series No. 1.
2. INOKI, Masamichi, ed. 1966. *Japan's Future in Southeast Asia*, Symposium Series No. 2.

3. FUJIOKA, Yoshikazu, ed. 1966. *Water Resource Utilization in Southeast Asia*, Symposium Series No. 3.
4. HIGASHI, Noboru, ed. 1968. *Medical Problems in Southeast Asia*, Symposium Series No. 4.
5. 市村 真一 編. 1975. 『稲と農民』
6. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1977. *Preliminary Report on Role of Education in the Rural Development of Southeast Asia: Thailand and Malaysia*.
7. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1979. *Econometric Models of Asian Countries I*.
8. ICHIMURA, Shinichi; and MIZUNO, Koichi, eds. 1979. *Ecology, New Technology, and Rural Development in Thailand and Malaysia* (with Special Reference to the Role of Education).
9. ICHIMURA, Shinichi, ed. 1980. *Econometric Models of Asian Countries II*.
10. TSUBOUCHI, Yoshihiro; NASRLIDDIN, Iljas; TAKAYA, Yoshikazu; and RASJID, Hanafiah A., eds. 1980. *South Sumatra, Man and Agriculture*.
11. WATABE, Tadayo, ed. 1981. *Report of the Scientific Survey on Traditional Cropping Systems in Tropical Asia, Part 1: India and Sri Lanka, Part 2: Indonesia*.
12. MATTULADA; and MAEDA, Narifumi, eds. 1982. *Villages and the Agricultural Landscape in South Sulawesi*.
13. TAKAYA, Yoshikazu; and Narong THIRAMONGKOL. 1982. *Chao Phraya Delta of Thailand* (Asian Rice-Land Inventory: A Descriptive Atlas, No. 1).
14. 渡部 忠世 編. 1982. 『南西諸島農耕における南方の要素』
15. FUKUI, Hayao; KAIDA, Yoshihiro; and KUCHIBA, Masuo, eds. 1983. *A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand* (An Interim Report).
16. THAN TUN, ed. 1983. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part One, A. D. 1598-1648*.
17. JAYAWARDENA, S. D. G.; and MAEDA, Narifumi, eds. 1984. *Transformation of the Agricultural Landscape in Sri Lanka and South India*.
18. Boonyawart LUMPAOPONG; Jitti PINTHONG; Chavalit CHALOTHON; and KAIDA, Yoshihiro. 1984. *Chiang Mai-Lamphun Valley, Thailand* (Asian Rice-land Inventory: A Descriptive Atlas, No. 2).
19. MATTULADA; and MAEDA, Narifumi, eds. 1984. *Transformation of the Agricultural Landscape in Indonesia*.
20. TSUCHIYA, Kenji, ed. 1984. "States" in Southeast Asia, from "Tradition" to "Modernity."
21. FUKUI, Hayao; KAIDA, Yoshihiro; and KUCHIBA, Masuo, eds. 1985. *A Rice Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand* (The Second Interim Report).
22. THAN TUN, ed. 1985. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Two, A. D. 1649-1750*.

23. THAN TUN, ed. 1985. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Three, A. D. 1751-1781.*
24. KATO, Tsuyoshi; MUCHTAR, Lutfi; and MAEDA, Narifumi, eds. 1986. *Environment, Agriculture and Society in the Malay World.*
25. TANAKA, Koji; MATTULADA; and MAEDA, Narifumi, eds. 1986. *Environment, Landuse and Society in Wallacea.*
26. THAN TUN, ed. 1986. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Four, A. D. 1782-1787.*
27. THAN TUN, ed. 1986. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Five, A. D. 1788-1806.*
28. 高谷 好一 編. 1986. 『東南アジア伝統農業資料集成』第1巻.
29. 渡部 忠世 編. 1986. 『日本農耕文化の展開と系譜——島の視点から』
30. EZAKI, Mitsuo, ed. 1987. *Development Planning and Policies in ASEAN Countries.*
31. THAN TUN, ed. 1987. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Six, A. D. 1807-1810.*
32. 田中 耕司 編. 1987. 『東南アジア伝統農業資料集成』第2巻.
33. JAIM, W. M. H. *et al.* 1987. *Review of Literature* (JSARD Working Paper No. 1)
34. HUQ, Muhammad Ammer-Ul. 1987. *Review of Literature on Planning Studies in Bangladesh* (JSARD Working Paper No. 2).
35. SOLAIMAN, M. 1987. *Review of Literature: Institution Building* (JSARD Working Paper No. 3).
36. NOMA, Haruo; and CHAKRABORTY, Ratan Lal, eds. 1987. *Selections of Records on Agriculture, Land Tenure and Economy of Mymensingh District, 1787-1866* (JSARD Working Paper No. 4).
37. THAN TUN, ed. 1988. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Seven, A. D. 1811-1819.*
38. TAKAYA, Yoshikazu, ed. 1988. *Madagascar: Perspectives from the Malay World.*
39. 高谷 好一 編. 1988. 『古代稲作農耕の学際的研究』
40. 柴山 守 編. 1988. 『東南アジア学研究支援：多言語テキスト処理システムの研究』
41. KUMAGAI, Toru; and KAIDA, Yoshihiro. 1988. *Gobarchitra Village and Chandpur Irrigation Project* (JSARD Working Paper No. 5).
42. FUKUI, Hayao; KAIDA, Yoshihiro; and KUCHIBA, Masuo, eds. 1988. *A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand* (The Third Interim Report).
43. THAN TUN, ed. 1988. *The Royal Order of Burma, A. D. 1598-1885, Part Eight, A. D. 1819-1853.*
44. Aris PONIMAN; 高谷 好一. 1988. 『伝統農業フィールドノート集』第1巻.
45. SAKURAI, Yumio; and NITTA, Eiji, eds. 1988. *Primitive Agriculture in Viet Nam and Japan I.*
46. 桜井由躬雄; 新田 栄治 編. 1988. 『日本・ベトナム初期農耕比較論 II』
47. YOSHIHARA, Kunio, ed. 1989. *Oei Tiong Ham Concern: The First Business Empire of Southeast Asia.*
48. TSUBOUCHI, Yoshihiro, ed. 1989. *The Formation of Urban Civilization in Southeast Asia.*

49. YOSHIHARA, Kunio, ed. 1989. *Thai Perceptions of Japanese Modernization* (Published in association with Falcon Press Sdn. Bhd., Kuala Lumpur).
50. SAKURAI, Yumio. 1989. *Land, Water, Rice, and Men in Early Vietnam: Agrarian Adaptation and Socio-Political Organization* (Translated by Thomas A. Stanley).
51. Marasri SIVARAKS, compiled. 1989. *Catalog of Thai Cremation Volumes in the Charas Collection*.
52. THAN TUN, ed. 1989. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Nine, A. D. 1853-1885*.
53. THAN TUN, ed. 1990. *The Royal Orders of Burma, A. D. 1598-1885, Part Ten, Epilogue, Glossary and Index*.
54. YOSHIHARA, Kunio, ed. 1990. *Japan in Thailand* (Published in association with Falcon Press Sdn. Bhd., Kuala Lumpur).
55. 田中 耕司 編. 1990. 『東南アジア伝統農業資料集成』第3巻.
56. NAI PAN HLA. 1990. *An Introduction to Mon Language*.
57. TSUBOUCHI, Yoshihiro, ed. 1991. *The Formation of Urban Civilization in Southeast Asia 2*.
58. 坪内 良博 編. 1991. 『集落人口の性格と変動に関する比較社会学的研究』
59. 高谷 好一 編. 1991. 『フロンティア空間としての東南アジア』
60. 田中 耕司 編. 1991. 『東南アジア伝統農業資料集成』第4巻.
61. 深見 純生 訳. 古川 久雄 編. 1991. 『ジャワ・マドゥラ古代遺跡・遺物目録』
62. 古川 久雄; 渡部 武 編. 1993. 『中国先史・古代農耕関係資料集成』
63. 田中 耕司 編. 1994. 『東南アジア海域世界の森と海』
64. Sujin BUTDISUWAN. 1995. *Cumulative Index for Thai Book Collection (1989-Jan. 1995) in the Library of the Center for Southeast Asian Studies Kyoto University*.
65. FUKUI Hayao, ed. 1995. *Cross-Border Perspectives from Thailand and Malaysia*.
66. FUKUI Hayao, ed. 1996. *Transformation of Agriculture in Northeast Thailand*.
67. Phongpharn LAWANANONT. 1996. *List of Thai Books of the Center for Southeast Asian Studies Library*.
68. ZAWAWI IBRAHIM, ed. 1996. *Mediating Identities in Changing Malaysia*.
69. ROHAYA UMAR. 1997. *Senarai Perolehan Perpustakaan 1997: Bahasa Indonesia dan Malaysia*.
70. KATO, Tsuyoshi, ed. 1997. *Studies on the Dynamics of the Frontier World in Insular Southeast Asia*.
71. TSUCHIYA, Kenji; and KATO, Tsuyoshi, eds. 1997. *An Integrated Study on the Dynamics of the Maritime World of Southeast Asia*.
72. Kanchanaporn CHITSANGA. 1997. *List of Thai Books of The Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University No. 15*.
73. HAYASHI, Yukio, compiled. 1998. *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia vol. 1: Papers presented at the "International Co-Workshop on the Projects of 'Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia (CSEAS, Kyoto University)' and 'Social and Cultural History of the Tai Peoples (Chulalongkorn University),'"* Chiang Mai, Thailand, March 28-29, 1998. Bangkok: CSEAS, Kyoto University Bangkok Office.

74. SAULIAH Saleh. 1998. *Daftar Buku-Buku Tentang Indonesia dalam Bahasa Indonesia Koleksi Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University.*
75. Amphorn WONGTHANGSAWAT. 1999. *List of Thai Books of Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University.*
76. Amphorn WONGTHANGSAWAT. 1999. *Subject Headings of Thai Publication in the Library of Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University.*
77. 玉田 芳史 編. 1999. 『ニティ選書』
78. FUKUI, Hayao, ed. 1999. *The Dry Areas in Southeast Asia: Harsh or Benign Environment.*
79. BACHTAR, Mulni Adelina. 1999. *Daftar Pengadaan Bahan Pustaka 1999 Bahasa Indonesia dan Bahasa Malaysia.*
80. BACHTAR, Mulni Adelina, compiled. 1999. *Women Development in Southeast Asia: A Bibliography.*
81. HAYASE, Shinzo; NON, Domingo M.; and ULAEN, Alex J., compiled. 1999. *Silsilas/Tarsilas (Genealogies) and Historical Narratives in Sarangani Bay and Davao Gulf Regions, South Mindanao, Philippines, and Sangihe-Talaud Islands, North Sulawesi, Indonesia.*
82. Vasin CHOOPRAYOON. 2000. *Library Acquisition List: Thai Materials*, No. 17.
83. Vasin CHOOPRAYOON. 2000. *Thai Material Database Management System in the Library of the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.*
84. CHE PUTEH ISMAIL. 2000. *Library Aquisitions List Bahasa Indonesia and Bahasa Malaysia.*
85. CHE PUTEH ISMAIL, compiled. 2000. *Bahasa dan Kesusasteraan Melayu Sebuah Bibliografi 1990–1999.*
86. Kannikar LINPISAL. 2001. *Library Acquisition List: Thai Materials.*
87. Kannikar LINPISAL. 2001. *Standardized Romanization of Thai Government Agency Names in Thai Publication Titles.*
88. LYE Tuck-Po, ed. 2001. *Orang Asli of Peninsular Malaysia: A Comprehensive and Annotated Bibliography.*
89. Sompong CHAROENSIRI. 2001. *Database Management Systems for Thai Collection in the Center for Southeast Asian Studies (Library) Kyoto University.*
90. LENG Ten Moi. 2002. *Online Cataloging of Indonesian and Malaysian Materials: An Input Manual.*
91. 田中 耕司 編. 2002. 『フロンティア社会の地域間比較研究』
92. HAYASHI Yukio; and Yang GUANGYUAN, eds. 2000. *Dynamics of Ethnic Cultures Across National Boundaries in Southwestern China and Mainland Southeast Asia: Relations, Societies, and Languages (中国西南地区与東南亜大陸跨境民族文化動態)*. Chiang Mai: Ming Muang Publishing House.
93. HAYASHI Yukio; and Aroonrut WICHENKEEO, eds. 2002. *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China*. Bangkok: Amarin Printing and Publishing.

94. Maria GINTING, compiled. 2002. *A Bibliography of Journals from Southeast Asia in the CSEAS Library.*
95. Chantanee PANISHPON, compiled.
2003. *Lists of Websites of Socio-Economic Indicators of the ASEAN Countries.*
96. Chantanee PANISHPON, compiled.
2003. *Southeast Asian Studies on the Interest Sources.*
97. HAMASHITA, Takeshi; and SHIRAISHI, Takashi, eds.
2003. *Hegemony, Technocracy, Networks: Papers Presented at Core University Program Workshop on Networks, Hegemony and Technocracy, Kyoto, March 25-26, 2002.*
98. HAYASHI Yukio; and Thongsa SAYAVONGKHAMDY, eds.
2003. *Cultural Diversity and Conservation in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China Regional Dynamics in the Past and Present.* Bangkok: Amarin Printing and Publishing.
99. Rosnah SULIMAN, compiled. 2003. *Internet Resources on Southeast Asia Studies: A Bibliography.*
100. Salvacion M. ARLANTE, compiled.
2004. *Non-English Materials on Philippine Studies at CSEAS Library: A Research Guide. Part I-III.*
101. ABE Shigeyuki; and Bhanupong NIDHIPRABHA, eds.
2004. *State, Market, Society, and Economic Cooperation in Asia: JSPS-NRCT Core University Project Report.*

なお、東南ア研関係者の研究報告書のうち、東南ア研以外の機関により出版されたものを、参考までに掲げておく。

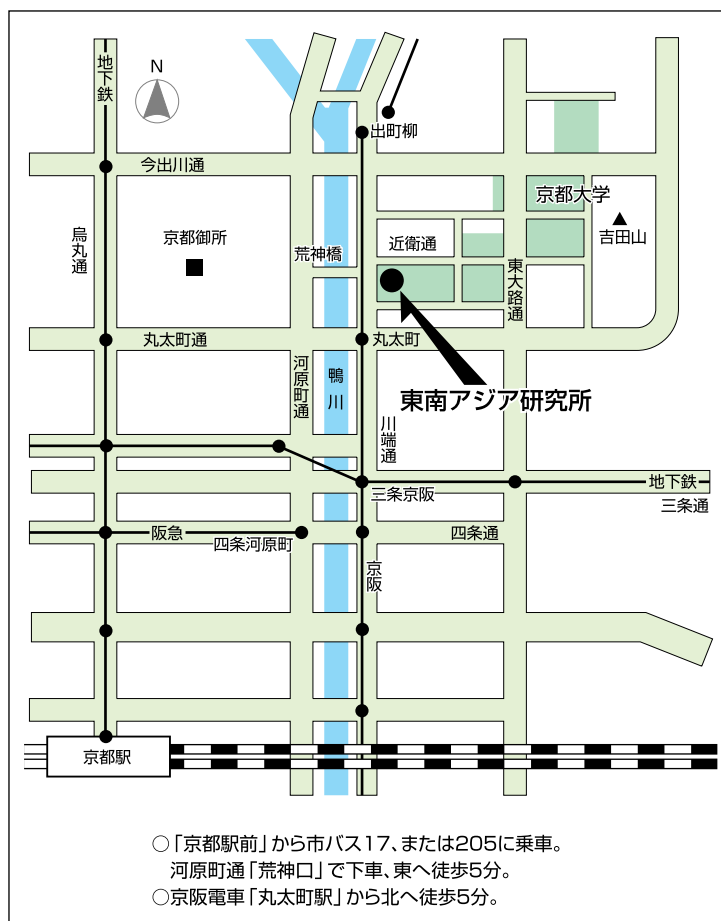
JSARD Publication Series (Published by JICA Bangladesh Office)

1. JSARD Editorial Committee, ed.
1988. *Proceedings of the Mid-term Review Workshop of JSARD, January 24, 1988* (JSARD Publication No. 6).
2. KAIDA, Yoshihiro; and HOSSAIN, S. M. Altaf, eds.
1988. *Gobarchitra Village in Chandpur* (JSARD Publication No. 7).
3. UCHIDA, Haruo *et al.*, eds. 1988. *Jawar Village in Kishoreganj* (JSARD Publication No. 8).
4. HOSSAIN, S. M. Altaf. 1988. *Evolution of Cropping Systems in My-mensingh and Comilla Regions* (JSARD Publication No. 12).
5. NISHIMURA, Hiroyuki *et al.*, eds.
1989. *Three Villages in Comilla* (JSARD Publication No. 9).
6. MAHARJAN, Keshav Lall. 1989. *Phanishair Village in Chandpur* (JSARD Publication No. 11).
7. CHAKRABORTY, Ratan Lal; and NOMA, Haruo, compiled.
1989. *Select Records on Agriculture and Economy of Comilla District, 1782-1867* (JSARD Publication No. 13).
8. MAMUN, Abdullah Al. 1989. *Agro-ecological Studies of Weed in Bangladesh* (JSARD Publication No. 14).

9. NOMA, Haruo; and CHAKRABORTY, Ratan Lal, compiled. 1990. *Select Records on Agriculture, Land Revenue, Economy and Society of Noakhali District, 1849–1878* (JSARD Publication No. 15).
10. KAIDA, Yoshihiro, ed. 1990. *Tetulia Village in Bogra* (JSARD Publication No. 16).
11. MAMUN, A. Al. 1990. *Agro-ecological Studies of Weeds and Weed Control in a Flood-prone Village of Bangladesh* (JSARD Publication No. 17).
12. JSARD Editorial Committee, ed. 1990. *Proceedings of the Second JSARD Workshop, Held on August 20–21, 1989* (JSARD Publication No. 18).
13. KAIDA, Yoshihiro, ed. 1990. *A Review of Related Studies* (JSARD Publication No. 19).
14. KAIDA, Yoshihiro *et al.*, eds. 1990. *Key Questions and Issues from Village-Based Studies, 1986–1989* (JSARD Publication No. 20).

JSRDE Publication Series (Published by JICA Bangladesh Office and BARD)

1. BEGUM, Saleha, ed. 1994. *Report of the Seminar on Mid-Term Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project, 22nd December 1993.*
2. ISLAM, Md. Mazharul *et al.*, eds. 1994. *Report of the Workshop on Mid-Term Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project, 7th and 8th December 1993.*
3. BEGUM, Saleha *et al.*, eds. 1995. *Annual Report 1993–94: Joint Study on Rural Development Experiment Project.*
4. ISLAM, Md. Mazharul *et al.*, eds. 1995. *Report of the Workshop on Final Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project, 9th to 11th July.*
5. KAIDA, Yoshihiro; and BEGUM, Saleha, eds. 1995. *Report of the Final Seminar on Joint Study on Rural Development Experiment (JSRDE) Project, 21st November 1995.*
6. KAIDA, Yoshihiro *et al.*, eds. 1995. *Final Report on Joint Study on Rural Development Experiment (JSRDE) Project.*



京都大学東南アジア研究所要覧

平成16年度

2004年5月1日 発行

編集・発行者 京都大学東南アジア研究所

〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46

電話 075-753-7302 ファックス 075-753-7350

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

印刷 明文舎印刷株式会社

〒601-8316 京都市南区吉祥院池ノ内町10

©京都大学東南アジア研究所 2004

ISBN4-901668-11-0

